



一、同 壹貫文 箭檢見
一、同 壹貫文 札 錢

右之通、堂前稽古之方々可被出之。勿論堂守之斷可有之、縁之上々芝矢一切射
るからざる者也。右之趣御奉行に得御下知に之間、違背不可有之者也。

年號月日

一、右御定日渡部大隈守様○綱 島田出雲守様○忠 御願申上、寛文拾年戌極
月廿八日頂戴仕い。

先年御修復被爲仰付い覺

一、神尾備前守様○元 石谷將監様○貞 御時、明曆三年酉十一月四日、爲御修
復料銀百貫目拜領仕い。

一、渡部大隅守様島田出雲守様御時、寛文拾年戌八月十一日爲御修復料金子
千兩拜領仕い。

一、島田出雲守様甲斐庄飛驒守様○正 御時、延寶八年申十一月九日、爲御修
復料金百六拾兩拜領仕い。

一、甲斐庄飛驒守様北條安房守様○平 御時、貞享三年寅三月御普請方に被爲

市街恢弘時代

仰付、御修復出來仕い。

一、北條安房守様能勢出雲守様相。頼御時、元祿六年酉九月十日爲御修復料金五百兩拜領仕い。

一、元祿十一年寅九月六日淺草三拾三間堂類燒仕いニ付、則川口攝津守様宗。恒。廣。嘉松前伊豆守様廣。嘉訴訟申上い。

一、同十月十三日松前伊豆守様被召出、堂地之儀と御用ニ付被召上い。代地之儀と、追々可被仰付い由被仰渡い。

一、同十二月廿三日松前伊豆守様被召上い。代地之儀、深川八幡近所ニ御渡被遊い段被仰渡、其上御材木大小三千六百本掛ヶ塚榑木六百挺被下置い。間、難有可奉存旨、被爲仰付い。

一、元祿十二年卯五月廿五日深川ニ御只今之地面拜領仕い。

一、御入用之儀、諸大名様々勸金、左之通割合を以頂戴仕い。

一、金五兩

但、壹萬石々二萬九千九百石餘迄。

一、金七兩

但、三萬石々四萬九千九百石餘迄。

一、金拾三兩

但、五萬石々九萬九千九百石餘迄。

一、金貳拾兩

但、拾萬石々拾四萬九千九百石餘迄。

一、金三拾兩

但、拾五萬石々拾九萬九千九百石餘迄。

一、金四拾兩

但、貳拾萬石々貳拾四萬九千九百石餘迄。

一、金五拾兩

但、貳拾五萬石々貳拾九萬九千九百石餘迄。

一、金六拾兩

但、三拾萬石々三拾九萬九千九百石餘迄。

一、金八拾兩

但、四拾萬石々四拾九萬九千九百石餘迄。

一金百兩

但、五拾萬石以上。

勸金

都合金三千五百四拾三兩。

右之通割合勸金頂戴仕、元祿十四年巳十一月迄ニ多不殘御普請出來仕。

一、元祿十六年未十一月廿二日夜大地震ニ堂破損仕、ニ付、則御訴申上、其後

御修復御願申上、得志、寶永七年寅七月十日松野壹岐守様義〇助被召出、爲御

修復料銀子五百枚御樽木貳千挺拜領仕。

一、正徳三年巳十二月廿二日之火之節、三拾三間堂類燒仕、ニ付、丹羽遠江

守様〇長松野壹岐守様義〇助坪内能登守様〇助御訴申上、堂御造立之儀、先年

之通被爲仰付被下、様ニ、段々御願申上、得志、正徳五年未九月十九日中山

出雲守様〇時被召出、先年之通、從御公儀様御材木千三百三拾四本御樽木

壹萬挺被下置、間難有可奉存旨、被仰渡、御入用金之儀も、先例之通、割合を以

御大名様方勸金頂戴仕、正徳六年申六月迄ニ御普請不殘出來仕。

勸金都合金三千五百貳拾八兩。

但、此節乾字金也。

右之通、相違無御座、以上。

享保十年巳七月

堂

久守 右衛門

右ニ、三拾三間堂由緒相尋、ニ付、享保十巳年堂守久右衛門差出。

——享保撰要類集

深川三拾三間堂町〇中

一、町方起立之儀、寛永十九年十一月廿三日三拾三間堂屋鋪地、始於淺

草、六千貳百四拾七坪八合之地所被下置、右堂出來。〇中

三拾三間堂起立并追々御修復年代書上

一、三拾三間堂起立之儀、慈眼大師様〇僧思召之由ニ多、松平伊賀守様御吹

舉被遊、寛永拾九年十一月廿三日弓師備後〇於淺草六千貳百四拾七坪八

合之堂地拜領被仰付、私先祖久右衛門儀、本材木町ニ罷在、節、三拾三間堂造

立請負仕、代金千五百兩、備後儀一向差出し不申、其上同人儀、諸家様勸

金取集方之儀ニ付、不埒有之、間、寛永貳拾一申年十一月二日備後久右衛門

一同御評定所被召出、松平伊賀守様、松平出雲守様、安藤右京進様、朝倉石見

守様、神尾備前守様御列座ニ多、堂屋敷永代久右衛門之拜領被仰付ハ間難有堂守仕ハ様被仰渡、備後儀ニ御追放被仰付ハ其節先祖久右衛門之御老中様方々重キ御意共有之、未々迄之儀被仰渡、重々難有仕合奉存、依之爲冥加其節より御老中様方々些少之品奉差上、若御年寄様共、年始歳暮御禮只今ニ至相勤來申ハ、略。○中

寛文十戌年八月

堂 守 久 右 衛 門

多田所右衛門殿

酒依長兵衛殿

小林金右衛門殿

淺留町

一、町名起立之儀ニ、年舊リハ儀ニ多申傳ニ勿論書留等も無御座、往古ニ此邊都多沼地ニ多、年曆不知、三十三間堂相立申ハ由、申傳ニ多、其後寛永之度、東叡山東谷下寺御取廣ケ之節、三十三間堂ニ深川之相引ケ、下谷邊寺院當所之替地ニ相成ハ由申傳。○下

——文政町方書上

龍光寺門前

一、右龍光寺儀ハ、高野山龍光院末ニ多、往古當地ニ三拾三間堂有之ハ節ハ、同寺義ハ別當ニ有之ハ由申傳へ、龍光寺起立相分不申、門前町屋之儀ハ、年代相知不申、寛永年中迄當地ニ三拾三間堂有之節、右境内御用地ニ相成ハ、○下略。按スルニ府内誌殘編云フ、深川三十三間堂起立書上ヲ閱スルニ、寛永十九年十一月弓師備後ナル者ニ淺草ニ於テ堂地ヲ賜ヒ造立アリ、元祿十一年九月丙丁ノ災ニ罹リシ後、御用地トナリ、同年十二月永代島ニ替地ヲ賜リシト云フ。是ニ據レバ、寺傳ニ寛永中深川ニ移サルト云フハ大ナル謬リニテ、寛永ハ社堂起立ノ年ニシテ深川ヘ轉セリシハ遙ニ後ノコトナリ。又モト別當寺アリシハ、略。○中

——府内備考

三十三間堂蹟 寛永中弓師備後ト云モノ、京三十三間堂ヲ慕シテ江戸ニ建立セシ事ヲ公ニ請シカハ、當所其頃原野或ハ沼ナリシヲ、六千二百四十七坪餘堂地ニ賜フ。其地域ハ東ノ方當町及ヒ坂本町正定、松源二寺ノ境内ニ限リ、南ハ專光、宗安ノ二寺ノ邊ニ至リ、西ハ善徳、正徳、本覺、慈眼、光感等五ヶ寺ノ前、往來ヲ限リ、北ハ清水、實相二寺ノ前、往來ニ至リ、東西凡四十八間餘、南北百三十間餘、堂ハ東ノ方ニ寄ル。堂ノ西ヲ矢場トシ、其北方ニ的場ヲ設ク。今ノ龍光寺境内ノ邊ナリ。此寺ハ當時堂ノ別當ナリシト云フ。今境内ニ、矢先稻荷ト稱スル小社アリ。又北方往還ヲ隔、實相寺境内ハ當時矢先ナリシ故、今ニ土人矢先ノ實相寺ト呼ヘリ。此堂寛永十九年十一月落成ス。本尊ハ千手觀音ナリ。明ル二十年四月二

十二日麾下ノ士吉田久米助長信吉田出雲守重政六代ノ孫命ヲ奉テ射始ノ式ヲ行フ。是江戸ニテ通矢ノ權輿ナリ。正保二年四月ヲ始トシテ元祿十年マテ、藩士十人矢數本堂射越アリ。又寛文八年ヨリ元祿九年マテ諸藩ノ幼齡五人、八歳ヲ始トシテ十四歳ニ至レル者半堂ノ射越等アリ。詳ナル事ハ矢數帳ニ見エタリ。此堂造立ヨリ正保二年マテ弓師備後カ進退ナリシカ、故アリテ此年十月商人久右衛門ニ預ケラレシヨリ、世々進退セリ。明曆三年ヨリ元祿六年マテ五度修理アリシカ、貞享中ノミ公ヨリ修理ヲ加ヘラレ、其余ハ費用ヲ賜リシノミナリ。元祿十一年九月回祿ニ罹リシ後、深川八幡社ノ邊ニ移サレ、爰ハ閑地トナリシヲ、武家屋敷及ヒ寺院町地等ニ賜ハリシナリ。

—府内誌殘編

三拾三間堂址

深川區數矢町舊三拾三間堂町ニアリ。堂東西九四間、南北九六拾六間、其三拾三間、柱間貳間ニシテ、三拾三間タルヲ以テナリ。其東面ニ千手觀音像ヲ安シ、西縁ヲ以テ射場トナス。寛永十九年壬子新兩替町弓師備後ナル者、官ニ請ヒ淺草坂本町新寺町龍光寺門前ノ地今松葉町ニ創建シ、射術演習場トナス。同廿年癸未四月落成シ、吉

田重信桑助。田羽守重政六世ノ孫。幕府ノ命ヲ以テ、射始ノ式ヲ行フ。正保元年甲申十月、堺屋某久左衛門ノ所管トナリ、元祿十一年戊寅九月六日火災ニ罹リ、此地深川區數矢町ニ移シ之ヲ再建シ、略。

—東京通誌

十二月十五日庚辰○寛永十九年(紀元二三〇二年)○庚辰、三正綜覽。目付ニ命シテ府内ノ明屋敷地子屋敷下屋敷ヲ查檢セシム。○寛永日記。

明屋敷地子屋敷下屋敷查檢 寛永日記ニ、

十二月十五日○寛永十九年○中略。

一、江戸中明屋敷地子屋敷下屋敷可相改之旨、御目付中へ被仰付之。

是年元○寛永十九年(紀元二三〇二年)市街ノ起立シタル者有リ。○文政町方書上。

市街起立 寛永十九年中市街ノ起立シタル者ヲ擧グ。

米澤町屋敷 兩國米澤町邊概シテ寺地ナリシモ、町屋敷亦之有リシ者歟。

同斷(○下谷御數寄屋町東南角方)四軒目 御時計之間 柿 澤 宗 祐

右ニ寛永十九年中兩國米澤町之内町屋敷拜領仕罷在ハ處、文化六巳年中下谷御數寄屋町拜領主三田村幸安々相對替仕ハ。

—文政町方書上○下谷御數寄屋町書上。

明屋敷地子屋敷下屋敷查檢

明屋敷地子屋敷下屋敷查檢事蹟

市街起立

市街起立事蹟

米澤町屋敷

白金猿町

白金猿町 是頃已ニ居住者有リタルコト、文政町方書上左ノ如ク記ス。

一、舊家

當町家持 吉 兵 衛

右先祖ニ北條家之臣本間氏之子孫之由、年曆不知當所^{○白金}。ニ住居致、紺屋渡世仕[○]。曆代之儀相知不申[○]。得共、中興先祖[○]相唱[○]者[○]、俗名吉兵衛法名觀翁道浮上座ト申、寛永十九年八月十八日死去仕、品川臺町恩田稻荷境内ニ葬有之[○]。寛文中[○]大崎村壽昌寺ヲ代々菩提所ニ相定申[○]。先年類焼之砌、諸書物等焼失仕、其餘之儀[○]相知不申[○]。右吉兵衛[○]當吉兵衛迄九代相續仕[○]。○白金猿町書上。

千駄谷神明前

千駄谷神明前 是年ヲ以テ神明社地ト爲ル。門前町屋ノ起立年月ヲ明ニセズ。姑ク此ニ附載ス。

靈山寺領千駄ヶ谷神明前

一、右地所之義、往古靈山寺領吉祥寺領入合地之内ニ有之[○]。處、寛永十九年頃神明社地ニ相成[○]。由、尤地頭靈山寺吉祥寺貳ヶ寺[○]右社地除地ニ致置[○]。拜領社地ニ之無[○]御座[○]。得共、前々[○]門前町屋御免ニ相成、延享三寅年中町方御支配ニ相成[○]。由申傳[○]。——文政町方書上

千駄谷村

明

社[○]中略。

一、門前町家、願濟年月、相知不申[○]。間口八間、奥行四間半。

——文政寺社書上

附記 市谷田町壹町目舊家

〔附記〕 市谷田町壹町目舊家 舊家足袋商賣濱松屋庄太夫祖先遠州敷知郡宇布見村郷士中村源左衛門分家惣左衛門繁寛ナル者、寛永十九年町内ニ移リ住シ、子孫文政中迄六代相續シ來レルコト、既ニ之ヲ記ス。

寺社起立轉移

寺社起立轉移

千駄谷神明社

寺社ノ起立轉移シタル者亦有リ。[○]文政寺社書上。
寺社起立轉移 寛永十九年中若干寺社起立轉移ス。
千駄谷神明社 文政寺社書上ニ據ル。

千駄谷村

明

社

一、社地 間口拾間貳尺、奥行四拾八間餘。坪數四百拾四坪。内、六拾坪除地、三百五拾四坪年貢地。元和年中之頃、當村新御鹽焔藏御構内御座[○]。處、寛永十九年當所[○]鎮座御座[○]。其前之儀相知不申[○]。○下略。

種徳寺

種徳寺 麴町十町目ヨリ赤坂三分坂下ニ轉移ス。

市街恢弘時代

一、拜領地五千坪

右之内

一、貸地貳百三十拾坪。

右を安永九庚子年寺社御奉行太田備後守様願出、淺草本願寺末赤坂報土寺の貸地、尤三百三十八坪餘之處、百八坪を右報土寺拜領地面と相對替二仕、残り貳百三十拾坪之貸地ニ御座也。

一、貸地百八坪

右を報土寺地面、右同年相對替二仕、寛政十一未年寺社御奉行服坂中務大輔様願出、赤坂新町三丁目松泉寺の貸地ニ仕也。但二ヶ所共拾ヶ年季。

一、本光山種徳寺を古來小田原城下ニ有之、鎮城山本光寺と號し、是也。

一、開山大室大和尚を、早雲寺開山之弟子早雲寺第二代目也。開基之担越本光寺殿を、則早雲寺殿氏茂公之次男氏綱公之弟北條幻庵綱成公と號し、綱成公之嫡男氏繁ハ、綱成公ニ先達多逝去、氏繁之息氏勝家督相續あり、依之氏勝始る本光寺建立有之也。因る氏康公天文十九戌年ニ虎之御朱印并直判之書物

寺領之水帳等今も所持仕也。但本文之趣前ニ書出し處、元祿年中類焼後朱印直判書物類相見不申也。只今ニある水帳壹冊所持仕也。

一、三代目聖傳和尚、天正十八年小田原陣後權現様御入國之節、御上意ニ御供ニ被召連、小田原の御當地に引移、文祿三甲午年於麴町十丁目ニ寺地拜領仕也。聖傳義、折々被召出、法儀をも御聞被遊也。然ル處小田原陣後之義ニハ、檀那ハ無之相續難成御座也。小笠原播磨守康廣室ハ、北條氏康公之息女ニ御座也。依此因縁被致歸依、中興開基と相成、鎮城山本光寺茲靈鳳山種徳寺と改號有之。寛永二乙丑年六月五日逝去ニる、則法名種徳寺殿惠光宗智大姉と申也。

一、五代目方充大和尚代、寛永十九午年御用地ニ被召上、只今之寺地拜領仕也。
中松 溪院

一、開祖覺翁圓禪師之開基、松溪院殿を往古之分部左京亮殿先室ニる御座也。處、御歸依ニる一字御建立有之、元和八戌年逝去ニる御座也。
中柏 樹庵

一、開祖松岩森禪師 元祿元戊辰年十月廿六日示寂。

市街恢弘時代

一、開祖全叟由禪師 本坊世代ニ無之、承應二癸巳年二月十八日示寂。——文政寺社書上

十方寺 開山寛永十九年ヲ以テ寂ス。

淨土宗下谷源空寺末武州豊島郡駒込着町
一、淨土山正覺院十方寺略。○中

一、開山覺蓮社圓譽靈門

但し、下谷源空寺々隱居仕、當寺を起立、依之源空十方兩寺之開山ニ多御座
い。寛永十九年五月十八日寂。

一、當寺之儀々、元和元年根津ニ多起立御座い所、○下

——文政寺社書上

稱福寺

稱福寺 小石川水道町ヨリ淺草今戸町ニ移ル。

淺草今戸町

一向宗西本願寺末
清國山淨智院稱福寺略。○中

一、起立之年月寛永六己巳年ニ御座い。

一、古へ小石川水道町々寛永拾九年此地へ引申い。——文政寺社書上

淨生院

淨生院 開山是年寂ス。

淺草今戸町

淨土宗本所靈山寺末
安養山極樂寺淨生院

一、開山聽蓮社諦譽上人意阿隨顯和尙。

寛永十九年五月五日、凡百八拾四年ニ相成ル。——文政寺社書上

六郷橋普請

廿年癸未○寛永○紀元
二三〇三年。正月六日辛丑○辛丑、三
正綜覽。書院番桑山貞寄○猪
兵衛。二

命シテ、六郷橋○武
藏國。ヲ普請セシム。○寛永日記。○寛
政重修諸家譜。

六郷橋普請 寛永廿年六郷橋ノ改架有リシ者歟、左ノ如ク傳フ。

○寛永二十年。
五月十五日終日曇。

一、六郷橋之材木、遠州駿州兩國之山入仕可出之旨、揖斐半右衛門○政
軌。岩手佐

五右衛門へ被仰付之云々。

——寛永日記

右野々山新兵衛尋レ之。

貞寄猪兵衛。丹後守。下野守。從五位下。致仕
號可齋。今の呈譜、貞政に作る。○桑山

○下六月○寛永
十六年。御書院番に列し、二十年○寛
永。正月六日仰によりて六郷橋

の普請をうけたまはる。

政軌直太郎。七之助。半右衛門。

大猷院殿につかへたてまつり大番をつとむ。○中
二十年。○寛
五月十五日

市街恢弘時代

六郷橋普請
事蹟

六郷橋普請のとき、岩出佐五右衛門某とおふとく、駿遠兩國の山々より良材を伐出すことを奉行す。

一信佐五右衛門。信敬(○岩出)か呈請に信直に作り、(○中略)

略。○上 寛永二十年五月十五日六郷橋を造らるゝにより揖斐半左衛門ととも、駿遠兩國におもむき、用材を伐事をうけたまはり、○下

——寛政重修諸家譜

附記
隅田川筋
鷹野

〔附記〕 隅田川筋鷹野

正月五日○寛永二十年。

一、公方様御禮後從平川口隅田川筋へ御鷹野。○中

將軍家下總牛島より御鷹野還御の時、隅田川堤の東より白鷹群處、稻富喜大夫直賢を召、銃炮を賜り、彼鷹を追立、飛行所を打るしとあり。直賢畏、走寄聲を揚、鷹を驚け、鷹二丈餘飛上る所、銃炮を放し、不誤中りて田中より落。君御覽有之、直賢拔召大に感美し玉ひ、堀田正盛を亦これ拔感す。台駕二三丁過之後、御腰物持役加藤甚之助治次等より命し、彼鷹を御前より持参せしめ、堀田正盛を以て直賢より仰り曰、銃炮を以て飛鷹、拔打事其例希し、汝う藝尤勝たり是

拔るして子孫より傳へしと。則鷹を玉ふ、親族より饗はべしと也。

——寛永日記

水道利通

三月六日庚子○寛永廿年(紀元二三〇三年)○庚子(紀元二三〇三年)○水水道利通ノ令有リ。○上水

水道利通事蹟

水道利通 人見私記ニ、

寛永二十年三月六日、所々水道水溜拂ノ事、近所ノ屋敷エ申斷、雨天ノ砌、毎度可拂之、近邊ノ屋敷無之所ハ、其モヨリノ輩替々可役之、雖然小身成者ハ、其近邊ノ面々寄合可相拂事、且升形ノ内ニ有之、水溜ハ、當番ノ族可役之、弓銃炮ノ面々番所ハ、黒鍬ノ者可拂之、并橋掃除ノ義、同前ノ事、次ニ屋敷境水道、順々可拂、右申渡之、若滯所於有之ハ、無油斷様急度可申付事、右三ヶ條御目付ノ面々、并道奉行可申付旨、信綱○松重次部、阿申渡。

十日甲辰○寛永廿年(紀元二三〇三年)○甲辰(紀元二三〇三年)○幕府代官事務取扱方ヲ令シ、十一

日乙巳○寛永廿年(紀元二三〇三年)○乙巳(紀元二三〇三年)○更ニ土民仕置方ヲ訓令ス。○御當家令條。武家嚴制錄。

代官事務取扱方訓令 御當家令條○武家嚴制錄同。ヲ抄ス。

覺

一、毎年春夏、面々御代官所より相越堤川除等之御普請、念入見分可申付之。并麥

市街恢弘時代

代官事務取扱方訓令事蹟

作善惡も可見届事。

- 一、秋中も在々所々見廻之、田畑之様子、委細見分いとし、有躰納所可申付事。
- 一、身上よた百姓を、田畑を買取、彌よろしをあり、進退不成をのへ、田畑令沾却、猶々身上ふるへうらひはの間、向後田畑永代之賣買可爲停止事。
- 一、身上不成百姓を、諸代官入情万事可致指引、其上ふる續ぐとき者みは、見合食物之類借之、進退持とていやうみ、可入念事。
- 一、前うと名主百姓ふ御法度之趣能々申聞置、不相背様み可申付事。
- 一、少々違背在之をのこへ、其身み應し、日數相定爲過怠、堤川除又は竹木を植置、其外所を爲ふなるへき御普請可申付之、科おもたをのは、奉行所へ訴之、或死罪或籠舎、任差圖可申付事。
- 一、在々所々御目付可被遣之間、仕置等惡御代官へ、可爲越度之條、手代等至前廉念入可申付事。

右條々、今度被仰出、い間、得其意、無油斷様、御代官衆中へ急度可被相觸者也。

寛永廿年未三月十日

士民仕置條々

- 一、庄屋惣百姓共、自今以後、不應其身家作仕へからず、但町屋之儀を、地頭代官之指圖を受可作事。
- 一、百姓之衣類、此已前々如御法度、庄屋へ妻子ともに紺紬布をめん、わき百姓を、めん計可着之、此外をえり帶等よをいとを間敷事。
- 一、庄屋惣百姓ともに、衣類紫紅梅に染間敷い。此外を何色ふ成共、形ふしに染可着事。
- 一、百姓之食物、常々雜穀を可用、八木へみとり、に不食様可申聞事。
- 一、在々所々ふて、饅飩切麥素麩蕎麥切まんちう豆腐以下、五穀之費み成い間、商買無用事。
- 一、在々所々みて酒一切不可造之、并他所へ買入商賣仕間敷事。
- 一、市町へ出むざと酒のむへからさば事。
- 一、耕作田畑共に手入能いとし、草をも無油斷取之、念入へし、若不念いとし、不届成百姓於在之を、穿鑿之上、曲事可申付事。
- 一、獨身之百姓、煩紛なく、耕作成り多いとたへ、五人組へ不及申いそ、一村として相互に助合、田畑仕付、年貢令收納い様、可仕事。

一、五穀之費不成、以間、たそよの儀、當年より本田畑新田畑ともに一切作まじき事。

一名主惣百姓、男女ともに乗物停止之事。

一、他所より相越、田地をも不作、慥らさるもの、郷中不置間敷也。若陰置いへ、科之輕重を糺し、拘置いをの曲事可申付事。

一、田畑永代之賣買、仕間敷事。

一、百姓年貢其外万訴訟として、所をあけ、缺落仕をの、宿を致ましくい。若於相背て、穿鑿之上、可行曲事事。

一、地頭代官仕置惡い、百姓堪忍あり、うとさと存い、年貢致皆濟、其上を所を立退、近郷ニありとも居住可仕、未進無之いハ、地頭代官うまむ有間敷事。

一、佛事祭禮等、至至、其身不似、合つけかう仕まじき事。

一、江戸惣御構之内、木草并俵物等馬ふつけ、中、乗申間敷事。

右條々、在々所々、堅相觸、向後急度、此旨守い様、常ニ念入可相改者也。

寛永廿年三月十一日

〔附記〕 寛永末ノ江戸

附記
寛永末ノ
江戸

寛永末ノ江戸ヲ見ル可キ者、寛永十九年ニ成リタル、あづま物語有リ。上文之ヲ載ス。廿年春記スル所ニ、あつまを、く、有リ。

上

わがとあふまう志のぶのさとのかをととりよ、おゝるあく月日ををくるものなりし、かふをぬとせ、いよさへら、おゝ、ぬまうせぬたび乃身とな、おまことにしやう、いよ、風のまへのともし、い、あしたをすき、ゆふへをまらぬあさう、海のつゆ、いよ、つま、此うけ、あすをし、さる身、此ゆく、おゝ、かへらぬとのさ、とめ、あけ、おゝ、なよりおし、さ、い、なう、く、よ、身のやるか、ともなければ、とも、おゝ、むむ、しのわ、ま、う、と、おもふ、おゝ、ぬを、た、祿として、みちあるか、と、まよひ、おゝ、り、なう、く、ゆけ、ハ、二本松、こす、おゝ、をつと、ふ、まつ、り、おゝ、ぬ、不、そ、く、を、ゆ、く、おゝ、を、ぬ、の、び、き、や、ま、と、き、く、か、ら、に、一、志、ゆ、の、う、と、よ、かく、おゝ、かり、

り

わう、おゝ、と、人、め、り、さら、おゝ、ぬ、の、ひ、を、きて、と、おゝ、そ、て、の、な、み、と、なり、と、とう、ち、おゝ、い、し、猶、し、を、こ、ハ、本宮、と、き、け、む、な、う、く、ぬ、る、さ、と、に、あり、し、む

うしのもと身の身ハか海とにをのハおもハしとなく縁ささうにたうく
 此、ひらしふ見ゆ程あさうやまふもとにありし山の井乃、志とゆよりけを
 うつせよ、摺やつせえてと程わうせうと、むうし歌人のなりめよも、
 あさう山うけさへ見ゆる山の井と、忍いしたまひしとのを、おもひい
 つきはやさしくを、のきも程水を志のぐらん。ひ里ごのさと、猿せきゆけバ、
 あゝ海をとけぬこ不り山、よしををるかすなりむきは、そのあさうくもあ
 いつをまゆきあろとへまうち見へて、きゆるそかり此里うあゝろ、ひうし
 を見せそあまきし、田むら此こ不りあさくさや、あふくま川のつ里のふ
 手、せきお此うさみひくあまの、めにもろきわがなとど、ゆく忍いあよと
 そう川の、あハ世とたせうあさかハや、二志よのせきよをつきよ帯り。さ世
 はうき世乃ばごめなき、き此ふしのゆのさと猿いて、けふあらかハのせ
 を見程。うつせハかハ程世のあさひ、わがふるさとのこひしさハ、日く夜
 くよまされとをかさりなくさむとをなく、かり縁のとのこのおりくよ、
 ゆめりあさうてハあさ川の、せ業なうわ世をとめをせせ、みちあるかと猿志
 るへとし、おもひ立田のたむころも、摺てよあまとのたへをなくものうき

と猿志う坂や、の不りくざりし身乃ゆく忍、いつくを志と、あさざ世ば、じ
 ひあるかと猿やと、して、よりのさとのう世しきよとまりさよめ、あ
 さひとて、はくあしのをたまりとし、うちこへゆけハいつかまよ、こひし
 き人よ太田原、花ハなけ世とさくやます、不とあくいまハきつ、川なく縁
 とともにうちわたり、うぢ忍のさと猿あゝどとは、いまあさハのふちせ
 よも、志つとせてんとあさましく、すぎゆくまよけふもそや、いりあひう
 手をうつとのとや、す忍ハせよめのとやなれと、とびをこせうんいしとしの、
 むうりたへせぬこり手いや、日光山をめてよ見て、をのうきたむを下野の、
 むろのやしまたつ々ふり、くゆるおもひハわ世ひとり、こゝろをつくそ
 氏くそ縁の、嶺よりおつるみあふの川、おちての此ちはわうとく、いくせよも
 のやおもふらん。をやまのさと猿と猿るふ摺、かそみかく世のそ世まより、
 不のうよ見ゆるをり此草、志けるおもひのそそ忍よを、せめてあゝ海をな
 くさむハ、山といえ世てさあがらよ、かそみうらぬ山もなし。わ世をうき
 世よあ世はこ摺、おもひのいろやか、程らん。うゝ世はをるゝなうひどと、
 わ世とこゝろをなくさめて、をとめのさと猿すぎゆけば、な猿をあゝろに

かふふらん。まゝだのさとよそ程く〜ときいなきころを捨てさむきあきのうらまのあゝちす程のけはさゝ路まこりききてなごともろとをくりそしをわたるわう身此をのうさをいつうさめてのさとなきや。こゝのまゝよ世の中をすきとの里ときくかふよ、たちよ程うげのあさゆふよ、まよふわう身よやさしやふ。今宵乃ると袂かきあべよ、そやあしがへのさとあきばよしある人よそふうをむなぶりたしくも志のゝめ此あけをやらぬまたちいで、八こゑの鳥ともろとをよなく〜と袂るみちをかふむうしげんじのよもぎふのゑいし給ひしとのそを、おもひつゝけてかくてかり、

志のゝめよおきわうきぬるあうつ巻ハなごとにゆけ巻よをきふの巻と

や、かやうみゑいしを花ゆけハ、そや不の〜と夜をあけて、あさぢうそとみつきよなり。

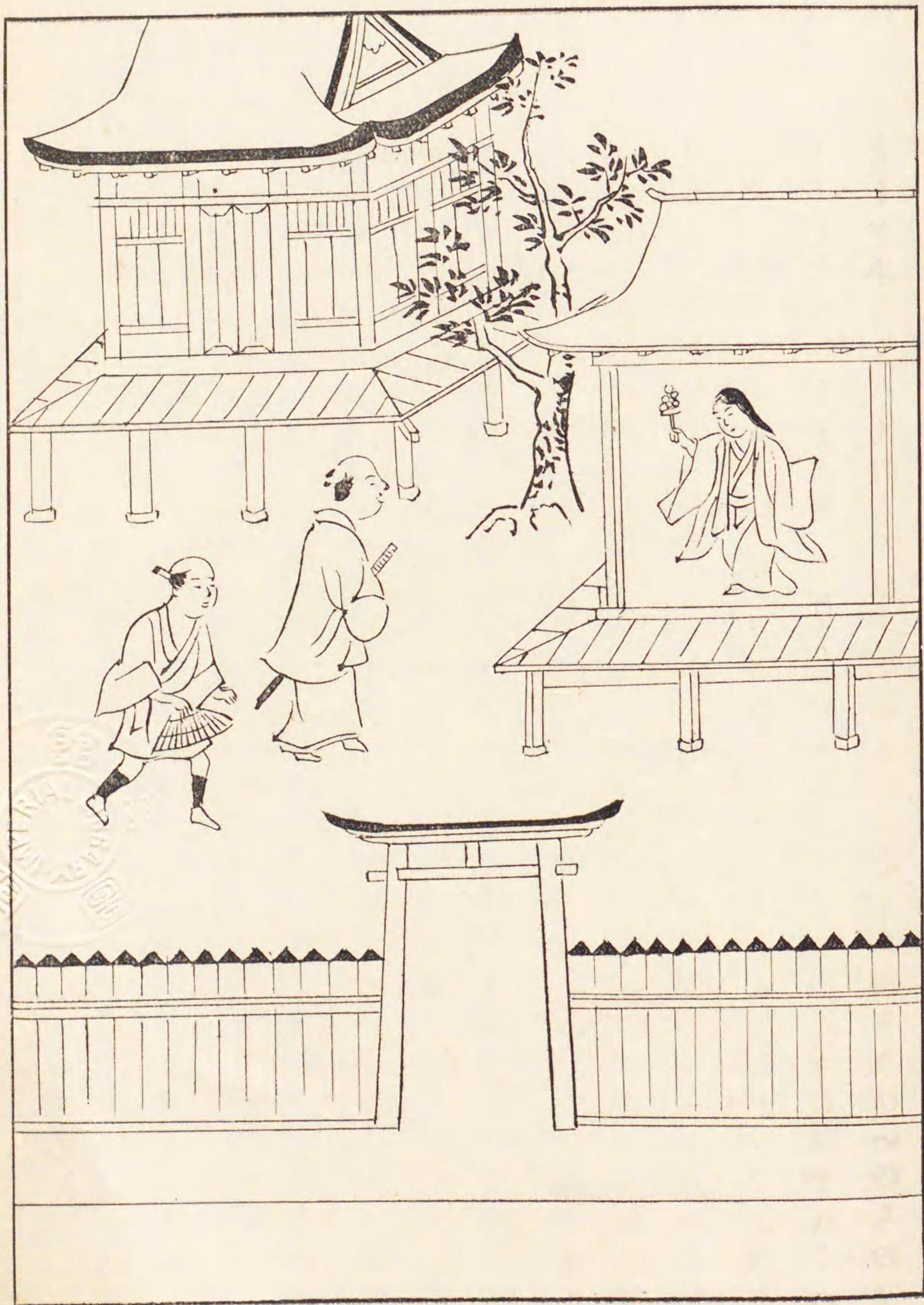
不の〜とあさぢうそとのせりころもきてはうらまのかきぞ身よしむ

と、たへぬおもひをまづり身ハ、せんまゆのさとのよしひうし、こけりの川乃きとまゑ、ながめもせてぬ田の面よ、うへしさあへいつのまよ、くろごとなりていまはそや、まやくの不ごけのすゑしげる、わきハおもひのすゑまきり、なごとのたをまくをらん。めくきあゝるを身よそハぞ、ゆくゑいうよとまづつゆの、そずへにむそふあさ草を、うちこへゆけハ不ごもな、く、むさしの江戸つ巻よ、まぢしふ川のさうひな程をとよきこへし大將とけ、ちやを此あよりよをどをかり、月日をあうしくせし、さてものうきたむの身此、このむたよりをあらバこそ、あけくきまけうとゝひとり、あゝる不そさハさゝがよの、いとそうふくをふるさと袂、いつる月日をうらむきや、かへらぬむかしまらさうぬ、ゆくすゑなきばちうらふく、身をうらまえてハ

あそきけようき時つるゝともをかふ人のなさけハ世よありし時やと、よくこぼこきハいそきと、といふくさむる人ハあし。あまりさびしきおりかたよ、なと袂とちいでとをり町、うあすぎはしをうちわたり、ゆんでを見せハ僧、上寺、ぐくのおもてをながむきは、三えん山とうとれと、さて

本堂の見つけよハ、げまんのそとのかきりふくたまのやうらくつらなり
 て、ひうりかゝやく佛前よ、そちそ此花乃さきとざれ、あひをまのびて不の
 く、とかうのきふりのたちの海程、巻のゆくすゑをふがむれば、五しきの
 雲ようつろひて、とどのらい里んまし、福をハ、巻よをどくらくせういと、
 目をおとろりせそりなり。さきはあまたのいよしへハ、どうじやうおく
 のてい里うを、そんぞく里うと申せしが、ぜんたう大しと申をる。里うじ一
 人おハしませ、さいじやうおくのまゝ里うのをとめたいしよあひふきて、
 御子二人もちたまふ。一千縁んを、巻て此ちふをとめたいしの御よりめつ、
 こ巻をまゆつ里のた巻として、しやうかくふくとりたまひ、あまこと巻
 んじ六十乃御くはんをおこしたまひつゝ、十二くはんをハあひなきて、あ
 とふくふらせ給ひをる。をとめ大しよゆつらるゝ、やくしよよらいのむう
 しなる、御子しやくま此たいし里う、くはんせおんともふりたまふ。つぎよ
 ちくどのたいし里う、せいし不さゆとなりたまふ。のこりし四十八くはん
 を、とどんくはんのちうひとて、不んぶをまぐ御ちうひ、いのちのなが
 き不とけよて、む里やうじゆ佛、かくありがたき佛前よ、らうそあまこと巻

(芝神明)



つぎして、初夜よりごやまいとるまで、かき打ふらしきやうおんのやむと
さうまなりきり、かゝるしゆせうまひうさきて、わそれ考るゝ形かへ
さを、ときをうつしてたちだふの、てらこ控これハわがてうの、てら此そじ
まりなるとや。このそじまり此てらよりを、まさりて見ゆる増上寺ま
り下ううハをんぜん、いちをふせうせうとかえ是、こゝろふうぬわ
さまで、しやうハかふと死のもの、この世ハのり、のふとりなり。もとゆ
をきめてこのてさ、いまより此ハをみぞめ此、こゝろをよ身ををやりさ
そや。世をいとそんとおもへどを、はそぐみんのそふさハ、いまそのと
きまいとりてハ、つあきをとめぬとんよく乃、さら是ぬこ控ハうとてけ
やうくゆけばまぬい此、とり井ぬがきをうちを控て、本しやまな是は
みこのまい、うぐをそうしたまひなり。さはかくらのそじまりハ、地
ん五代のことかとよ、天照太神日月をうごひ給ひて、いうませんあまのい
そ戸よひきこもり、おくだ若やうや乃をとなれ。ものうかりきるおりふ
しよ、大里さむうといひし人、うぐをたくまハせし、神をのふじゆま
し、くいて、いとをむさき給ふとき、大里さうちよさし入て、日月さうまい

とさとり、こくうよあがり給ひき程。日さきそのとやう若んと、こきをあ
 ぐめてきいの國、山東よいとひとてまつる。みこのさん若んまんのそ
 うと被まふぶ、ふるをいひむとやうの縁ふりをさ福をなり。五人のかく
 おのこをば、五ぢ此よらいをなうしとり。さて八人のやをとめハ、八大系
 のとくをかたと程。な被をとびやうしとり。このこゑハてんちをわがう
 みし、神おとやうよな此ふせひ、さきはもの見のみのよとち、おもしろさよ
 といふとは、このときよりをせじまきり。めさきをあらぬとこやとみ、いと
 戸をひらきたまふとき、人のおをてのまろくと、見へみしと被そのま
 み、おもしろくともつとへをり。かくらとをすぎてまんめいよ、ふうくきせ
 いをうけまくを、うご川をしみさしかり、ゆんでを見きはあたご山、さし
 たうけきはとふうく、一層んの雲よあひおふし。ふと木のえとハ葉をふ
 らべ、とこしあへなる衆しきうふ。な被をひらしをあらむきは、まんくと
 りしういしやうよ、月下のふを去るとへよ、とちいのふのかさりかく、
 さそふをひてよ不をあけて、のりくとするや水のおを、ふみまを置くつ
 り此ふも、こりきてもものやおもふらん。みしををるうみふらむきは、ふそ

をてらそみち里んハ、山ぞみうつりましませハ、まよてとよひづく入あ
 の、ときをうつきは四ツ登とや、月のくまふくさしいで、あよひをてと
 あら坂の、とらげをうつせためいけよ、あさぶのをり此木を系より、おるそ
 あらしみたつふとハ、みしのく不みや登るとん。さきは世けんのとより
 みも、水ハく不とみ身をよせは、とりハ木を系をまよふとは、よくこぼこ
 はいとさとり。猶をまふとみうくさふき、めぐろのふどうとやうむうハ、ち
 うひあらたましませハ、きせんくん若ゆハうぎりふく、まいり下ううを
 ま不やむら、こん里うさくらさうりみ、いまハをるべの衆しきうふ。きと
 よ何とりてうくさグの、かそこのせきときくかたに、こゝろをとめてな
 むれハ、さくさ田さくや山の手よ、出入御もんたちけは、かそみのもんと
 あづけとり。うゝ程さうせきさとくと、あさごの山よたちよりて、とちの
 まゆりせふきそよぎ、身よまよくと何りかふく、すぎゆくまよみまんと
 しの、とづようつろふかけ見きは、をとろへてしてさごとうふ。みしををる
 ろよなうむきは、さそが名たうき御成せし、ろそんう雲のうけはしを、かく
 やとおもひたくとふり。ひらしを見きはこびき町、ひくみまむくうやさし

やふさぎばひりきてなびくをのぐる漏ハこしよひりきつゝ千里をふひ
くならひなり。かた田のうらよひくあまはよせく程ふとふひくふり。太
刀おりうと金銀を、だいまつとあげひくとさひ、よくよふひけるふらひ
なり。ふゆハさむさに風ひけは、小巻でまた巻もふひくふり。せぎやうをひ
けハこつがいの、ふひくふせひを見るからまをの、小まぢのいましへよ、
見したまごれのうちぞゆかしきと、なしいしたまひし言の葉を、おもひや
らきてあそれふり。あまごまいりよ巻でひけハ、なびくぬ人もふりきり。
さぎばふひけるまふく、よあるひハ君をみなのうら、たらぬおもひの
ふしやと、巻てひきふひくともあり。月見花見の庭よさち、ときのな歌よ
ことよせて、まゝ巻のうちをひきひりき、まのびよふびくともあり。かまや
不とけよさんけいし、ちや巻のおう、よめをひけハ、見そめぬ人をなびく
す程あひの、はひをもよ不して、あるひハふとのとのまよ、ちうのうら
よあま縁とを、見るめさかりのこひゆへよ、うき身ハなよ、ふさ此その、そ
のうし里木のまゝ巻なく、おもひりけあ程八としの、くをてよものをおも
ひきり。さてもやつらきまづり身の、ゆく衛ハなよとなるまかよ、ま不され

ころを袖ぬきて、かそくまをなきありさまを、君より外よた巻不さん。まい
るわり身とかきとめて、おもひし君へをくゑとさ、君をあそれよひりされ
まの、不巻ハくさるいふふ巻の、いふまハあらぬふらひみて、へんじよかく
巻く、巻巻程。巻巻可こ、巻巻を、はくしな程、あり巻のうまの巻巻ちとり、
ふとたりへみてあるやらん、まといつハりあるままハ、おちまおる巻の袖
そへて、木りけみつものつし巻、うちとけかとり申さんと、くろ見ませ
さるまつくきを、見るからまゝるうきうれ、日々巻おしきよまよひし巻、
あうぬちきりよふらざうの、このてがしハの二おもて、たうひよ見えは見
やら巻つ、ひよく巻ん里のかさらひ巻、ひりきてふひくふらひなり。ささハ
わり身をひりぞやと、つじのちやう里の袖をひき、まつまふがらしやう
ま、くハ、いふりのも此まあり巻るが、ひんしやのいへよむまれあひ、とせい
をわびて山をまへ、さうひを巻よてま程、と、まよよこしぢのかりが巻
巻、はひりて巻りいまハをや、おちやのかかりをもよぬもの、あそれふる
まひ給へうして、いしゆまよへて、いよハしや、まよよなりしまちすうと、
おあし巻まそやつきぬへし、おちやのかかりもなよまふま、まよまよしめ

せせいさぎよくちや里ん二ツつたていざせ。又もところさかくあらめは
 じめよりして二ふくまでいざせしとのふしぎさよ。こせハひらよととひ
 けせハていしゆまよへて。たび人のひんじやのいへようまれあひとせい
 わむさせ給ふよし。二ふくまいらふくくと。とせいまよるまうまべ
 し。とに二ふくましさいあり。せせ天ぢくのと。かとよ。ぎだ大若んといひし
 人。八まん四千乃くをりをハ。のこらぞお海へそんるま。でし一もんのを
 乃ともよ。六まん二千つとへつ。二まん二千をゆるさし。まよてせの
 ちのこしをえ。二まん二千比絲ん里きの。ぎバウだびまよすへまきり。か
 ん絲つ二ツつとのへて。五ざう六ふをたし。みしやまひおこよりち系ま
 さり。たちまちいとくあるみより。三ふくまでハそぐるあり。また一ふくハ
 ふそくとて。二ふくまこせ。せさよめつ。いまの世までをつとひりて。こい
 ちやうそちやとあつけたり。せせはちやとよむもんじこせ。たひのたのじ
 をくごきつ。一じをさつてちやとよめば。草よをあらそ木よもなく。ちや
 のゆのだうく十二いろ。こせをやくしの十二神。うらむ。いそせのもの。ふせ
 ば。まよるまつあよ。まらるて。二ふくのおちやをきこしめせ。たひのつう

せもやとふんと。なぐさめ給ふまよるざし。やさしく見へて。かくゆりし。さ
 れハやさしきふさけまハ。たせをあたしむ。あらひみま。なごりおし。さハか
 きりなく。たちまびとりしあり。さまハ。そぬけ。此かをの。まぶまよ。うかせ
 て。あがりか。と。た。山。下。町。を。な。う。む。せ。ば。み。し。の。見。つ。け。の。御。も。ん。よ。り。い
 で。入。人。の。と。り。く。み。ひ。う。し。み。う。は。あ。べ。町。よ。た。へ。ぞ。た。き。み。し。火。の。ひ。か
 り。う。き。身。を。こ。が。せ。も。の。う。さ。よ。き。と。ま。ハ。り。て。日。う。げ。ち。や。う。せ。れ。こ。せ。た
 せ。を。す。き。や。だ。し。た。ち。ま。え。ゆ。け。と。わ。せ。お。も。ふ。人。は。ひ。と。り。を。こ。ん。や。町。か。ち
 ぞ。し。さ。し。て。ゆ。く。を。り。ま。み。ま。あ。と。た。か。ま。町。の。さ。う。ひ。を。ま。く。る。ま。る。し
 う。や。た。け。山。町。と。き。く。か。ら。み。人。の。ま。よ。る。を。ぬ。し。く。よ。さん。里。う。町。よ。ゆ。く
 を。り。く。不。町。さ。し。て。行。く。を。あり。わ。せ。ハ。そ。る。か。の。た。せ。を。を。て。ま。し。を。ひ。く
 く。ゆ。と。町。と。い。ま。こ。せ。ま。り。ハ。ま。ら。ま。ゆ。と。を。と。ま。け。と。う。ま。い。と。つ。と。ま。さ
 て。ぬ。り。ご。め。の。いろ。く。を。見。る。か。ら。ま。は。ひ。き。と。め。て。ゆ。と。の。む。う。し。を。た
 つ。ぬ。る。み。せ。せ。天。ち。く。此。と。う。と。よ。て。つ。里。ん。里。う。の。御。と。き。よ。こ。う。そ。ん。る。う
 を。と。申。つ。く。二。人。の。ま。ん。う。り。ま。る。う。大。あ。く。人。と。き。ま。へ。と。り。ま。う。せ。け。き
 里。ん。よ。か。ら。ぞ。し。たい。ぢ。あ。ら。ん。と。せ。ん。ぎ。あ。る。お。り。ぬ。し。き。ま。の。庭。前。よ。ぬ。し

ぎの木こ摺ゆぢゆりせぢ長^{たけ}ハ七しやく五寸よし、えごをふけぢハ葉を見へぢ、きりぢぢいらんまし、てかの木乃もとにたちよりて御手をかけ給ふとき、この木よりハゆけいて、あとさきゆり庭前よこたハりて摺見へみぢる、きたいありぢぢためしみハ、やまぢと一ツまひさがり、つとの不そつるくハへきて、かの木よりうけてとびさぢぢ、かぶらや一手あまくどる。こせをとりあげ悪人の、まんうをたいぢあるとウヤ又まんだんハくハうていの御代よせぢまぢ。わがてうハ異^い國たいぢの御ときよ、まんくうくハうくう、くハの弓よもぎのやよてせめふせて、そせ天ふく地ひさしく、あめつちくせをうこうさ、^に國をぞやうよなりけせハ、このときよりをせぢまりて、ま、^はのま、よ世をまさる、京をしゆけハ君代ハ、ぢぢさき町ときくか、み、人うぢならぬまぢり身、いつしうま、みおけ町の、あんどのをまぬならぢやと、いまきて見るやぐ摺く町、さるハ小さくならつハま、うの花おとしあきくせハ、木、このせぢもいろつぢて、紅葉をまぢぶひおどし、ふゆハか、とぢみやまべの、木こりせミやくありさまう、くろいとおどしせぢかぶと、きらびやうぢぢ月不しの、とてもをのぢなう

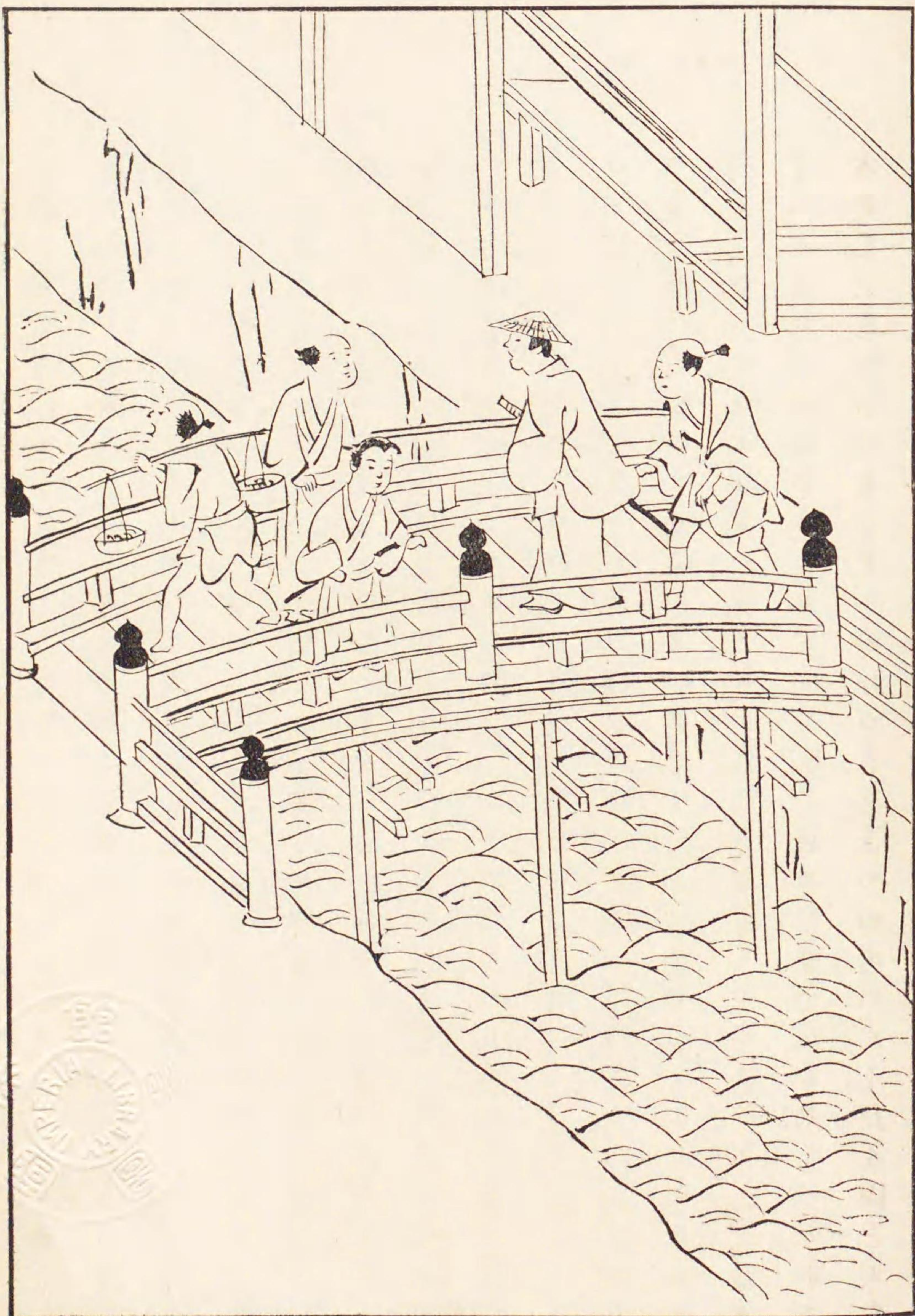
いろ、よ、ものせきふく見へぢぢぢ、八町不り此ゆくせぢハ、せいろんしまとさまへ、ぢり、ぢう、ゆけハ中をし、み、先ハめでたさあふぎやの、ゆくせぢひろき町ぢぢぢ、ぢりか、ぢぬか、ミヤを、たちより見ぢバまづウ身を、うつろひやせぢぢめものや、あいそめぢるウウせいろよ、わうせぢいまハあひと、せ、身よま、と摺のかと、ぢ、おもひそむせはむらさきや、一入おもひふろ、ま、かハやのたぢのミつまきの、すミみこるをハ人やまぢ。わせハゆしきまたひとちて、むさしの江戸よくるいとや、かううちなりときく不とに、むうしをおもひつぢけぢり。

かういとのかぢぢぢぢぢぢとまれウし人のなさけハよぢよこぢあぢと、かぢう此とぢぢぢとさハ、わせをたまらハ人をま、あさけあらんとあるかとの、乃ぢぢの下よたちよせは本道外科^{ほんどうげき}目のくせり、ふんぢんかうやくうつし物、手本の御用せミ筆の、天下第一とかきよなる、かんぢんあまたかゝりぢり、かゝりしものハひやうぐや、新筆^{しんぴつ}古筆^{こぴつ}うけふぢべ、ぢりとりわとせた、ミヤよ、あふミおもてときくからよ、わせある人よあせぢやと、そなとのぢぢらよさしかゝり、ひうしを見せハそくやぢやう、すへハむらま

の町とや。さうふあをものとりくみ、かへらぬいろの久方乃、まさきのかつらなる幾世の、あとへなり参りときハ木乃、中よをまゝをたうさごの、まのふせいとうちなうめ、一首のうとまうくをり、

まのうえうをとねことり此縁を立てうりかふものハさうふあ被もの、かをうみ忍いしと被り町をの、本やをながむきは、ふいでん外でん和歌のミち、かぞをいせんハうぎりなし。いよしへ今乃あとの葉と、異おくの、こと被ひきまぜて、ふてみまうせてつら参り。ひきてつらぬる若ゆせや、よは、とををさのミかえされぞ、いふよりをやくせいしやうの、たまよをくもねとあうハ、いとかしこくをうらおもてとをさんとのをつかしや、と被して被のミ名をあくゑ、弓の天下の矢うぞ被、八千餘矢とつとへきく、かゝ矢かまよおとらぬハ、むせびそあやうう物や、かみやまき急やさしものや、さめやくそりやむものやハ、いづかをなぐべ見へまをる。な被ゆくすへハよろの町、今被せしめてミちのく此、むてまでかくきふり参る。日本をしまをつきま参り。そのむうしをうつぬせハ、まんだん國と天ちくの、さうひよありし理うさ川、ながさ八千餘里とや、この川さし此よこと

(日本むし)



へよ、三世の志よふりあつまりて、いしのをしをぞかけたる。さて本朝の
うぢ川よ、こきをまふひてうけよたり。そじまりふりしうぢをしまさり
て見ゆる日本むし。みしをえるかよなるむきは、方百町までつせきの、此の
ぢやくら八十重廿重、ふもとの不り此まんく、とやむせのうとよあいお
あし。おんごんるりの御をうた、五ぢう此天しゆとけとく、とう里てんよ
をおよぶら、數千萬里よ見えわと、おゆとある代のためし、み、あをひ
の御もんあうはれて、たちよ、人のうげまでを、ひうりか、やくありさま
ハ、君のめくミぞありか、さき。されむうしのつとへよを、一花ひかけハ天
下とあ、そののさうりうよる代の名をあんせんぞめでたしと、か、おと
をや申さん。あめが志よな、諸大ミやう、いらうをふら、おむかどの、たと
へをとるよ、ためしなく、か、國までをのこりなく、おさま、お御代のとあれ
ど、たミのかまどをよぎあひて、たちぬいろめくいちがひの、すへハむさし
のそらなれば、けよみちひろきおさまりハ、かんやうさうのよそおひを、か
くやとおもひまられと。志のこの大名い、え、の、志、は、け、さ、さ、う、被、あ、つ
ぬ、ま、ハ、家、老、ハ、上、を、う、や、ま、ふ、よ、上、又、う、ま、い、あ、つ、し、こ、き、被、見、る、う、さ、

ふらいる、な様まとうき、下知は、く、ふらま、の、を、此、う、し、く、と、子、よ、
 是、以、の、あ、つ、け、是、ハ、く、と、子、な、様、ま、と、ま、と、グ、ヘ、リ、下、よ、り、上、を、を、か、ら、ハ、を、ぎ、
 や、う、き、と、ど、し、き、あ、り、さ、ま、ハ、か、を、を、う、や、ま、ふ、い、を、れ、な、り、上、ま、た、下、よ、ま、
 ぬ、う、く、め、で、た、か、り、夢、世、の、中、や、さ、ま、は、上、と、人、の、の、ま、さ、の、ま、ふ、く、
 お、不、く、し、て、そ、の、い、へ、く、ま、か、ハ、り、夢、り、さ、う、ぞ、の、家、の、あ、ら、ひ、み、て、ゆ、を、馬、
 よ、ろ、い、太、刀、か、と、あ、こ、が、あ、ま、あ、う、せ、も、の、す、き、の、ぶ、げ、ん、く、ま、お、う、し、つ、い、
 せ、う、ぬ、人、こ、様、な、う、り、夢、り、さ、て、夢、の、不、う、の、ま、さ、の、ま、ち、ま、こ、ん、さ、い、う、く、お、
 海、へ、あ、る、人、を、か、へ、て、夢、り、さ、り、て、け、つ、く、だ、う、く、ま、す、く、を、あ、り、さ、ん、か、
 ん、た、け、て、ま、い、し、て、金、銀、た、む、る、す、き、を、あ、り、内、の、も、の、を、を、け、つ、う、う、み、ち、
 せ、が、い、へ、ぬ、を、ち、う、る、ん、ま、夢、の、身、を、を、こ、し、う、づ、た、う、く、け、ん、し、や、の、ふ、り、を、
 す、く、も、あ、り、う、ち、此、も、の、を、ハ、ち、う、る、ん、ま、人、よ、を、さ、の、み、つ、き、あ、ハ、げ、ふ、ん、
 め、ど、て、残、す、く、を、あ、り、ま、ん、さん、こ、さん、の、き、ら、ひ、あ、く、ひ、き、な、き、も、の、ハ、あ、ら、
 ま、し、よ、け、お、や、う、の、を、を、か、へ、つ、い、こ、う、ぎ、を、せ、ん、ま、つ、い、せ、う、し、世、け、ん、
 を、わ、た、る、ま、さ、を、あ、り、く、ん、し、の、な、が、れ、り、と、て、も、ま、ん、さん、な、ま、ハ、あ、ら、ま、
 し、み、こ、さん、の、を、を、た、う、ひ、と、て、い、へ、を、ま、う、を、お、す、き、も、あ、り、以、や、し、き、も、

の、子、あ、ま、と、も、み、め、の、よ、き、を、ハ、小、し、や、う、み、し、の、ち、よ、あ、き、け、此、つ、く、と、き、
 ハ、こ、ま、い、い、ま、し、へ、さ、る、か、と、よ、し、あ、る、も、の、子、な、れ、ど、を、夢、の、身、お、ま、り、き、
 の、う、あ、ハ、あ、ハ、わ、ま、ら、を、た、の、ミ、申、な、り、お、う、へ、あ、ま、と、の、と、備、ひ、て、大、ミ、や、
 う、た、の、む、す、き、を、あ、り、せ、ん、夢、を、と、ど、し、う、お、残、ひ、き、そ、の、う、へ、せ、う、こ、を、た、て、
 さ、せ、て、人、を、か、へ、ゆ、る、す、き、も、あ、り、ち、や、の、ゆ、り、く、ハ、身、を、や、つ、し、ふ、る、ま、
 ひ、す、き、を、す、お、を、あ、り、う、と、ひ、つ、い、ま、ふ、ふ、た、い、こ、の、う、や、を、や、し、を、す、く、も、
 あ、り、た、ま、も、き、ら、ハ、ぬ、ま、さ、の、ま、ち、わ、う、ま、ゆ、を、ん、ふ、で、と、い、め、と、り、

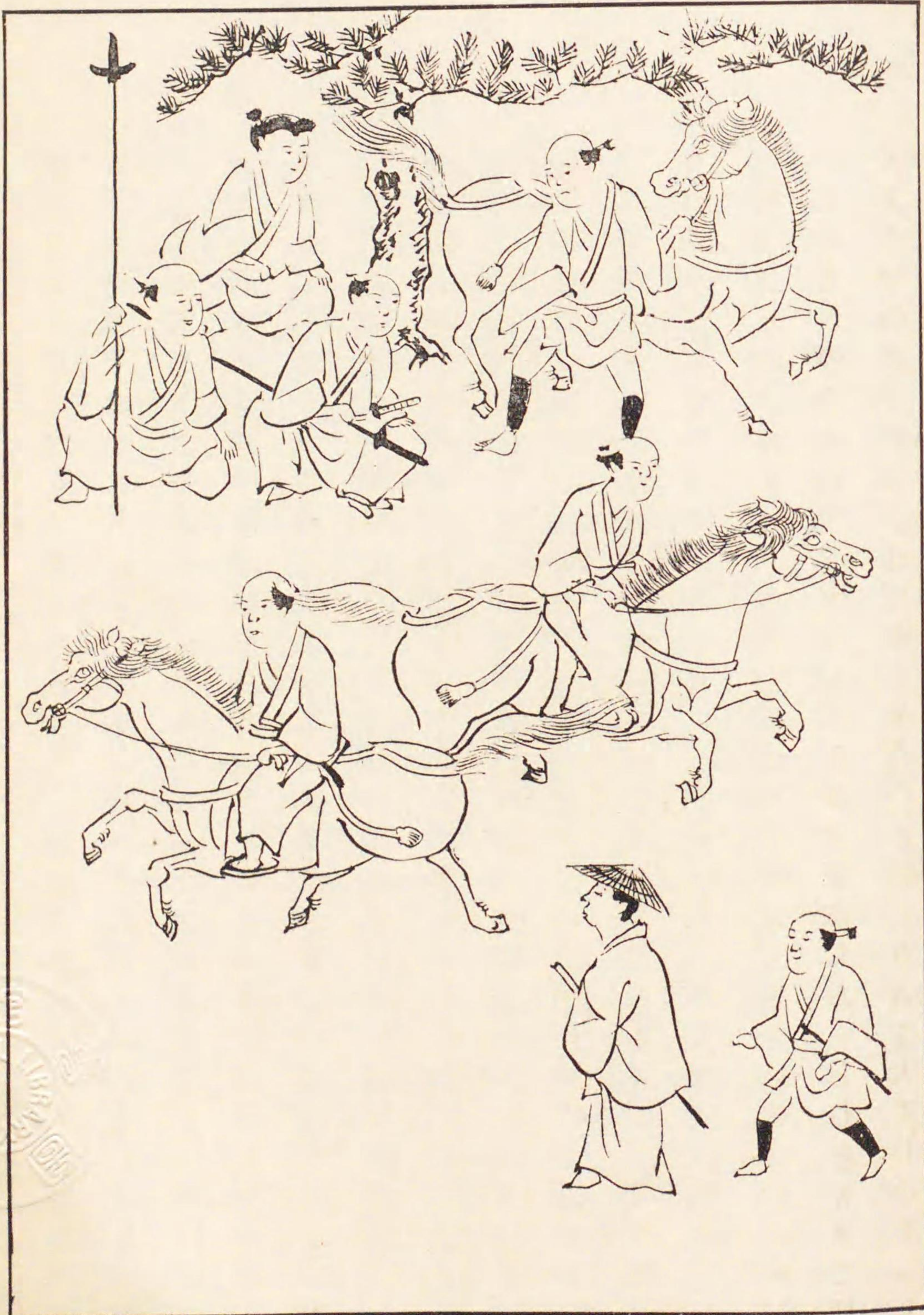
下

か、何、ど、ゆ、し、し、き、御、代、あ、ま、は、き、せ、ん、ぞ、ん、と、ん、世、乃、中、を、あ、い、ぐ、ハ、わ、と、る、
 江、戸、ぞ、し、よ、た、ち、や、を、と、ふ、う、四、日、市、川、の、あ、あ、た、の、ふ、な、ち、や、う、を、ま、じ、め、て、
 わ、ま、ハ、ミ、あ、ま、さ、さ、し、ひ、く、ま、不、う、ち、な、が、め、ゆ、け、バ、不、ど、あ、く、縁、ぎ、町、よ、
 さ、こ、ん、が、か、ぶ、き、ま、ひ、を、ま、ふ、さ、つ、ま、と、や、が、あ、や、つ、り、の、ま、じ、ま、り、と、お、う、
 と、さ、が、の、う、ま、あ、ま、し、不、な、ま、お、づ、鳥、の、一、こ、あ、お、り、し、を、ま、あ、く、う、ぐ、
 ひ、ま、の、ま、あ、ま、き、よ、く、ま、ゆ、ん、な、ふ、て、ん、を、そ、う、せ、ん、と、う、と、ふ、あ、ま、を、此、わ、き、
 の、う、や、よ、ハ、ひ、久、し、き、お、い、松、の、ま、だ、よ、あ、そ、ぶ、う、ひ、あ、づ、る、の、雲、の、と、へ、ま、よ、

まふふせい、とちとゞまりて三井てら此、こよひの月よか手をつく。か手の
 いをせのひのうなせは、むうしまやくそんせうせんよ、いらせ給ひしおりふ
 し、三おくしゆぢやうとく、と、どうざんさせんあいつ、みは、か手よすぎ
 と、おとあしと、おんせいどさせ給ひし、ま、まゆぢのちやうじや、ぐとく、とつ
 し、か手をいさせてまい、と、す。さ、せのこのか手、はくよりを、み、うぢ大、おん
 百く、はんぬ、どう、みやく、おん、よ、ま、と、と、と、どうざんせぬ、な、り、き、り。
 そ、せ、の、せ、じ、ま、り、こ、せ、の、又、た、は、ら、と、う、太、と、い、ひ、し、人、理、う、く、う、よ、り、を、と、り
 き、と、り、この三井てら、み、お、さ、め、つ、い、ま、の、世、ま、て、を、つ、と、い、せ、り、さ、せ、の、し
 よ、夜、ご、夜、ぢ、んで、う、と、さ、て、入、あ、い、の、う、手、の、祿、祿、お、ん、の、四、句、の、き、や、う、も
 ん、の、を、と、つ、せ、な、る、を、き、く、時、の、不、ご、ひ、の、と、ち、此、う、手、の、こ、お、月、を、う、ぢ、そ、ひ
 不、ん、ふ、ふ、の、祿、ふ、り、を、さ、ま、ま、お、し、や、う、や、と、う、と、ふ、や、を、う、と、さ、く、と、川、さ
 い、ぎ、や、う、さ、く、と、を、と、あ、へ、し、の、き、ぢ、此、む、め、よ、う、き、つ、ぢ、と、花、月、を、ち、の、木、花
 ぐ、と、見、せ、ん、お、ま、け、む、ら、矢、と、て、う、を、江、ぐ、ち、百、ま、ん、玉、う、つ、と、と、き、く、と、す
 親、は、ど、う、お、や、う、じ、か、ぢ、を、い、お、ん、い、と、偏、お、し、を、親、の、を、し、め、つ、う、た、よ、り
 を、と、し、の、く、せ、ま、て、一、日、を、お、こ、と、親、事、の、あ、う、り、し、い、あ、ま、ま、く、て、ら、を、日、の

もとのうげゆ、と、な、親、い、を、せ、ど、と、ち、や、を、ら、ぬ、て、見、る、と、き、ハ、ま、づ、く、こ
 ろ、を、よ、し、ハ、と、み、二、八、を、か、り、此、上、ろ、う、の、と、ご、み、ハ、お、ろ、き、う、を、小、そ、で、う
 へ、ハ、さ、ま、く、物、を、き、の、い、ろ、ハ、お、ぢ、の、ひ、と、ち、お、む、や、ど、い、あ、げ、や、の、せ、の
 あ、ひ、を、め、く、り、く、て、わ、う、き、と、い、む、せ、び、あ、お、ん、と、ひ、き、ま、ハ、し、か、ぶ、る、や、り
 手、抜、め、し、つ、せ、て、ま、ち、を、せ、ぢ、し、と、と、被、ら、る、う、く、親、お、り、ぬ、し、と、し、の、こ、ろ、
 甘、何、ま、り、の、さ、ふ、ら、ひ、の、あ、さ、ぎ、の、小、そ、て、を、み、の、う、と、理、ん、ぢ、の、お、も、て、お、ろ
 う、と、の、お、も、ん、け、と、う、く、は、く、る、ひ、て、さ、め、ぎ、や、ま、き、の、大、小、よ、き、ん、つ、ぢ、う、け
 て、さ、し、と、さ、と、あ、し、地、ま、き、お、の、い、ん、ろ、う、み、む、と、さ、き、い、と、の、う、う、ち、を、た
 せ、も、き、と、ハ、ぬ、さん、ご、ぢ、の、を、ど、め、お、と、を、ひ、き、お、ふ、て、右、の、こ、ま、き、よ、を
 ど、と、せ、て、お、が、さ、さ、た、ひ、ま、祿、り、の、ひ、不、だ、て、み、あ、り、ぬ、と、む、せ、び、と、め、あ、と、が
 さ、ぬ、ろ、く、か、と、む、け、て、あ、ふ、ぎ、を、ひ、ら、き、お、あ、あ、て、か、の、上、ら、う、と、み、ち、を、の
 ち、お、ふ、し、を、し、て、せ、と、被、ら、る、い、あ、せ、の、い、あ、と、た、づ、ぬ、せ、バ、あ、る、人、お、と、へ、
 よ、し、ハ、と、み、こ、の、上、ら、う、の、と、め、か、と、ち、た、め、し、す、く、な、き、か、ハ、と、け、の、な、ぐ、れ
 よ、ま、つ、む、御、身、み、て、こ、せ、被、大、夫、と、申、き、り、この町、お、の、な、と、ひ、み、て、人、よ、い
 と、や、う、を、洗、く、る、な、り、あ、と、み、見、へ、き、親、さ、ふ、と、ひ、の、い、と、や、う、を、い、へ、と、と、ら

是ん不、あきみ見へたる上らうハ、あうしの君と申をり。こきをハたしの上
 とうと、摺のくハしきをかとりきり。されハゆふぢよのいよしへを、ごとば
 のゐんの御ときよ、まのせんさいわのまひ、かきら二人うまひいざし、
 そじめをいろうんとて、あつし、あろさやまきをさいたきバ、おとこまひとそ
 申きり。中ごろよりハ、あををうへ、せいうんぞかりもちひつゝ、あらびやう
 したを名づけあり。さて摺の、ちハたをきめや、人のあゝるをうきめ此、
 ゆふぢよゆふくん今ハまよ、けいせひあと、かうしつゝ、人のあゝるをか
 とふく、あもんしよとやこかよふく、あかきよあとのことあれハ、かよふ
 ねぬるをとりや。あまはとやこのまつりしや、わきはあんどくくさあつ
 き、ひあのをまゐよなまよ、て、月日のさうハ花もみち、あさけのみちもあ
 ちぬ身此、たちやあまよふをよしあしと、ありをからげてあしぢやよ、とびざ
 ハ町よさしか、り、ゆけハ不どあくてんま町、まぢあよにせハあけきとも、
 こきまよのんちやうや、きよしあまさるあちあを、わきもきて見あ
 ぶふくやの、あてをつとねてゆくあつハ、こひしき人よ大あしの、あとりあ
 はんとおもふよそ、あつがあゝる中よ、うき世あやうじのくもりあ



(そくろう町馬場)



く、そせが備一くも一家んをせと物町とみふこな、小田をちやうをい
つのみよ、あとに志ふ川ちやうとや。登うくゆけハあくちやうの、す
ハぞくろう町とや。さふらひあまたうちつきて、こまくりげの馬を
り。あるひハつきげうげうせげ、と形せめ馬とうち見へて、あふま
いちもゆよ、さくのくちとていろく、み、きんぶく、里をとるをあり。ふ
ちまき、元のちがいま、摺のいへく、のをんを、積く、むうしハいせのき
つくと、とふ人をちひ給ひしが、いまハまのむらき、つけよ、おんぢのあふ
とめうちんぐ、く、ハのこのとさまく、み、かづさ、まりかい、不そすち、た
つふ大か、とむらさき、ふ、あをりくら、お、むせ、んを、ハ、ひ、ひ、やうとうい
ろく、み、うけあし、ち、ち、一、里、うの、た、つ、ふの、ひ、と、む、ちの、き、よ、く、こ、ろ
のまよ、のりつ、きて、み、ち、ある、か、と、み、と、を、り、町、志、む、よ、り、い、で、と、形、人、の、
ふ、い、ぐ、ハ、を、ま、み、ま、ご、町、へ、その、あ、い、な、が、き、あ、り、さ、ま、ハ、け、う、志、ゆ、ん、御、代
よ、あ、い、お、あ、じ、ま、ち、の、あ、ら、び、を、た、づ、ぬ、ま、ば、八、百、八、町、あ、る、と、か、や、か、ぞ、を、い
そ、ん、ハ、か、ぎ、り、あ、し、や、う、く、ゆ、け、ば、ま、ま、が、この、門、を、ひ、らく、を、見、る、か、ら、み、
ひ、らく、る、も、の、を、た、づ、ぬ、ま、ば、春、花、ひ、らく、夏、ハ、ま、た、あ、ふ、き、を、ひ、らく、あ、き、く



是ば、あらしにつるゝむささめを、いとそんためよかつかさを、ひらひてと
 をるあふとよりだても、のくると見るかみみち、被ひらひてと、被しきり。
 冬ハさむさよこざしきよ、ひやうぬをひらきひきまハし、そそ此葉ありよ
 ひらむと、被さうつ、愛いごほおりぬし、み、うりてに、と、被の口ひらく、そ、うく
 ハんと、御うち、お、被、るん慶か、ま、う、金澤の、ど、げ、せ、う、じ、や、う、み、つ、き、し、時、
 おい、を、む、ら、ひ、て、被、の、ち、よ、く、ハ、ん、若、ん、ち、や、う、を、ひ、ら、き、つ、と、と、き、を、う、つ
 さ、ぞ、よ、ろ、こ、び、の、ま、ゆ、を、ひ、ら、く、被、う、是、し、け、是、う、是、しく、む、ら、く、ま、あ、く、ハ、
 おもひし人の、を、とり、き、被、つ、ま、戸、を、む、ら、き、あ、ひ、お、是、て、わ、う、是、よ、な、是、は、又
 いつと、か、き、く、る、君、が、た、ま、つ、さ、を、ひ、ら、む、て、見、る、ハ、う、是、し、け、是、又、そ、つ、春、の
 く、ら、ひ、ら、き、た、う、を、い、是、し、あ、が、も、ち、の、ふ、と、被、む、ら、く、を、う、是、し、や、あ、ま、り、
 う、田、ひ、ら、き、ゆ、め、ひ、ら、き、出、家、の、ろ、ん、ハ、つ、め、ひ、ら、き、目、を、見、ひ、ら、む、て、む、ら、く
 ら、ん、ひ、ら、き、う、ち、て、ハ、て、ら、ひ、ら、く、む、さ、し、の、江、戸、の、く、ハ、ん、を、ん、ハ、三、十、三、
 ん、ま、ぎ、て、の、ち、御、戸、を、ひ、ら、う、せ、給、ひ、奉、り、お、ろ、し、き、申、事、な、う、ら、ま、き、を、ん、ろ
 ん、の、そ、ん、ぎ、を、バ、二、で、う、か、ら、ま、ま、あ、き、の、よ、と、や、う、じ、を、い、へ、ど、ぬ、と、り、
 し、い、へ、あ、ハ、そ、ん、や、清、兵、衛、こ、被、被、ひ、ら、む、て、世、よ、い、ご、す、さ、是、ど、も、ま、り、う、こ

みるあ、かきあ、つ、め、と、被、ふ、で、の、あ、せ、御、う、ん、の、か、た、を、そ、つ、う、し、や、恥、う、し
 かりし、あ、る、し、み、ハ、人、よ、ま、と、葉、を、う、ハ、さ、じ、と、か、不、ふ、り、む、け、て、ま、ち、う、い、よ、
 そ、し、を、見、と、里、て、ミ、や、う、若、ん、の、本、し、や、ま、ま、い、り、ふ、し、お、う、見、わ、が、ゆ、く、す、
 ハ、ゆ、し、ま、と、や、お、も、ひ、い、り、と、る、天、神、の、と、り、井、を、そ、ぐ、被、お、り、ぬ、し、み、き、此、ふ
 き、ふ、う、乃、若、ん、不、ち、此、そ、ち、を、ひ、ら、い、て、と、と、是、と、り、こ、是、ハ、と、お、も、ひ、た、ち、よ
 り、て、か、こ、の、ま、へ、な、る、と、り、井、よ、ハ、い、う、あ、る、い、そ、是、あ、る、と、き、く、若、ん、不、ち、こ
 と、へ、さ、是、ば、こ、被、お、る、あ、ら、ん、ど、も、が、ら、ハ、と、り、井、よ、つ、き、て、あ、ぞ、う、ん、の、
 を、ん、を、と、あ、へ、て、參、り、よ、ハ、う、ち、を、と、を、被、バ、げ、う、ら、み、ハ、被、と、被、と、を、る、が、あ
 け、ひ、な、り、若、や、う、じ、ハ、た、是、も、そ、お、被、被、バ、ゆ、き、よ、う、ち、を、と、被、り、て、ハ、若、
 て、う、ま、る、く、ま、あ、ひ、よ、て、里、ん、若、を、き、ら、ふ、あ、ら、る、な、り、さ、是、ハ、世、け、ん、を、御、ら
 ん、ぜ、よ、ら、つ、く、ハ、は、え、ご、ま、か、へ、ら、ぞ、や、そ、き、や、う、ふ、と、と、び、て、う、さ、ぞ、や、あ、が
 被、と、と、ぶ、と、ふ、る、あ、め、と、人、の、さ、う、り、の、い、ま、し、へ、ハ、ぬ、と、と、ひ、か、へ、被、と、も、あ
 し、又、た、ま、う、き、と、申、せ、し、ハ、く、ハ、う、い、を、被、う、世、中、の、ぜ、ん、ぶ、ん、あ、ら、ん、と
 も、か、ら、ハ、若、ひ、の、あ、ら、る、を、あ、つ、く、し、て、ふ、ゆ、く、ハ、よ、い、と、被、こ、是、ハ、又、方、十、
 い、を、へ、う、ま、被、と、か、さ、り、給、ひ、し、お、り、ぬ、し、よ、わ、う、を、の、あ、ま、と、あ、つ、ま、り、て、み

りくしてあさくさ此こまかさだうハこせうとよお庭よそやくつきみ
 ありなミ木の花ハかざさきて木を急にひうりうつりまし、かさちをかけの
 ありせふハ、せん望のえごうあいおいの、松うとこせをうさかそれよしの
 一と冬のそ程とても、こせよはいうてまさらんと、ゆけハ不とふくミふみ
 よハ、こせぞふさうのものまへ、月日をそしとまんざり、きとよとうせう
 ぶん衆んの、志の不うまよぐハをちりぞめり、ひうしよたうをくミあけて、
 くも井を置く程むせびう冬、二世のきえんをむせんとり、みしハ九品のし
 やうどつと、うき身のつミをミグくらん、たまのうてふをへうしとり、御ど
 うよなれハてうばそち、ちうらおよそぬ大石を、ふ冬のかさちよはくりふ
 せ、ミづハそこ井のいづみみて、まゝ流す、しくをれゆくハ、をとそのたき
 をこせふらぬ、まゝろきよくをこりをと、まゝぐちふらし手をあせせ、き
 ミやうてうらひくハん世音、二世あんくときせいして、うちのミつけを
 ふらむせは、まゝよ不とんよ竹よとく、くりよふんううミづよさい、まらよ
 もみちとまひつる二ツハ、君のよハひをちとせまで、久しうせとせまひあ
 せぶ、うくありがさきのり此よハ、めぐりくしてひうしふ程、あさくさ川よ

たちよりて、川のなうれをふらむるよ、おりぬしよす程こふ冬あり、びんせ
 んこふてこりせゆく、をりのまとのそあふそせハ、まよとうきよすミど
 川、むめり丸のそちあるし、やふきさくらをこきませて、いまよたへせぬ
 縁ん、猫川の、ミよとせびへてあそせまよ、まゝろふけせとむめりうの、あと
 とふらへ流るるしうせ、六じを流きてうくはうり、

なそりりハむめりうまると何とりのミみハさ發たちてふるはうとふ
 る

冬、かやうみ急いじきうせきを、まゝやうしことなうむせハ、目をせいざん
 よかよふきぬ、もとのそみうよかへらんと、ふ冬こきもどしをるく、と、か
 ハべをいつるおりぬし、み、ひうしに見ゆる入うミの、まんく、たせハとま
 しぬも、せらみそるうのふしさんう、まゆミの山うとうさグハる、大船うう
 ひ見へみ参り、あせハいうみととひけせば、せんどうあたへ、されどとよ、せ
 の名うくせをあらハこせ、あせハせうどうげきまうと、申ごさふ縁なり参
 るが、ふ冬のむうしをたつぬせは、まんだんおくのくハうてひよ、くハてき
 といへる臣下あり、あるときくハてきていしやうの、いけのおもてをふら

むれは、ころしもあきのすへつうと、おろそあらしよさ控されて、やふ袋の
 一そとづようく、まうるみくをといふむしの、いづくとをふくおち帯控が、
 一そのうへよ登どりつゝ、ふきく程風可身をまうせ、とぎハみよりしあり
 さま控、けみもとおもひそめしより、くはうていふ身をたくまるゝ。たくと
 しぬしを控のまゝ、みくはうてい丸とを申参り。又くはうていを控のと控
 の、たくとしふ手よめされつゝ、そたうを志のぎをるゝ。此、志うふをやそ
 くだいらげて、御代よおさま控とし月を、一まん八せんざいとや。かゝ控
 めてたきくはうていの、御ふ手よまさる御さふ手の、いくちようけてきこ
 うよ乃、ひさしかるべきためしなり。又わがてうみふらびふき、ひとりのと
 ぬ手なりけむハ、日、不んま控ともあつけたり。あのいりうとようかびいて、
 さ不さそ人をあけむとも、むせとかハべよいでいむは、あさけ丸とを申々
 り。さむはをんしみふ手とかき、きみやすゝむとよみけむは、きこのめぐと
 をおもんじて、むせとをゝむのをさしやと、かたり及ひしせんとうの、まゝ
 流の-notのゆるしさよ、むせハいふら乃ものなぶら、江戸一衆んよ此不り
 たり。されとこのま流せけんよハ、いふを控とやそやるらん。語り給へとい

ひけむは、くちのきゝたるせんとうの、申事こ控おもしろし。さてハいふら
 の人をらんぢたいむせらハ且としをり、人かそあならぬをのあむは、せけ
 んの登うをさあからみ、いさあならなとたゝよふて、月日をおくゑものな
 むは、うき世よそやることの葉も、なよとらとゝへ申参し、されとを天下あ
 んせんよ、くみをゆゝとみたまさうへ、めでたき御代のためしみハ、志のや
 まうのよいとるまで、花鳥風月うとむんぐあるひハ、志いづくハんげんよ、
 あゝろをうけん人をあし。かけてそやるハなみあむハ、あをえてふるきう
 け物と、さめをうけとる大小を、さゝぬ人ま控なうり参り。なよよりそやる
 まめいと控、とあてんむんようけよ参り。うけて手まへハよしハや、よ控
 のかよひのやとけむハ、ふろやのをんをそやりもの、かゝるゑいぐハを四
 書七書、五きやうふんどゝをてあ控ぶ。のをむハおぎのつゆ不とも、身のお
 こふひハあさずして、いよしへのこうしのまぢらうくありと、おもハむぶ
 りのこうまやくそ、きく人とてもあゝろみハ、よくみふけると志りあぐら
 人よきようを志らせんと、かうべをかゝふけきくをあり。せめてみちこ控
 とてぞとを、志んぎむいちをそむかじと、まことよ不のきの人もあり。ぶり

不うごしやうみかよふひてだいまも久孫んぬりてらまいる、若ひを不どこ
 す人あり。さ事は志よてらもお不け事と、不のけ此おてらごもんせきじ
 やうぞのくましも海そくと、たんだたそこみひごきせる、くはんせがしま
 ひこんを軽ぐ、うよひいまのそやり物、されはうよへる志あくよ、わま
 ぶぶとよのせんど、うハ、おきよてうよふふあうたの、くがみハ不そりかよ
 ぢちを、うよハぬひとをあうり参り。うよふ志やうがよことの孫ハ、よふい
 へく、みをとづきて、めてたき御代のありさまを、た事をきてゐるあまか
 さと、さんとめ志まのそをりこ、参、あつふゆりけてそやり参り。いろくそ
 やる参のちうよ、たうだい人のすうましハ、うつらをあつめうけあふべ、つ
 ぢきをあまよへあふべ、どりのあくこ、志そあのいろ、こ、志といろとのあ
 らそひよ、あ、ろをよせぬ人をあし、か、軽おりふしかよハふよ、つぢ木を
 すきしおとこあり。この人ちいんの御うよよ、うつらをこのむおてらあり。
 いうあるものや志より参ん、きやううをかひてたてよ参り。
 このてよ此うつらの志りみかさいつるつばきをつけてさせれよら
 ん

おとこのかよへくくわうり、

このいへ乃ていしゆのそふよつばきつけゑるよううぬはうづぢあり
 参り

と、かやうみういてよてよ参り。二人の人うさんくハひし、きでんぐそうが
 ことのそをよの人参し、里らくかきよ、もてあそむるくちおしや。志よせ
 んよしあきそ此そうの、つそきまきをバひきうへて、うつをひそうし給
 へや、されはうつよみ志さいあり、ぬしよのぬんの御ときよ、志よてうあそ
 せのあり参るが、まう参、いふんましく、て、志よてうのこ、志をきこしめ
 し、いつ参おろくハなけ事とも、あうにとりまけうつよこ参、一こ、志ふける
 参のうちよ、二十五けんとの孫を、いちく、志よべいごまなり。か、軽め
 いよのとりに参ハ、ことのとりともいそ、やと、御みそちうくめしをう参、
 とさらみひくやうつよの一こ、志は

とお母せいごされ、御てうあひよのつ孫ふらむ、参のうへ不とけのをしへ
 よも、くハんごおんじやうかいとくげごつと、一さいきやうのたい一、志
 めし給ひし不けきやうの、ふもん不んみをとら参より。このもんのあ、ろ、

そくしよこゑのをと抜きうは、とあすあひちげつようるととき給ふ。か
 かりをしへ抜きくときハ、こゑよすぎとることあふじ、つゞきそ花をバや
 めたまへ。おとこことさへて、御てらのおろなり、おれお母せうあ、むうしだ
 ゆゑいのあつのおろ、せんくハのぼろへありしとき、つゞきの花ハいろあ
 とに、百ハ百いろせん葉よ、そのををてらそ花ふれハ、ためしすくなきこと
 ありと、こようまゆんしきとろうしつ、ぼろのまき物よつとそきり。あとに花
 あるものども此、まいうきんくよつらあきぼ、ぼろのうぞかざりあらバこぼ、
 むろし歌人のあぐめよも、

花下^{はなもと}半^{はん}日^{じつ}樂^{らく}

月前^{つきまへ}一夜^{いちや}燈^{とう}

あど、花をハ月よぼぼへきり。か、おれよしあおれものあきは、あゝろあふして
 花のいろ、見まくる事ハなりかとし。されはうとよも、
 きみあらてたきよくとせんむめのそあいろををかをを去る人そしお
 と、かやうよゑいしをうきとり。か、おれよしある花のいろ、ぼろしりたまへハ
 御てら、こゝろあきよをよとるうや。いまより此ハひきかへて、花をて

うあひまとぼへと、そうるんあうはありたるよ、きやうどしゑんよおハし
 ませ、上らうひとりありおれ、この上らうハおれよて、あんどをたんど
 まゆはくり、けまんあけまき花むきび、あよ、つけてをくらからそ。かの御
 てらのだんあよて、つゞきよいで入まとぼへり。としをさうりのおりぬしハ、
 ちよをかきせんさどきいし、いとをとりてもろともよ、こけのむすまて
 ちきらんと、おもひしあうもありつゑ、ぼろめなきよのなふひとて、つゞ
 るあとあふあききり。あきしあさをわかれおね、そそじそかりのこぼ
 よりを、世抜うきとよふりそて、ひとりそまぬをせらきけお。おりぬしつ
 まのめい日よ、あううのためとよ、ろざし、かの御てらへゆあれし、おあ
 ととりとのそうるん、あうばあしをきこしめし、おれをんあのおま、
 るなく、申へきよあふあききり、そのあをえとる花鳥の、まさりをとりハ日
 けかとし、めつらしうらぬことあきと、むうしきとの、天まんの、うんせう
 ぞやうよ御ざのとき、

あちふらばよ不ひおこせよむめ乃花あるじあしとておれあわすれそ
 ぞゑいじ給ひし御うたま、なごりをおしとたてまつり、おるうきうまうち

くぜんの、さいふのこうへ御あと、菰とひてとびしふしきあり。さてまた
とりのふしぎよハ、うげん天里うの御宇よ、やまとのくよたうのまてら
此ことかとよ、のきばのむめようをひきの、やとりをふしてかくこゑハ、

初陽しよやう毎朝まいてう來。不相還ふさうげん本栖ほんせい。

せなく、をんじようつし見給へハ、

そつ春の、あしたとにハきとれともあハでそかへゑもとのすこつ
せ、かやうふゑいしつとへより。かゝれむうしをきくとさハ、花鳥ふたりの
たハふきよ、まさりをとりハ、けがとし。されハうとよも、

あふき満のとしたちかへるあしたよりまたるゝものハむめつうくひ
妻

と、春きよける菰まちむて、去よ人てうあいし給へり。ことにうつらのな
くこゑと、花のいろとをくハんせ、おほいある人を世の中よ、こひせぬも
のゝあふぞこせ、こゑといろとのわがうをハ、ひよくのとりのかさかゑる、
是ん里のえと此ちきりうせ、こゑをゑいぐハのそじめあり。このさうるん
をとゞまりて、是いのぶとくよもてあそび、ゑいくハよいらせ給へやと、あ

うごちせさせ給ひたる。あゝるのうちのおくゆうし。さきハ二人の人々を、
このあうごちのあよめて、やがてわううをせらるる。よくゝものを
あんずるに、人よゑいぐハをふさせんと、をしくハんをんのさいたんしな
うごちせさせ給ふうせ、と人こせ、菰う、さかハれ、とく天下のそやりも
の、ゑいぐハをたくむざうりあり。されむとくめ、おほし、みハ、いつをさへ
せぬよめとりと、さてむこいりのせ、のちハ、ひまなくそやる子とりむ、
去そんそんしやうたさうへ、めてたうり、る世の中や、見とてまつ、せハ
御ふせい、とゞ人あらぬ、あしきう、あ、あ、あ、とをあそびして、ゑいぐハ
よいらせ給へとよ。うあさよあとのよしをなき、ながものかとりす、おほ
よ、ふ、ふ、ふ、とあつ、きよ、あ、いと、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、
んどうの、あゝるのうち、のそつ、うしや、わ、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、
あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、
へる。ころハくハん、ゑい、二十、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、
き君うよを、み、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、
ぞ、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、あ、あ、あ、と、

てり、そやあふまうのものなきは、おしるまうきしけき。

——あつまゑくま

加藤氏邸收公

五月二日甲午〇寛永二十年(紀元二三三年)〇甲午(正綜覽)。若松〇岩代國城主加藤明成〇式部少輔ノ四十二萬石ヲ收封ス。其江戸上屋敷亦同時ニ上收セラレタル者ナル可シ。〇寛永日記。天享吾妻鑑。大猷院殿御實紀。

加藤氏邸收公事蹟

加藤氏收公 加藤明成收封ノコトハ、上文記スル所有リ。尙左ノ一二所傳ヲ抄ス。

三月十五日〇寛永十八年

一、加藤式部少輔〇明成。家來堀主水、四年以前寅年彼在所より逐電し、式部少所所穿鑿之故、今度井上筑後守所迄罷出、より今日於評定所老中子細被尋之、落着之内、主水〇溝口出雲守へ御預、弟兩人仙石越前守、杉原伯耆守被預之云云。井上筑後守朝倉石見守野々山新兵衛被席ニ列。〇寛永十八年。三月十八日辰下刻地震。

一、於評定所加藤式部少輔家來堀主水并弟兩人申分、老中被尋之、井上筑後守朝倉石見守市橋三四郎彼席ニ列也。

三月廿一日〇寛永十八年

一、加藤式部少輔家來堀主水事項、日御穿鑿之所、重疊不届被思召、式部少ニ彼兄弟三人共ニ被下之間、可行罪科之由、上意之趣、今日式部少御城へ招之、老中傳之。

一、主水兄弟御預之面々、家老是又殿中へ召寄之、彼者共式部少ニ被下之間、可相渡之旨、老中傳之。

三月廿五日〇寛永十八年

一、午刻御黒書院出御、加藤式部少輔被召之、今度家來主水御穿鑿之趣、委細被仰聞、父左馬助義ハ、權現様台徳院様御奉公たての義雖有之。至式部少輔ハ、當御代差御奉公之義無之、然共此等之小事以下迄、具ニ被遂御穿鑿、彼者非據之段被聞召分、被下之旨、忝存、向後家中之仕置ニも可成様ニ可行罪之由、被仰聞。次ニ御譜代之面々御前近伺公、式部少輔へ御意之旨、謹て承之、云々。

五月三日〇寛永廿年

一、加藤式部少輔〇明成。領地奥州會津被召上、息内藏助〇明友へ、石見之内にて一萬石被下、式部少輔内藏助へ御預之旨、昨二日讚岐守〇酒井忠勝宅へ此間之七人

市街恢弘時代

衆寄合、式部被仰渡、今三日諸大名被爲召被仰渡之。
一、加藤式部成明領地被召上、以段諸大名召之、老中被申渡之。

紀年録 外曲輪警衛溝口土岐之外、上杉彈正少弼定勝家來加ル。

紀年 本丸 酒井宮内大輔勝忠

紀年 外曲輪 溝口出雲守直宣

紀年 二丸 丹羽左京大夫重光

紀年 外曲輪 土岐山城守行頼

紀年 相馬大膳亮胤義

右若松城在番被仰付。

紀年録 伊丹宮城之外、町野長門守幸和有。

伊丹順齋勝康
宮城越前守甫和

右若松御仕置として被遣之。

紀年 加藤式部少輔明成稱病氣辭領知。御糺明之上、獻誓紙。依之被改。奥州會津四十萬石、於石見國采地一萬石賜其子内藏助明友。父式部少輔可居住其所云々。
去ル十八年三月廿四日加藤民部少輔明利卒し、其男子御目見せされハ、嗣子不定、仍三萬石之領地收公の所、此度其男彌三郎明長被召出、新ニ三千石被下。

五月四日〇寛永二十年。

紀 多賀左近常長 能勢小十郎隆頼

右若松へ爲御目付被差遣。

石川彌左衛門成貴 佐々權兵衛次長

右同斷二本松へ被遣之。

御勘定 佐野主馬 出野半左衛門井出

右伊丹順齋ニ差添、若松へ被遣之。

— 寛永日記

一、去六月〇寛永二十年。加藤式部少輔明成配流于會津四十萬石ヲ差上。仍息内藏助於石州山田賜一萬石。其跡會津若松二十三萬石保科肥後守正之賜之。〇中略。
加藤式部少輔知行指上ル事、是去五月三日〇寛永二十年。家臣堀内主水ヲ殺サル。家中不和ニシテ分ル。于之伊豆守〇松平信綱。豊後守〇阿部忠秋。内證アリ。故自ラ廻老中領地差上度由申之。則達上聞被召上。實ハ以内證差上之。云々。

— 天享吾妻鑑

二日〇寛永二十年。この日、酒井讚岐守忠勝のもとへ、井伊掃部頭直孝、土井大炊

——寬政重修諸家譜

御成橋内上屋敷ハ是時收公セラレタル者ノ如ク、芝濱下屋敷ハ子明友之ニ居リタルコト、新添江戸圖其他ニ見ユ。

〔附記、一〕 宅地沒收

六月十二日〇寛永二十年。

一、勝屋次右衛門成。同長七郎元。利屋敷論之事、達御耳、數年同屋敷ニ兩人令居住、双方證據不分明之處、論之、其上廣屋敷ニ而兩人住宅有之、之可然之處、伯父甥之間にして公事ニ出以義、不屈思召之間、彼屋敷被召上之旨、大御番頭保科彈正忠中根大隅守内藤石見守へ於評定所老中被傳之。

——寛永日記

宅地給賜

宅地給賜

九月四日〇寛永二十年。

一、進喜太郎ニ屋敷被下之旨、阿部對馬守次。被申渡之。小林彦五郎上屋敷よりと云々。

——寛永日記

附記、二
山王祭

〔附記、二〕 山王祭

寛永頃已ニ盛觀ナリシ者ノ如ク、十八年ノ饑饉猶賑ハシカリシコト、羅山先生詩集ニ之ヲ見ル。

見山王祭併未。〇寛永十八年六月十五日。

祭豐年不增凶年不儉、是禮也。比年五穀不升、物價踊貴、塗有饑殍、而不知發也。富者居貯以待之、巨室汚吏得其便、益欲其商售、而倉廩盈。況其取民盡錙銖、且腴膏脂乎。奈何民不流而飢哉。賈生之太息、梁鴻之噫、不在今乎。六月十五日應某人招、與春齋春勝。共赴見山王祭。經行絡繹于門外、同來爲群、舉府觀者如市。其紛奢之費、不知幾百千也。想祭過、錦繡華彩皆爲芻狗塵泥也。巫祝與浮屠相雜、爲一日之輝夸也。睨而快笑者、百姓眼中之血耶。夫民者神之主也、彼瘠而此肥、彼飢渴而此醉飽、嗚呼祭者政之端也。其餘可類推焉。守勝春勝。唯讀書自若、不肯往觀。余歸賦一絕以告之。

三箇神輿肩上擔。前行物態盡愁。凶年不儉享歡否。依托浮奢除饑男。

九月十四日乙巳

〇寛永二十年紀元二三。〇三年〇乙巳、三正綜覽。

將軍乳母春日局歿ス。湯島〇本市

天澤寺ニ葬ル。

〇寛永日記。大猷院殿御實紀。

春日局葬瘞 事蹟左ノ如シ。

春日局葬瘞 事蹟

市街恢弘時代

九月十六日○寛永十年。

一、春日局一昨十四日申刻死去之儀、今日達御聽。因茲銀貳千枚、八木千俵爲弔料被下之。水、御精進被遊。

一、春日局死去ニ付、尾紀兩亞相○德川義直、德川頼宣。水戸黃門○德川頼房。尾紀兩宰相○德川光貞、○德川光貞。水戸中將○德川光圀。其外在江戸之諸大名登營。

九月十七日○寛永十年。

一、今日御社參無之。是春日局依死去之。

紀 朽木民部上使ニて春日局死去ニ付、昨日御登城之御挨拶、紀伊殿へ被仰遣。

九月廿一日○寛永十年。

一、春日局死去之儀就御哀憐、昨日迄被遊御精進。

——寛永日記

十六日○寛永二年。春日の局この十四日うせけるよし聞召て、けふより御齋居あり。この局は明智光秀か妹の子齋藤内藏助利三か娘にて、利三は光秀に従て討死せし後、此娘稻葉内匠正成か妻とあり、丹後守正勝をまうけ、その後ゆへありて正成か家を出しが、當代むまれさせたまひし時に御乳母とふされ、御幼稚の時より忠だちて二心なくつかへければ、頼母しき者に思召れ、その

夫その子等までもあつく寵遇を蒙りしとぞ聞えける。この局が忠誠のこと多けれど、まことしからぬことのみ多く傳へて益なきに似たり。たゞし公御病なやみ給ひしとき、おのが身をもてかはらん事を山王の社に祈願せし文は、今も宮庫に傳へたり。此局世にありし間は、諸家より證人として奉る女子等の事は、みな一人にて沙汰し、交替のときは、みづから對面して其事あつかひ、またときくは、勤仕奉る近臣等を一同時に饗し、みづから其席にのぞみ、忠勤のさまども、若き人々には教諭せし作善の料と事どもあるを見るに、婦女にはすぐれて豪爽の性質なりしとは、論せし。作善の料とて銀二千枚、米千俵給ふ。

——大猷院殿御實紀

春日局稻葉佐渡守正成室。

大猷公○德川家光。甚御出頭シ、寛永三年ノ秋、奉願、菩提所建立シ、武江神田湯島

天澤寺ト號、寺領三百石御寄附。寛永廿年癸未九月十四日卒ス。謚麟祥院殿

從二位仁淵了義大姉、葬天澤寺。其後天澤寺へ大猷公御參詣モ有、年忌云々、

法事被仰付。

——御外戚傳

廿日辛亥○寛永二十年(紀元二三〇三年)九月〇辛亥三正綜覽。湯島天澤寺○市内本郷區。ニ寺領二百石ヲ

加給ス。○寛永日記。續府内備考。

天澤寺領加給ハ、

九月廿日○寛永十年。

一、春日局寺天澤寺貳百石御加附有之、本寺領百石、都合三百石御寄附之。

市街恢弘時代

天澤寺領加給

天澤寺領加給事蹟

京都花園妙心寺末
天澤山麟祥院

湯島不唱小名
○中略。

寛永日記

御朱印寺領

略。上 其後寛永癸未年十月春日局逝去後、爲御追福、武州豊島郡駒込村ニ於て、
寺領貳百石御寄附有之。

續府内備考

是日

○寛永廿年(紀元二〇三〇三年)九月廿二日。大目付井上政重後守屋鋪地ヲ賜フ。○寛永

井上政重屋鋪

寛永日記ニ、

九月廿日○寛永

一、井上筑後守重。二、内藤織部成。正屋敷依爲隣家被下之。

〔附記〕池田氏鳥越邸

岡山城主池田光政太。新鳥越邸、寛永末年ノ給賜ナル可シト云フ。今此ニ附載ス。

鳥越邸

江城ノ東北ニアタリ廿七町許リ、淺草門ノ外茅町ノ裏ニアリ。六千五百五十八坪ノ地ナリ。其置レシ年月舊志ニ見ル所アラスト云ヘ、大概寛永ノ

附記
池田氏鳥越邸

井上政重屋鋪事蹟

末ニ置レシモノカ。寛永廿一年即正保元。六月ノ命令ニ、火災ノ手當定ラレ

シ中ニ、淺艸屋敷トアルゾ此邸ノ見エシ初メナル。此地ハモト寺地ナリシヲ、替地ヲ出サレ我邸トナサレシモノト見エ。其證下ニ注セル公事ノ辭ニテ、比、東北ノ郊ニテ罪人ヲ成敗ノ場ナリ、故ニ閻魔堂ナトモアルナリ。昇平日久シク、人家建ツ、クニヨリテ、今ノ千住ニ移サルト云。實ニサモアリシカ。イツレ寺地ナリシ故ニヤ、近キ比モ此邸ノ中ヨリ觀音ノ石像ヲ取揚ケシ。アリテ、今モ邸中ニ安置シ祭ラル、ト云フ。又此邸ノ表門ハ古ヘヨリ四脚門ナリ。是寺門ヲ直ラニ用ヒラレシモノナリト云ヘリ。又其門ノ扉上ノ冠木ヲホリテ、開キノ少シキ戸ヲ設ケ、其内ニ書キノ入タル箱アリ。サレト見ルコトヲ禁シタレハ、イカナルモノトモシル人ナカリシニ、近キ文化ノ大火ニ是ヲ出ス、内外ニヒカヘ柱ヲ立タリ。是餘ト其四脚ノ制ヲ存ゼンカ爲ニ、今ハカカリ門ナレ、内ニヒカヘ柱ヲ立タリ。是餘シト云物イカナルモノニヤアリシ、知ル人無シテ亡ヒシ事コソ遺憾ナレ。備後守殿御諱ハ恒元。烈公。イマタ御領地無リシ内ヨリ此邸ニ住セ玉ヒシト見エテ、正保元年ノ命令ニ此邸御マカナヒ役定ラル、事ナトモ見エ、同二年此邸替地ノ事ニヨリテ、蓮昌寺善龍寺ト云ヘル兩寺御府内寺社帳、東都伽藍記等ヲ考ルニ、蓮昌寺ナシ。下谷廣德寺ノ東ニ日蓮宗蓮成寺アリ。モシ此寺ニヤ。善龍寺モ淺草柳原ニ一向宗善立寺アリ。龍立吳音同シケレハ、轉セシモノカ。古キ寺名ナトニハ此類イクラモアレハ、此寺。訴ヘ起リ、留守居役能勢少右衛門御呼出シ有テ、彼兩寺ト對決ノ事アリ。其訴ヘノ始末ハ詳ナラネ、其時ノ記録ノ文ヲ其マ、爰ニ記シテ後考ニ備フ。

正保二年九月廿二日於御評定所松平伊豆守殿綱。信安藤右京進殿。長。重
 松平出雲守殿隆。勝御出、少右衛門御呼出シ、淺草新御屋敷之儀御尋ニ付
 少右衛門委不存、併新太郎被申附候ハ、蓮昌寺替地之儀、從公儀被仰渡候
 者、如何程ニテモ築立可相渡ト被申附旨申候ハ、左様ニ候ハ、能存候
 者被召出候ヘト被仰、宮野平之丞罷出候。

伊豆守信綱此時御老中、右京進重長、出雲守勝隆兩人寺社奉行。按此邸近
 キ比新ニ置レシ故、新御屋敷ト唱シモノト見ユ。其後寛文ニ淺草觀音後
 宍粟御下屋敷拜領有テヨリ、又其邸ヲ淺草新御屋敷ト唱シ、支舊記ニ見
 ユ。其事ハ附錄宍粟邸條ニノス。唱ヘ同シキヲ以テ觀者疑フナカレ。

一、蓮昌寺善龍寺平之丞少右衛門一所ニ罷出候。伊豆殿被仰出候趣ハ、善
 龍寺ハ何方ヨリ其方屋敷申請候哉ト御尋候ヘハ、新太郎殿備後殿ヨリ
 被仰渡被下候ト申候。左様ニハ有之間敷ト、伊豆殿御察ニテ御座候。沼池
 明キ所候間、寺地程築之相渡申候。其節モ替地トハ不申渡候ト、平之丞申
 上候。蓮昌寺善龍寺其段申候。

一、伊豆殿善龍寺ニ被仰渡候ハ、其方ハ借地ノ事ニ候間、蓮昌寺ヘ返シ候

ヘト被仰渡候。蓮昌寺ヘハ安藤右京殿松平出雲殿被仰渡ハ、善龍寺儀致
 相對、其儘置可申トモ、屋敷立可申トモ、其方次第ト被仰渡候。

一、此方ヨリ蓮昌寺ヘ屋敷替申時、度々使遣シ候得、凡談合ニ立ノリ不被
 申ト申上候ヘハ、伊豆殿被仰候ハ、新大殿御内衆ヘ折々相對仕可被申ノ
 所ニ、トシテヤク不被致候段、不届仕合ト被仰候。善龍寺モ度々蓮昌寺ヘ
 致相談候ヘ、凡我等屋敷ノ儀ニテ候間、誰モ構ハ有之間敷ト蓮昌寺被申
 候由、對決仕候。

一、伊豆殿被仰候ハ、重テ罷出ル儀ニテモ無之候間、左様ニ心得候ヘト、蓮
 昌寺ヘ被仰渡候。申分候ハ、唯今被申候様ニト被仰候ヘ、凡何ノ申分モ
 不被致候トカク、何かト申候者、御相談ニ兩人凡ニ屋敷御タテ可有由被
 仰候。偕伊豆殿御立被成候テ、右京殿出雲殿右之通ト被仰渡候。

右者評定場之儀、能勢少右衛門宮野平之丞兩人罷出、様子如斯通ト書
 立、差上申ニ付、留置之。

此舊記ノ文ニヨリテモ、モト寺地ナリシ支、又備後守殿ノ住セ玉ヒシ事明
 カナリ。殊ニ宮野ハカノ御傳ニ附ラレシモノナレハ、此文中ニ能存候者ト

テ出サレシナトアルニ符合セリ。寛文ノ比カト覺ユル古圖ニ、此邸ニ松平新
フハ本人ヲモ、此邸ニ置レシニヤ。サレト備後守殿住セ玉同キ四年備後守殿新
 田二萬五千石分タレ、諸侯ニ列セラレ、慶安二年ニ至リ、新ニ安栗三萬石ニ
 封セラレ玉ヒテモ、直ニ此邸ニ住セ、遂ニ安栗ノ御屋敷トハナサレシナリ。
按、履歷略記ニ、備後守殿安栗ニ封セラレシ時、別ニ屋敷明曆三年正月十八日ノ大
賜ヒシコトヲノス。其事ハ此大名家坊別邸ノ條ニ論ス。火ニ類焼ス。寛文八年二月四日上野車坂ヨリ失火シテ、又此邸類焼ス。此時
邸モ類燒セリ。同十一年九月備後守殿カクレサセ玉ヒ、安栗ニテ御子豊前守殿諱
元。御幼名兵部。立セラレシカ、御世シラセ玉フ事僅ニ七年ニシテ、延寶五年
號。智光院殿。正月八日此邸ニシテウセ玉ヒヌ。同三月御養子次郎殿諱恒行、後數馬ト稱セ
號幼覺妙瀝童子。御世ツカセラレシカトモ、御幼年ニテ備前ニオハシケレハ、翌六
 年秋ニ至リ御東行アリ、一旦御上屋敷へ入セラレ、同十月朔淺草へ移ラセ
 ラルヘキ所、方角悪キニ依テ今宵板倉左京ノ邸ニ御一宿、翌二日此邸ニ移
 ラセ玉ヒヌ。カ、リシ處幾程モナク今年十二月廿七日數馬殿瘡瘡ニテウ
 セ玉ヒ、御歳僅ニ四歳ニテ、御世ツキナケレハ、安栗ノ御家ハ絶ヌ。明ル七年
 四月朔ニ至リ執政ヨリ大井新右衛門ヲ以テ曹源公へ仰渡サレシハ、數馬

殿上屋敷ハ元新太郎殿屋敷ナルヲ先年備後殿へカシ申サレシ事故此度
 伊豫殿へ歸シ下サレ、下屋敷ハ備後守殿拜領地ナレハ指上ラルヘシト也。
此下屋敷ノ事、淺草邸ノ此上屋敷ト云ヘル即此邸ナリ。カクテ一旦御中屋敷
條ニ論ス。並セ見ルヘシ。トナリシカ、又程ナク分家ノ君信濃守殿諱政言、號天桂院、ニカシ進ラセラ
 レシ。其年月ハサタカナラネ、天和三年三月將軍家ヨリ飯河平四郎同市
 右衛門ヲ信州殿へ預ケラレシ時、鳥越ノ邸ニ幽セシ由舊記ニ見エタレハ、
 夫ヨリ前ノ事トハ知レヌ。是ヨリ先土器町ノ邸内ヲモ分チテ信州殿へカ
 シ置セ玉ヒシカ、是天和二年四月ノ事ナリ。元祿元年八月ニ至リ、彼邸ノ内伊丹家ト替
 地アルニ依テ、土器町邸ノ是月廿三日曹源公ヨリ信州殿へ仰遣ハサレシ
 ハ、兼テ御用立置レシ地面、此度過半伊丹家ノ替地ニ遣サル、事ナレハ、此
 地ハ殘ラス取返シ玉ヒ、其代リカシ置セ玉ヒシ鳥越御屋敷ヲ直ニ進ラセ
 ラル、由ナリサレト猶公邊ハ御借宅ノ由ニテ住セ玉ヒヌ。今年十月信州
 殿へ本所ニテ邸地賜ヒシカト、本所邸ノ條其地ヲハ御本家御預リトナサ
 ル。同十三年八月十九日信州殿此邸ニテウセ玉ヒ、御子内匠頭殿諱政倚、號二
 立セ玉ヒヌ。其後正徳三年ノ冬、此邸火災アリ。享保二年正月廿二日ノ大火

ニ本邸災ニカ、リシカハ、保國公火ヲ愛宕下ノ邸ニ避タマヒシカト、同邸
 狹隘ナルニ依テ、同廿四日此邸ニウツラセ、四月朔本邸ノ西殿ニカヘラセ
 玉フ。今トシ本所邸ト此鳥越邸ト交易ノ事御願アツテ、同七月三日御願ス
 ミケレハ、是ヨリシテソ全ク彼御家ノ邸トハナリケル。明レハ享保三年十
 二月十一日上野屏風坂ヨリ火起リ、此邸半燒失ス。同十七年三月廿九日又
 類燒ス。今年五月十七日留守居役御呼出シ有テ、此邸ノ内千七百四十坪御
 用ニ付御上ケ地トナリ、殘地四千七百九坪ノ邸トナレリ。但シ此度ノ御上
 ケ地ハタ、火除ケ地ナレハ、後追々抱地トナサレ、今モ此邸ノ内ニコモレ
 リ。下ニ出セル古圖(略)ニ
 朱引セル所此抱地ナリ。元文三年内匠頭殿隱退アリ、御養子信濃守殿諱政
 號長閑齋。法號大興院。殿。ツカセ、寶曆十年隱退、長子内匠頭殿立セラル。諱政香
 實池田織部由利一男。ツカセ、享和元年隱退、當主内匠頭
 殿諱政ツカル。天桂院殿ヨリ今ニ至テ六世、代々轉移ナシ。近キ比文化三年
 三月ノ大火ニモ災ニカ、リシカ、ヤカテ土木アリ。即チ今ノ殿宇是ナリ。

備藩邸考

大名火消

廿七日戊午

年〇寛永廿年(紀元二三〇三)〇三
 年〇寛永二十年(紀元二三〇三)〇三

大名火消四隊ヲ命ス。

日〇寛永
 記。

大名火消事

大名火消

四隊ニ分チテ府内ノ消防ニ當ラシム。

九月廿七日

年〇寛永二十年(紀元二三〇三)〇三

一、江戸中自然火事出來之時、家來召列、致四組、可消火之旨、被仰出。所謂、

壹番

貳番

水谷 伊勢 守隆勝

加藤 出羽 守興泰

伊東 大和 守久祐

京 極 刑部 守和高

龜井 能登 守政茲

秋 月 長門 守春種

松 平 市正親 英

松 平 美作 守房定

三番

四番

有 馬 藏 人純 康

稻 葉 能登 守通信

稻 葉 淡路 守通紀

古 田 兵部 守恒重

木 下 左兵衛 治俊

九 鬼 大和 守澄久

青 山 大膳 亮利 幸

井 上 河内 守利正

右之面々、壹萬石三十人つゝ、火消之者召列、今廿七日より十日替ニ、四番ニ仕
 可相勤之旨也。

寛永日記

市街恢弘時代

天海遷化

十月朔日壬戌○寛永廿年(紀元二三〇)壬戌三正綜覽。大僧正天海東叡山下○市内(谷區)。二寂ス。

○寛永日記。天享吾妻鑑。大猷院殿御實紀。

天海遷化事

天海遷化 左ノ如ク傳フ。

九月廿九日○寛永二十年。

一、午刻上野へ御成。是大僧正○天海。依所勞也。申刻還御。

十月小朔日○寛永二十年。

一、南光坊大僧正○天海。死去。

紀一、五時過御登城御對面、如例御酒出ル。御目見之時、天氣之儀ちと上意ニ有、

其後大僧正氣色之儀被仰出、然も無之様ニ被聞召ハハ、一志うのハと忽と謂、殊ニ日光權現様御奉公被致ハ人ニ有ハハ、方々以上様も事外おしく思召之由也。頃ハ僧正もかくこいとし藥ちともものハ不申ハ由上意ニ有、藥にも給ハきよし、將又春日殿死去ニ付、御精進之内も切々御登城よし、御満足ニ被爲思召ハ由、御掟也。こゝハも急ニ御挨拶有之ハ。退出ハ時、御老中ハ先日之御拜領物之鶴之御禮被仰上ハ歸也。

十月三日○寛永二十年。

大僧正死去、いまだ御耳ニ立不申ハ様子ハ上方之御用御座ハ故也。

十月四日○寛永二十年。

紀一、大僧正死去之段、今日八時御耳ニ立、公方様今晚ハ御精進被遊ハ。

於東叡山
遷化實ハ二日とミへたり。紀年錄二日ニ出。

一、紀伊殿へ僧正死去之趣、上使阿部豊後守○忠を以被仰遣。御禮有登城。

— 寛永日記

十月朔日○寛永二十年(中略)。このほど大僧正天海病や、危篤のよし聞召れたり。この僧一宗の高徳といひ、神祖にまたくつかへ奉りしものゆへ、一方ならずおしみ思召し、ばく御懇問ありて、強て藥と服せしめらるゝよし御物語あり。三卿も故舊と待遇ありて、忝よし啓して退かる。この夕前毘沙門堂大僧正天海遷化せり。この天海は、芦名の支族三浦氏にて、奥州會津郡高田の産あり。幼より穎敏にて、生來腥羶といみ、釋氏の教と信奉す。十一歳のとき、若杉稻荷堂別當辨養と師とし、薙髮受戒し、台密の學に精力をつくす。十四歳より笈を負て諸國の名山靈區を遍歴し、名僧知識に參禪の功をつみ、叡山にのほり、こ

は甲陽に下り、武田信玄の寓客となり、あるときは芦名盛隆か聘に應じ、故郷にかへり、稻荷堂を守る。盛隆か子盛重か時、天正十七年伊達政宗か芦名を攻しとき、芦名の家人等みち政宗に内通し、戈を逆にして主をうつゆへ、盛重やむ事を得ず、家族ばかり引つれ、城をいで、走りし時、天海釋徒ながもこれを守護し、敵の大軍を蹴散して立退く。豊臣關白小田原を攻れし時、芦名盛重その旗下に屬し、常州にて所領の地をたまはりしかば、盛重また天海を迎て、その地に不動院を再興せしむ。其後關東諸刹に移住し、後に山門にのぼり、東塔南光坊に住む。慶長十三年におよび、神祖の召に應じて駿府に赴き、御顧問にあづかり、しばしば其宗門の僧徒をあつめ、法問をふして御聽に備ふ。かつ御閑談に侍して宗門の秘蘊を啓し、また山王一實の神道といふ事を進言するにおよむで、特に盛慮に應じけるにや、これより常に左右に侍りて、その申處ことごとく舉用せられずといふ事なし。神祖大漸に及ばせ給ひて、久能山に葬り奉り、日光山にうつし參らせ、御神號をくさせ給ふ事迄も、専ら天海か執行ふ所なり。京にも後陽成院ことに歸依まし、しきりに進められて大僧正にのぼり、毘沙門堂の勅名を授けらる。遂に日光東叡の兩山をひらき、叡

山に合して三山とす。台徳院殿より當代にいたり、神祖の御眷注ありしものあれば、ますます御待遇ねもごろにして、その病めるにのぞみては、執政元老その病床に看侍し、官豎群參して、治療を議す。まして御みづか山房にのぞませたまひ、湯藥を賜ふにいたる。今蟬脱に至りて、その壽齡を詳にせざるといへとも、信玄がもとに客たりしは、既に壯年のよしなれば、今はた百有餘歲たるべし。正保四年十二月にいたり、上足公海等か請によりて、慈眼大師の號を勅賜せらるゝといへり。

三日寛永廿一年十月大僧正天海が遺書なすびに三種の靈寶唐箭。夜叉儀。千手像。一なり。其弟子等持出て奉る。

四日寛永二十年十月大僧正遷化の事聞召、夕の御膳より御さうじなり。また阿部豊後守忠秋御使して三家へ仰遣はされしは、天海大老の事なれば、天然の壽をもつて終をよくせるはさることなれども、日光山御宮のため、またはその宗門の爲、かたがたおしみあけかせ給ふ旨つたへらる。また天海の弟子毘沙門堂門跡公海はじめ盛憲、晃海、豪規等をめして、天海か葬地の事、日光山中いづかたにさだむと申置たりやとはしめ、追福の作法もことごとくその遺言

にまかすべしと仰下さる。葬地は日光山中大黒山をもて、かねて終焉の兆域とさだめ置きたるよし聞えたてまつる。

五日○寛永二十年十月略この夜天海入棺す。堀田加賀守正盛御使して焼香す。

六日○寛永二十年十月大僧正天海の遺骸を日光山神廟の側に殉葬するにより、松平右衛門大夫正綱をして護送せしめらる。三家よりも各護送の家士をそへぶ。その外藤堂大學頭高次はじめ諸家より護送の人を出す。僧俗千餘人におよぶ。その道は、けふ川越仙波、七日世良田、八日佐野春日岡、九日鹿沼薬王寺、十日登山たるへしとさだめらる。これその遺言に従はれし所なり。寺社奉行安藤右京進重長、松平大隅守勝隆さきだちて仰を蒙り、山にのぼりて發引を指揮す。

——大猷院殿御實紀

異二日一十八日○寛永廿二年十二月東叡山南光坊大僧正遷化。則被贈慈眼大師。時百三拾三歳。

——天享吾妻鑑

〔參考〕僧天海

釋天海前大僧正、勅諡慈眼大師。世姓三浦氏。爲通之末蘆名盛氏之系族。奥域會津郡高田人也。椿萱久以無嗣而爲嘆息。此故夫人深企大願、奉乞儲子於月

天子。其容儀非柔弱人之所爲。每到下齋第三日、汲井華於新器、桑榆影沒、則戴其水器、亭々獨立、正止于至善而已。身心既定、器水不動、待得月之上、嶮峽、移玉影於頂上、誓水、更加冷水百倍、而以澡浴身體、欽著明衣、叮嚀祝願。其意曰、歸命月天子、本地大勢至、爲度衆生、故善照四天下、伏望使妾而生福德智慧之男子。特盡敬而仰拜、信心不休。以累歲月、或夜夢、吞奇華一片、仍有懷孕、嘗不歷困難、時至而誕而已。一家胥說而稱賀。鞠育經時、殆知滋味之及己、雖然、孔嫌肉味之哺、強進則嘔却了矣。自然有出塵之相。此故雙親起感心而不汚穢。近隣有靈場、謂之稻荷堂。竟投稻荷堂、別當辨譽矣。年逮十有一、薙染受戒、早稟台密、既而辨譽知海公之器宇有英利。故不事師資之次、居常使海公配上首矣。想夫、師亦師哉、誠所謂師其道者乎。抑儲子之說不可勝計。精于釋典、備于儒書。禱爾孔夫子於尼丘山之神、仍號仲尼。凡人心之拙、嫉他之有彥聖智福。此故不信貴高人之有以矣。惜哉。

青年十四、確乎發修道之心、蚤催行裝。其姿儀負笈、振錫、沙門幘、古風甚高。竊以台家中興之力、雙肩之笈、雙手之錫、於戲偉哉。徑到野之下州、宇都宮粉川寺、謁住持權僧正皇舜。仍混雜學徒之中、初列班論席之末。雖然、推當問者、宿苗之

所長法要早抽芽者乎。此日也皇舜在于外，聞問者之聲遠姚欣然入寺告衆曰：聲音雅而遠姚者，越格之吉兆也。今日問者雖後輩，他時必棟梁于台家者乎。抑皇舜者曩昔明哲也。此故衆僉服膺而信而已。爾來涉獵東關之名緇，常恆法談之巷，無處而不印足跡。

天文年中，初登叡岳，入神藏寺實全上人室，孜孜不懈，習學止觀玄義文句之骨髓，深探檀那一流之奧藏，以遂玄旨灌頂。然後入歸命壇之靈場，上人舉示數個條目。天海頓機之證，如風之發，似河之決，疑團不殘，如雪之盡，似冰之消。仍自覺運先德綿々而傳來，玄旨灌頂十箇之相承，歸命壇七通之印信，縷々條々，都付囑天海了矣。

同二十年，入三井淨刹，學俱舍性相等於勸學院尊實，深含天親之精粹，飽嚼圓暉之芳菲。其他講筵論席，不勝枚舉。本家傳之所由，遊目於華嚴楞嚴等諸大乘之中，雖馳志於多岐之法門，却凝觀於一家之要道。見聞覺知，不心捨家。行住坐臥，不手絕取卷。

弘治年中，在南都窮日本紀於異域林和靖遠孫成重。若非溢餘之力，爭出一家之外哉。同年間寓居于興福寺，厚志於法相三論。于時永祿元年，聞慈母之嬰疾

病，心慮不安。寄省觀之，思於萬里東，仍早發南都，而還奧域。奉見慈母於不豫之枕席，不勝激切懸倚之至。漣然泣下而已。須臾不離左右，欽奉湯藥於床下。雖然者年之後，病相荐侵。此故時至而夢逝矣。仍輻送而厚薦冥福，至矣盡矣。問曰：沙門捨父母之幻相，以要歸無相之實相，今何事世之至孝乎。此故曰：流轉三界中，恩愛不能斷，棄恩入無爲，真實報恩者。答曰：先欲使人出流轉門，而入無爲寂滅之本空時，舉此靈文，若守此文，堅取寂滅者，三世諸佛之寃也。宗鏡錄曰：偏執相而成妄，定據性而沈空，且復古人句曰：無爲無事人，猶有金鎖難，抑佛之教，以孝爲初。此故輔教篇引梵網經曰：孝名爲戒，蓋以孝而爲戒端也。子與戒而欲亡孝，非戒矣。戒經曰：孝順父母，師僧三寶，孝順至道之法也。疏云：行此孝行，則敬順無違，是名持戒矣。世尊逮其喪父也，躬負其棺以趨葬矣。然冥權之大士，暫以權道背却父母，譬如用針灸而治衆病者，非凡心之所測。

同三年，入足利學校，學孔老之書。

同七年，到上野州新川善昌寺。于時善昌會中有越格禪客，名曰道器。時人稱之爲兼學才。仍天海與亮，後移于妙寺。任權僧正。相呼相伴，聽首楞嚴經并易經。抑海師以素志之在己，再要登叡岳。雖然元龜二年，嬰兵燹，而玉堂金社如山之壓卵，拂痕

而磨滅而已。加旃滿山之學徒或切害或分散就中滿藏院亮信正覺院豪盛等引誘群僧而到甲陽太守武田信玄之麾下信玄謂二老宿曰我久要聞台宗之深旨然未果素顏今幸得退山之徒偏是三寶之所賜乎茲以衆僧且安法命而已乃鍾東關之所化三百口以刷論談之法席俊彩勝友鱗次配抵天海亦入此會于時位丁中臘山門之衆侮東關之學徒議曰山上山末之能所誠是優鉢之會也爲遺光輝於累葉兼不定問題難題百箇內只任闡之所由以可定一題果探得闡之一題披之則隣虛細塵空不空也問者立毗曇數家意不可空隣虛細塵之義答者於毗曇論所立可有空極微之意云爾講師亦依闡而要勉之評筵既定衆僉戰々兢々于時天海中講師之闡想夫值此屆請蓋護法神之所爲乎道德之美惡衆儀之猶豫都在一座之變而已誠夫可恐可慎台徒分心於夷路國守聳耳於君臣加旃教門碩師禪林古老巍々乎潛于法座之外其他風僞成(凡歟)群以塞庭上抑亮信豪盛等之有譽于世也乎衆僉如望龍虎之風雲雖然講師天海神氣不動堂々乎登高座振傾湫之辯顯倒岳之機問難往覆恰如環之無端古人曰高談雄辯驚四筵夫是謂之乎聽聞之徒衆不見有厭倦色者皆是忘坐而移時轉問轉答仍自晨榻之天逮昏鐘之後大衆讚嘆曰海師者天縱之智

辯乎厥鋒不可當矣自是朝市山林俱共知名而已豪盛尊老大器許海師懇篤慰誘敢無出厥右者此故盛公以惠心一流之奧懷四箇大事略傳三箇教行盡攤手而付與海師了矣便題證位得解之偈以闡于三重透得之印證國守信玄聞海師之秀發渥遇不常歸依益重雖然會津城主盛高遣使堅請海師曰今雖分緇素之貌元是一家之系族也仰願還降誕之地弔慰父母之冥靈竝度吾徒之迷津仍去甲陽還會津信玄愛惜國家之法寶而悲嘆不休海師於本邦而司稻荷堂別當職盛高嘔喻而歸敬再興郭內稻荷之社頭竝改藍宇樓閣以竭美麗加瞻仰盛高之猶子盛重弱冠而繼其家業

天正十七年伊達政宗運計策於盛重家臣某等竊放君臣之心茲以士卒結阿黨與政宗政宗窺他暇隙而攻入本城盛重放身而防戰然弱冠也無勢也握奇正之手失弓弦之勢宜哉值不意之盜戰而武運既窮于時盛重謂海師曰事既迫切願有奇計耶海師曰家臣等忘舊恩而挾虎狼之心捨孤弱之主君却與大敵不義之所爲復何言矣即時率盛重并其一族忽欲退去白川逆心之凶徒乘勝而追北盛重身命殆若懸絲海師亦如累卵雖然自若苟不變節操內觀三寶擁護之法幢外現瞋恚之假相恣揚雄音曰汝等凶徒爲小慾企大逆流惡名於

子孫之末，人若不罰，天何許之，加旃苦魂，魂於身後之責者必矣。吾雖現沙門之貌，不捨系族，不忘檀恩，只每要死于義而已。凶徒聞此忠言，而卓豎身毛，戰栗慚愧，皆自退。昔五臺山鄧隱峯，遇官兵與吳元濟交戰，飛錫乘空而過，兩軍遂解。右出于大丞相張商英護法論，想夫慚于道義之所爲，兩軍互消血氣之勇者乎。今又海師堅守師檀之義，而不顧危亡，捨身於虎狼之前，仍凶徒忽屈，抑道義之所爲，古今雖異，不枝梧於戲。

初天正五年，辭甲陽而趣會津次，掛錫於世良田長樂寺，遇住持春豪和尚，遂葉上流灌頂大阿闍梨位。先是葉上派下知識大寧禪師，寓居會津，得時而朝參，慕請撥草瞻風，發明教外別傳，相承不立文字。流水經卷，落華陀羅尼，謂之顯密。悟之者謂之禪師，抑顯密之異名也。差別中之差別也。此故妙樂曰：圓門三昧，陀羅尼體同名異，出于佛祖統紀。葉上派下以顯密禪之一致，而建立宗旨。譬如鼎之時，三足似伊字之劃三點。此故長樂主席開顯密禪之三關，而接學人者，古來標榜也。大寧天海啐啄同時，機々相投，仍受禪密印證。

同十年，到會津天寧寺，聽碧巖集於善恕和尚。一百則話頭，句々言々，博問厚學。雪竇頌，圓悟評，莫不修練。加焉研究五位君臣等了矣。

同十八年，關白秀吉公發向東關，拔小田原城。于時盛重歸于秀吉公幕下，以委身命。仍拜領常州河內郡信太莊六千町之地。領內有古刹，號曰不動院，以慈覺大師彫刻之不動爲本尊。此地爲七百餘僧之衆頂。同十九年，再興不動院，仰以延天海俾住院，寄附熟田二十町之地爲院務。師檀之所由，甚有深旨。詳于上章。文祿二年夏，天大旱，五穀將斷，萬人係感。村々黎民隨處而招諸寺名緇，或俾繙請雨經，或俾持請雨呪，加焉雖施種々之妙手，萬里無雲，而雨點全無。粵常州信太莊庶民，競來訴與于天海法印。海師撫運而不獲止，早就其請，仍欲赴高田浦九重深淵。時有女人持五鈷，來度與海師曰：今日修供，夫是用焉，特來獻而已。言畢而忽爾不見。海師臨高田之淵，取竹葉一片而作小舟，載佛舍利一粒，以浮于九重之淵。于時神龍變化，而現些子之形，其色如玉雪。韻書謂之瓏，禱旱玉龍也。搖頭擺尾，速引入小舟於九淵之底矣。海師意恣，請雨之靈驗，念八大龍王而爲上首，請十方諸龍而接壇上，一心修請雨之祕法。且復衆僧唱法華序品，少焉陰雲垂地，雷電交擊，甘雨之潤澤，天休什吉。群黎胥說而抃野。海師歸院之後，使人尋獻五鈷者，不知其所在。村民處士皆告曰：所龍女之示瑞兆，更非可疑者。海師珍護五鈷而不止，永爲終身之靈寶。今納于東叡山法藏矣。

同四年盛重之室甚苦難產。此故訴海師而頻乞神援之義。堅不獲。拒修練身心。向院之本尊切禱。寤寐恒一而忘。烏飛兔走。同年十月朔日。鷄鳴時至。非夢想非幻化。恍々惚々而見明王。威容赫如。按劍索於左右之手。屹立枕席之傍。告曰。檀越家人今既生兒。汝須到檀家而稱賀。海師望足而不疑。以身口意澡浴明潔。一心頂禮。述謝詞於明王前。乃告靈瑞於數輩之傍。僧早要赴檀家。于時傍僧曰。事若不實。寶珠生瑕。言未終。盛重介使倉卒告來曰。寡婦既產。母子快然無恙。仍滿院繙侶大驚異而至祝矣。

慶長四年。受權僧正豪海付囑。住仙波喜多院。抑此院者東關第一學跡。甲子諸餘末寺。天海有旨常瞻仰虛空藏。及初住翌年。自十二月十二日晚景。修法精練。群潔身心。期十三日曙。欲拜明星。時自寺前池。靈光一團忽然飛去。早向韜跡。微妙之妙色。希有祥瑞也。問曰。是何謂耶。答。龍吟雲起。虎嘯風生。虎是火德。龍是水德。雲生水。風起火。是理之常也。心境一如。諸法實相。善人感善夢。而見種々善相。惡人感惡夢。而見種々之惡相。火車轟。紫雲垂。臨終之善惡亦同矣。海師見希有之靈光。復何堪于怪乎。滿院大衆至祝曰。開山尊海要布惠心流之大法於東關。遠離叡岳。而宿此野澤邊。其夜一點明星出此池而登天。尊海知大法繁茂之吉。

徵。以開闢此荒野。建立道場。此故山曰星野山。池稱明星水。以之見之。今時靈光非明星而何乎。台宗中興之瑞甚希有也。

夫東壤宗光寺者。古來名藍也。厥地被攝于常州下妻城主結城之麾下。多賀谷修理大夫管內。城主常恣家業。淨利左右。汚其放埒之塵。住持權僧正亮辨深厭他豪僑。天正十九年退隱于下野國芳賀郡久下田。多賀谷不顧已。却移怒於亮辨。文祿元年華裂宗光之名跡。并斬切竹木。茲以鴻業道場。俄成荒野矣。亮辨悲嘆不休。偏愛惜法財。泯絕而已。此故依賴于久下田城主結城兵部大輔村正入道蟠龍後號水谷。同子息右京大夫勝俊。摸寫長沼宗光寺於久下田。別建立一寺。名曰宗光寺。雖然無力興大法。門徒等議曰。世考道力之有餘勢。只天海其人乎。仍請海師。仰欲俾住院。然堅辭不任。其請亮辨。懇懃屈請曰。台家一流之法要。今既欲乾願。宜廻倒瀾。海師屈此義言。而不獲峻辭。慶長八年十一月二日。移久下田宗光寺。同二十四日。欲酬于高祖大師慈蔭。鳩末流之能所。開論席。謝法恩。同年十二月十有四。遂三昧流灌頂大阿闍梨位。法式緇流。足以砥柱吾道。水谷父子瞻仰海師有道譽。附資糧二百斛。曰。師夫他時異日。在何國何地。永寄此資糧。而結善緣者必矣。抑蟠龍父勝俊。祖父全芳一房自海師所化之昔。久修舊交。且復蟠龍

勝俊繼父祖之志師檀之鍾愛竟不齟齬今覃伊勢守勝隆矣。先是海師一日告水谷曰吾昔日齋廚屢缺于時厚檀恩以周急淑惠之至非言之所及今吾戴國恩而齋廚充足強莫寄資其君子周急不繼富水谷答曰吾家永繼父祖之志要二世之悉地而已豈不曰乎佛陀不還入中伏乞莫固辭海師察厥深志而感激甚矣。今建立一院於東叡山名曰東漸院以右資糧二百斛爲院務矣。

同十二年山門大衆確執言上事於家康公是非決定或擯山上或沒坊職家康公命曰今有名于台家者誰是其人也兩衆共言上長沼天海秀于緇林之上近代能化也家康公信兩衆一舌告曰必以若人可爲山門探題執行此故海師受大衆請移南光坊同年十一月十日從梨本門主二品法親王最胤以相承法曼院流三部都法灌頂之奧義。

同十三年承家康公台命初赴駿府山門緇侶祖席于七社林中以賑行色于時一猿忽然出來其相貌甚異也不怖畏人倫子居海師傍海師欣焉意是神化也仍告衆曰承台命今日初下山此日此靈獸混于祖席是瑞兆之所表也山王一實之神道台家三諦之深義必標的于澆世者乎衆僉欣服自謝緇侶杳入駿府直對家康公儀相閑雅一禮既成仍退于一院而寓止而已家康公告左右英士

曰夫天海之爲人也人物風標越格之偉器也或夜話之次家康公粗宣淨土門之法要誇海師曰是非祕極深旨耶答此等法義於台家者極劣淺夕義趣也小沙彌等亦所持論也家康公愕然曰昔吾以新潔之薦爲茵或坐或臥期七日而傳此要義何敢下之耶所謂小子亦曉之可催論席於不日之中隨此嚴命鳩台徒以三種病人如何接物利生爲問題各交詞鋒於駿府城法要論談以此席爲權輿問者講師之持論獅子嘖呻象王回顧海師之精義恰如金翅鳥之當宇宙當下論專修門之祕義漸覃于乙座之一臘而屈甲座而中臘以上之所論決者全非下機之所及家康公有天質之利機此故辨持論之淺深而已同十四年滿山大衆寄請狀於駿府延天海而要俾勤大會法式海師言上此義於家康公然惜暫別而不賜免許台徒頻呈堅請之訴書此故蒙登山之命報曰早期重來同十四年後陽成院聞天海有兼學之大機降勅命俾參內對御不倦舉示台家法要此故叡感激切而益問益答。

同年十二月九日降綸命任權僧正上卿中御門中納言資胤卿職事藏人左中辨藤原孝房又改坊號賜智樂院之號。

同十五年欲執行叡峯恒例之大會滿山緇侶議曰天海者宏才博覽義辨全超

他誠夫當精撰之法器，仰願蒙新題者宣旨，粵當座主宮被達，叡聞，乃賜題者勅許。台徒僉開眉而喜悅，抑使法儀而重於九鼎者，探題精義之職也。今預滿山之推舉，非澆季世之珍奇耶？累年嗜德之法輩，遠近奔波，要遂堅義，偏是思慕海師之精義而已。甫于五卷日，勅使行粧之締構，不可勝記。題者嚴重之舊規，誰敢企及。兩科十題之決擇，十日晝夜之精談，言々微妙，句々分明，文義挺特，如新月之出雲，詞辨英發，似流花之逐水，合筵閱爾，刻道譽於心肝而已。

同十六年任正，上卿西園寺大納言實益卿職事藏人左中辨藤原孝房奉。于時後陽成院自染宸翰，賜毗沙門堂之室。

同年，再受台命，入駿陽城，暫次于賤機山麓，摠持院得時而一禮，鸞鳳相依，芝蘭共生。家康公動喜容，謂天海曰：吾以武德而領天下，有年于茲，熟顧曩昔，欲亡不義之怨敵，幾失我勢之士卒，治不忘亂，今以行刑罰，想夫何無不意之罪障乎？若非法力之所扶翼，爭脫塵累之身乎？方改宗旨，以師爲師範，願教而不倦。海師答曰：何必奉違台顏，然則先請諸宗名緇，原諸宗法要，蓋夫海師意以顯密禪之一致，要奪諸家之偏說，示山王一實之神道，欲俾知二世之悉地而已。故人曰：三千事理，即具之談，抗折百家，出佛祖統紀，凡以機奪機，謂之無我，大我，謂之活脫。

自在於戲深哉，海師一口拜吞四海之法流，于時宣布嚴命於諸山，請四維之碩學，探八宗之祕要，文字之所及，詞辨之所通，皆是窺之，雖然機々不相投，機緣法緣都歸海師而已。稱嘆悅伏，寵遇日渥。此故家康公陶神妙觀，坐忘一室，忽然發明天真獨朗之玄妙。茲以海師付囑台家血脈了矣。家康公謝曰：二世悉地，又有他耶？祕重鐘愛。

同十七年，家康公謂天海曰：東壤八州，而何地名藍，何地應海師意？答曰：仙波星野山者，東州第一靈場也，所以者何？尊海僧正開基，惠心流本源，茲以台徒之瞻仰如泰山，如北斗，先是吾於彼地，感明星之現靈光。右記。家康公欣々服膺，或時仍略。趣川越仙波，自回顧舊刹四疆，告海師曰：封地甚狹，開基以來如斯者乎？答曰：昔封地極數十町，自中古寇後，沒寺務，滅靈境。家康公曰：封疆可任海師意，仍召酒井備後守忠利，自糾繩四疆，命良匠而俾經營焉。堂寺再興，煥然改觀，加之寄五百斛資糧，以爲寺務，抑師檀合其體，或三生或七生，乃至歷無數世之生，捧檀恩之手，加佛陀之力，加旃後陽成院忝賜星野山勅額，於戲時哉，命哉。

同十八年，家康公命曰：吾常臨法筵之側，身心悅懌，不知老之將至，雖然坐久而成意外之勞，更無方便乎？海師舌下得旨，歸來而鳩論衆，告曰：他後於大檀越前，

問難答拆，須限于一挨一拶。時人謂之。一句問答。此論席自海師始，能所共句，碎玉明々焉，歷々焉，道根之所芽，日々新也，甚愜上聞矣。西天古皇先生指成佛之期限，或時說短，或時說長，以應衆生機，謂之不可思議之方便。同年家康公賜日光山於天海僧正，其義趣預定寄終之地，此故以隣疆之閭里，寄附于日光山。

同十九年八月三日，平安城大佛殿造營功成矣。供養導師者妙法院二品法親王常胤開眼者仁和寺一品法親王覺深，二尊決定要竝化儀而已。于時以此法儀呈露家康公，公有嚴命曰：勤法事，全不可依官位，只可任法力，吾治天下，官昇右大臣，雖然入佛法時，全不依其位，仁和門跡何敢當開眼師乎？幸是天海者，兼學偉器，四海導師也，仰可爲開眼師，便出金龍錦袈裝束等，自授海師以饒行色。今納于日光山廟藏，蓋大佛供養有以而敗止矣。仙洞與當今并女院年來所杜絕，同年海師呈忠義而俾和睦，先奉奏仙洞，其語曰：體字訓禮，禮法也，各親其親，各子其子，仙洞發感心於此句，速宥年來之逆鱗而已。

同十九年，勅於天海僧正，禁闕而展論席。論題者，圓頓行者念西方彌陀耶，復不念耶。講師者久運已講，問者登良麻呂。維時十二歲。後號見海。海師顯我心即西方之旨，而精義義辯無礙，卷雲霧吐風月。于時簾中并月卿雲客，嘆舌動梁塵，夫唯心樂國

普遍十方，自性彌陀圓融一智，妙應於色聲之境，流光於心目之間，就中返妄歸真，直下背塵合覺矣。帝都興聖寺開山圓耳和尚，聞僧正天海透過黃龍之關，繼續葉上之密，一日來入眼大師室，舉覺商量，不濫棕顯綱密記之智食，且復甄別教外別傳之玄旨，賓主歷然，閩蜀同風。抑耳和尚之爲人也，研究諸經論，全非他數墨之儔，何敢守株乎。天質自然，具足禪機，先是高麗僧徑山住惟政大師，偶遊于此方，耳和尚得時而不怠，謁政大師之旅館，呈露見解，括諸錄之綱要，捧數箇之問書，問答往復，文筆走玉。政大師大器許焉，仍播道譽於本邦，然後慶長十九甲寅年，受顯密禪一致弘通之印證於眼大師，以興長樂之宗風。

元和元年，傳台家血脈於仙洞，仍賜以御衣一領，排一箇御製作鳩杖一枝。古曰：民年七十者授之以王杖，復曰：王杖長九尺，杖頭以鳩飾，取鳩不噬之鳥，欲老人不噬也。仙洞命曰：即座可著排。海師作憚勢，再命曰：知識有三種，海師是爲朕教授師，殊高臘者年，何敢固辭，仍應尊儀。仙洞告曰：自今以後，對三公亦不可撤之。同元年，後陽成院賜高閣於天海僧正。俗曰：高屋。并中和門院寄附御殿一字，仍建立之於叡山東麓，名曰法勝寺，方是賜王者之居，以爲藍宇，甚非珍奇乎。大僧正天海建立一字羅漢堂，抑此十六尊形者，來由明覈。天文年間，大內左京兆義隆自

赤縣州奉渡于本域、然後屬毛利入道宗瑞之手。前黃門大江輝元事跡也。大師逮、創立新寺於山門東麓、寄附此尊形、傾盡丹心、檀度孔厚。

同二年、於駿府城、家康公就異例之床、請天海僧正、謂曰、死生有命、強非可嘆惜者、吾既覃古稀之歲、累算非乏、久領天下、居富貴、讓世於秀忠、而流于子孫、此故無思、無慮、深受法恩、不昧于真俗、現世後生安穩善所之樂、偏是弗師之所庇乎、粉骨碎身、以不足酬、夫山王一實之神道、久得其功德、今更欲請益、所以者何、沒後之日、必現神力、宜加守護、一令子葉孫枝、而永繁茂矣、二令佛種日種、而綿々而永不斷絕矣、三令天下武運而永呵護不祥者也、海師不耐、感加涕泗、漣如也。答曰、君久掌天下、非一旦之所能、宿植德本、而得今日、今日善根、何不獲來日秀發乎、誠是理之常也、諸佛救世者、住於大神通、為悅衆生故、現無量神力、以此句為發軔、兩部習合之神道、以要路而說示、家康公重曰、吾取滅而後、先葬于當州久能山、歲華經一周、達叡聞、請神號、然後可遷于日光山、遺命赫然、此故覃于薨御、暫奉安置久能山、天海僧正控三密之樞、鍵凝五相成身之觀、解灑五瓶之智水、澄三部都法之心海、加持修證、丁寧反復、作拜而去、然後秀忠公欲達神號之義旨於叡聞、同六月、使天海僧正趣帝都、板倉內膳正源重正、法印永喜為副使。

于時有邪俗佞僧、暫雖作障礙、義屈且退、蓋夫信宗源神道、所以昧于兩部習合之奧祕者乎、同年七月二十七日、轉正任大僧正、上卿廣橋大納言兼勝卿、職事頭右大辨藤原兼賢朝臣、夫神號奏聞之旨、同愜禁裏仙洞叡慮、特自仙洞賜兩部習合之舊記、乃授神寶并法具等卷、於中原職忠朝臣、以令辨備。元和三、丁巳年正月五日、壬子、丁正親町院二十五回忌、雖然惜天海大僧正赴東關、同二丙辰年八月五日、巳酉、豫探支聖忌、於仙洞被行宸筆御經供養、大師為御導師、題名僧十口、唄師惠心院探題法印良範、西樂院法印舜政、散華藥樹院已講法印久運、梵音白毫院法印真慶、行光房法印尊能、竹林房擬講法印賢盛、日增院法印珍祐、東光房法印俊海、錫杖松禪院法印慶俊、伽陀觀音院法印忠尊、著座公卿、別當西園寺內府、實益中御門亞相、資胤執事萬里小路宰相、孝卿堂童子秀雄、舟橋式部少輔、伶倫無樂之次第略之、被物兼於殿上西間、認置之、御導師被物、織物唐織、縫薄等。三重、先別當被取之、手長侍臣、於長押之內、奉之。職忠朝臣、於長押之外、役送。次一重資胤卿出長押之外、取之、職忠朝臣奉之、次一重執事取之、同奉之、題名僧十口之被物、四位五位侍臣取之、法事次第略之、抑當忌本尊者釋迦新造畫像也、仙洞自染毫、而書語句於像之背面、以賜大師、一本大師作天海、天海下、秀

忠公聞仙洞御筆命法印永喜請畫像於營中而拜覽彌嘆伏イ海大師有道譽任大師遺告此本尊并根本大師渡唐日將來天台大師畫像并以納山上本坊不名而曰山者古來永爲台家公器俾祝延興法之義者也。

同年大僧正天海辭帝都而趣武州九月三日入江戶城下早達神號勅許之旨於秀忠公于時秀忠公大作喜色同十七日城中而賜盛膳於海師其品連七五三。

同三年奉遷久能御神體於日光山其行裝縷々詳于東照緣起。

同三年三月十五日下駿州久能山同年四月八日奉遷東照宮神輿於日光山奧院石窟具禮行色翼從嚴整偏屬天海大僧正指揮而已于時大僧正展尼壇於真前洗心滌行深作禮拜淵默而趺坐半目密凝兩部習合之念想觀欽若弘持取五鈷而加持神宇之四疆祭如神在仍授五眼具足之印明於大權現了矣。問曰或時授戒法于神靈或時授印明是何謂乎其證復如何答曰此問語是街童竈婦之戲論也何加答釋耶雖然抽一二金罍以刮後昆人之眼膜而已昔嵩岳元珪禪師一日有異人峨冠而至從者極多師曰善來仁者胡爲而至彼曰師寧識我耶師曰吾觀佛與衆生等吾一目之豈分別耶曰我此岳神也能生死於

人師安得一目我哉師曰吾本不生汝焉能死吾視身與空等視吾與汝等汝能壞空與汝乎苟能壞空及汝吾則不生不滅也汝尙不能如是又焉能生死吾耶神稽首曰我亦聰明正直於餘神誰知師有廣大之智辯乎願受以正戒令我度世師曰汝既乞戒即既戒也所以者何戒外無戒又何戒哉神曰此理也我聞茫昧只求師戒師於是爲授五戒也右出于大藏一覽夫扶桑者神國也此故開闢以來神靈之變體或託于人或現其形口碑舌沸不遑毛舉山王權現者示靈跡於傳教大師蓋山門一家兩部習合之神祕本于茲者乎夫明神之陰顯猶月之印水有水即顯無水即隱只恐無水月元不隱若人無水而謂月隱者非也所謂水者何乎譬之內清淨外清淨月者譬之明神神有三種無差別之中差別也有正神有邪神邪正之外謂之法性神此義旨以宗源不可沙汰以兩部習合不可分別都非心意識之所及若人欲了知此義折破心意識之漆桶二六時中勇猛可著精彩若夫如此受用自然出無明域可入大明神之氣宇者乎若不因此義旨者一生口授之小器山王一實之神明不夢見之此故海師作東照緣起曰山王神道者非宗源非本迹緣起非兩部習合雖受生於社職輒難相傳云云覺大師云山王三聖出世之化導者不應帝莊一宵之靈告無即王蔡萬迄之懿歸自

出三德祕藏之妙理，以利三毒迷倒之衆生，三葉相應精神也，故名清淨三輪山王矣。相傳祕釋云：會諸神權歸山王一實矣。意釋迦一代佛法不過權實，畢竟而會三權即一實。歸法華衆河入海同一鹹味。會汝等所行是菩薩道成圓人，是佛法大綱也。今亦會諸神權奉號山王，爰以二門相即集云：山王者萬法都名，一圓全體矣。約實義雖恐冥慮爲天神七代地神五代乃至國王大臣者何乎？爲三世諸佛仍至凡夫者如何？非識所識，非言所言。云云顯密內證義云：天現三光養育千象萬物，地顯三聖護持一天四海，內證利生慈雲無處不覆，外用和光惠風無物不扇矣。所詮山王權現者天地人本命神，柳綠華紅所出靈神也，以心傳心云云。匡房記云：山王一社之外無諸神矣，一切諸神者皆山王分身也。匡房山王神道有相傳歟。云云件之條目者，悉出于東照緣起。問曰：一生口授之小器者，縱禱尔悉地於大明神，全無靈應乎？答曰：若能雍々肅々且夜虔事，何敢不成。悉地乎，洪鐘簷受扣無不應，此故佛祖統記曰：當大感通際，雖頑空朽壤，尙可得之，由精誠感格，而可以得之。雖然有可怖之甚者，邪神者受淫祠，正神者不受淫祠，正神或謂之有覺神，邪神或謂之邪橫神，法性神者越格之玄旨也。所謂淫祠者住名利之心，而禱名利者，備百味而搖尾乞憐，今之陰陽巫覡等是也。此故天下敢卑

賤焉矣。山家所謂山王神道者遠而遠矣，陰陽不測謂之神而已。問曰：既是無差別之法性，胡爲夫爲邪爲正？答曰：牛飲水爲乳，蛇飲水爲毒，此故曰：真如不守自性，夫諸佛菩薩本願功德力隨感而垂跡，謂之正神，衆生迷蒙而以淫詞向正神，方通圓孔者也，却汚神前矣。然世有冥權之人，爲悅衆生，暫施所願之幻相，是格外方便也，強不可沙汰。

元和三丁巳年，豫於禁廷被行日時定陣儀。自山口祭至于遷宮，課陰陽頭擇吉日良辰，終其功。四月十四日戊申夜奉遷，東照大權現神靈於假殿。勅使阿野宰相實顯於神前奉讀神號宣命。同十六日庚戌夜奉鎮座御像於正殿。兼神寶御裝束等，蒙朝臣奉納之。及剋限公卿著座畢，海師被執行密法。同夜亥刻奉贈神位正一位之位記。勅使菅原長維朝臣東坊城大內記持參。同十七日辛亥被償祭禮之化儀。其後秀忠公御參宮，奉納御太刀、酒井雅樂頭役之。同十八日壬子卯刻奉納幣帛。奉幣使清閑寺宰相共房宣命使中御門宰相宣衡如斯被立兩使事，始于當社歟。就中幣帛內藏寮左官掌大藏省三司調進非先規之例。云云并神馬二匹左右馬允奉之。同辰剋於神前被行宸筆御經供養。先公卿著座。廣橋亞相兼勝西三條亞相實條日野亞相資勝西園寺亞相公益冷泉黃門爲滿平宰相時慶此外勅使宰相加著座。

諸役侍臣并諸司花籠被物等之次第略之。次二品最胤法親王梶井門主權僧正正覺正豪海院各著道場之草座。次御導師天海大僧正從集會所領衆僧進之節。左右伶倫對網代前奏一曲。賜祿乃發。烏向樂行。次左右衆僧前行著座。御導師於神前鳥居邊下輿瑞籠之左右音聲不止。御導師著道場之草座訖。伶倫入左右樂屋。兼大庭中。次秀忠公有出門著御于聽聞所。次左右樂屋御導師發登高座樂。次大師欽讀于法則其聲和雅而天休叶律。公不勝感格。群臣俱共稱讚。一時盛事千載奇逢。都歸于大師一鷹於戲希有哉矣。往昔天台大師法筵之日。萬乘屈膝。百官稱美讚歎。彈指喧殿。蓋夫今日法席恐不變智者威光者乎。法事之次第略之。被物御導師料三重。織物唐織。縫薄綾等。法親王御料上。權正豪海重著座公卿次第被取之。僧徒之前一重殿上人取之。回廊之僧徒左座山門。右座東關。此被物一宛。武家諸大夫取之。田納小舍人。役送畢。自衆僧退出。但兩傳奏徘徊于樓門之邊。大樹還御之砌踣踞。其後月卿雲客諸司等退去畢。同十九日癸丑藥師堂供養被行法華曼荼羅供。著座公卿如昨。證誠最胤法親王。御願師權僧正豪海。各著道場之草座。次喝導師天海參向。樂人衆僧前行。如。大師著座以後。大樹著御于聽聞所。次導師御願師登高座。于時左右樂屋發音聲。法事次第略之。威儀師起座。取誦願文授。

唱導師取祝願文授。祝願師御誦經使基音少將。關左。取誦願文授導師。度者使親顯島北左參入。近導師賜度者四人。之由仰之。花籠被物取之。殿上人并役者等略之。證誠祝願師導師以下衆僧等被物員數同于前日。但今日法席被准御齊會云云。曼供過終。大樹參詣御廟塔。仍被行供養。先導師衆僧樂人等。次兩傳奏參向之後。大樹著御于拜殿。北上面。兼勝卿實條卿。東上面。退著。次大師入于塔內。有法事。其間奏舞樂。僧徒伶倫等員數略之。并出納預承仕掃部寮召使等之外。不參向。同二十日甲寅。大樹令立於宿坊。御還城從半途爲御使。吉良侍從源義彌入于大師之坊。伸台命。同廿日乃至廿二日。戊午。法華讀誦一萬千餘部。國々來會衆僧三千五百口云云。更又有佛兆之一瑞。開白結願二中間三寶鳥鳴。官僚緇徒之上臘。下至奴僕百千萬人之所見也。所聽也。仍記而已。夫三寶鳥者。緇林之靈鳥也。昔傳教大師延曆年中。出神宮寺。始登叡岳時。有此鳥而鳴。其聲彷彿唱佛法僧。大師怡懌曰。今祭神靈。勵法會之砌。如此佳瑞。此山宜盛三寶之提唱。抑東照宮大法會事。成就尙冀尊靈之安。亦綿來嗣之休。仍爲將來之人。善加規則。定真前之禮尊。其條々。社僧社司神人等勤行。法樂講問讀誦。乃至蘋蘩等供物。伶人樂闔衆之勤。系嗣繩々。宜監護法事者也。然後粗示兩部習合之神道於秀

忠公次勸非常之大赦。不問罪罰之多少。盡釋天下之俘囚。大善根之至。不愆于素。法力之所攝。於戲時哉。同五月。寄附東照大權現社領五千石于日光山。御朱印者元和三年三月十六日。且又社領五千石之外。以今市草久久加之三村。當日光山衆僧社家門前之地子。

同三年六月。秀忠公上洛。天海大僧正受台命。同入帝都。于時自八月上。澁仙洞就不豫之玉床。雖然獨招海師。日夕原台法之深祕。此故秀忠公亦命海師。俾奏聞自家之密事。海師抱法義而侍。法命看護。維時八月二十有六。戊午日昇遐。奉葬于泉涌寺。執行中陰之法事。於般舟三昧院。被行御經供養。九月廿六日。戊子初七日也。大師爲御導師。題名僧十口著座。諸卿西三條亞相。實條白河三位。前左衛門督雅朝卿。

元和四戊午年。秀忠公奉勅。勸請東照宮於江城之封內。今紅葉山是也。日光者遠山而時々之參宮。所以難隨于心之所之也。四月十六日。甲戌夜遷宮。大師勤之。其法式如日光。同夜奉幣使平宰相。時慶宣命使日野宰相。光慶參向神前。奉讀宣命。神馬二匹。左右馬。同十八日。丙子有法會議式。大師爲導師。著座諸卿。廣橋亞相。兼勝西三條亞相。實條今出川前右大將。經季冷泉黃門。爲滿飛鳥井

宰相。雅胤次座。主宮最胤。法親王權僧正豪海。正觀衆僧等出座。法事次第。并被物如日光。不記公御聽聞。參向供奉行糴。同于日光。奉納御太刀。以下略之。

元和五年己未八月。正當後陽成院三回聖忌。此故於禁闕。自廿日至廿六日。七箇日之間。被行法華懺法。最胤法親王。天海大僧正。良範權僧正。惠心幸圓權律師。寶泉豪全權律師。善賢院隆惠權律師。向之祐秀權律師。實光良春大律師。北房良純大律師。南之重源大律師。理覺共行公卿。右府。近衛殿西園寺前內府。益公日野亞相。資勝中日之導師。天海大僧正。有御行道。始從初之十方念佛。終于後之十方念佛。先梵衆。次主上。次共行月卿。供奉于御行道。七ヶ日之間。今日大僧正天海抽身於末法之運。厚心於上古之風。造次不失。顛沛亦然。志之所之。元和年中。春夢中而奉感。得桓武天皇。其英質堂々乎。有威靈。大師深慎夢告。就舊基而掘地。獲天皇廟塔而欣然。其形勢也。巍々乎。秀于塵物之表。瞻仰者無不催信心。古人曰。殊勝不求殊勝自至。夫此義乎。乃配此塔。樣左右後陽成院并東照宮。九層之塔。造立同厥時。維時大府侍郎職忠。朝臣有以。而向越之前州。仍依賴于職忠。而俾司造塔之事。以石塔彫刻之。有人而傳此旨。趣於越主源忠直卿。粵忠直卿助眼。大師善根力。同七年之春。通多少海陸。而運送越石於坂本。夫感心

一發而撼沒量之盤石，奇哉快哉。

元和五己未年，尾陽城主義直卿相管中靈地之攸，奉勸請東照宮，依爲勸會，大師參向。九月廿八日，戊寅夜，設遷宮之儀式，大師勤之。同廿九日，御法事，大師爲導師，著座，卿相廣橋亞相總光，花山院宰相定好，其儀相標式皆攀紅葉山之良法而已。

元和七辛酉年，水戶城主賴房卿管內奉勸請東照宮，依爲勸會，大師參向。三月十七日，己未夜，遷宮，大師勤之。同十八日，丙申，御法事，大師爲導師，著座，諸卿轉法輪亞相公廣，西園寺宰相實晴，其法式皆以如尾州。

元和七辛酉年，紀州城主賴宣卿領內奉勸請東照宮，平夷嶮岨之地，以船求道於近，遂造營之功，依爲勸會，大師參向。國中所夕被置警固兵士，賴宣卿自出半途迎大師。十一月廿四日，辛酉夜，有遷宮之儀式，大師司焉。同廿五日，壬戌，御法事，大師爲導師，著座，卿相中御門亞相資胤，廣橋宰相兼賢，法事等儀式如尾州。元和八壬戌年，丁東照宮第七回神忌，因茲秀忠公奉勸招緇素，就中台家之諸門主，并月卿雲客諸司等參向。四月十六日，壬午夜，奉幣使平宰相時慶，參向神前，奉讀宣命。同十七日，癸未，祭禮如例。公御參宮，奉納御太刀，酒井雅樂頭忠世

役之。同十八日，甲申，於神前授戒，并被行宸筆御經供養。大師勤之。秀忠公御聽聞，堯然法親王妙法院宮，最胤法親王梶井院宮，前大僧正尊純青蓮院宮，等出座，并著座公卿。廣橋前內府兼勝，西三條亞相實條，正親町三條黃門實有，被物如先規，并法事次第略之。事畢，公卿參詣于御廟塔，則有戒灌儀。大師被勤之。最胤法親王，前大僧正尊純等出仕，堯然法親王，依未灌頂，無出座。次兼勝公，實條卿等著座。於塔內，大師修密灌。此間伶倫奏舞樂。同十九日，乙酉，於藥師堂被行胎金曼荼羅供。秀忠公御聽聞，大師爲導師。法中方并著座公卿同妙門主，依未灌頂，於別座聽聞。同廿日，丙戌，辰剋，大樹還御于江城。同二十日，乃至廿二日，戊子，法華萬部如先規。

元和九癸亥年，中和門院屈海師爲戒師，剃髮受戒焉。

同年，紀州國主營東照宮邊寺院，建社館矣。暮秋，比迎大師而爲逍遙浮船，名所浦山，令覽之。或請城中，以山海珍珠饗應，或催猿樂藝，能慰大師之老意。于時妙法院宮爲迎大師，差使僧述令旨。因茲大師辭紀州，令上洛。

同九年十一月晦日，丙戌，妙法院堯然法親王授法，請前毗沙門堂大僧正天海爲大阿闍梨，於洛陽東山之禪室，被遂行庭儀之灌頂。教授亮尊阿闍梨，職衆三

十口、俗倫二十人。大阿闍梨執綱執蓋役者。九條殿諸大夫勤之。從。著座諸卿、中御門亞相。胤資。清閑寺黃門。共房。西洞院宰相。時慶。參仕侍臣、孝治。竹內刑。有純。少將。西坊城基定。侍從。院。基教。東園左。少將。藏人二人。極藤小槻忠利、差。安倍泰吉。法事畢有被物、出納職忠役送、大阿闍梨御料。三。著座諸卿被取之、衆僧被物。一重。侍臣取之。同九年季冬、出帝都赴武州、次於尾州名古屋、海師嬰于不意之疾病、平復之思十無一二。城主亞相義直卿有難色、而不勝諒切至。城下雖羅列杏林橘井之名醫、急召帝都典科官醫、診候其脈、善于方脈者失其手而退。仍義直卿告急於武城、而達于秀忠公尊聽。于時下台命於久志本內藏允常亮、俾救之。粵常亮乘輿而奔波。俗曰。早駕。不分寅酉、不言風雨、其行程也如鳥驚而飛、似突出難辨。望于箱根山半路、夜雨頻疾、風簸仍炬火皆消滅。奴僕茫昧而失向背、就中懦弱之者泣岐而已。于時無數之野狐挾山路、而點火。此故得眼於列輝之中、忽通山上之宿。諸人作希有想、久志本之所見路上之口碑、今尚在耳。久志本入名古屋、先窺尊顏、次診脈候。即呈藥一貼、仍俄得快氣。如熟睡覺、繙素俱共、不任欣忭。遂日而勇健也。尊候不安之中、白狐一雙出于茲彰于彼、加之狐猿得路於他屋上而出來。平復之後、狐猿韜跡而去。抑猿是山王之使者、而狐是東照宮之使者也。侍于海師

之看護者有以哉。想夫此等靈驗、若非公私人所見聞、誰敢信之哉。嗚呼。寬永元甲子年春、秀忠公構花園於本城西。時人曰。西丸。一日就花筵而招天海。物色鮮美、甚光奉寵命。公曰、當時出種々椿花、加旃千草萬木、顯不思議之珍愛。海師者古老也、古亦有此等風色乎。答曰、國夫文學盛則增花色。于時公大感發曰、海師者非佛法之挺特耳、當座亦有興人哉。他日復秀忠公謂海師曰、行刑罰者、只斬有罪也、何敢受報於此身乎。答曰、可也、其未可矣。公默然、仍請解釋。海師曰、非斬有罪、若有斬有罪者、未免報、只罪自被斬了矣。公當下消疑、即嘆美曰、海師道非淺識者所測、誠夫斬與被斬、見地隔雲壤而已。昔有野狐而化老人、入百丈山大智禪師室、仍解不落因果之迷、得不昧因果之悟、于時脫五百生畜身去、抑落與昧只一字、而引五百之生死、誰敢不慎見地乎。中陰經曰、三毒之重者癡病是其厚。

同二年、日光山奧院側欲建骨堂。一日使衆人修地勢之骨堆。海師告左右曰、於普請之地、必可得佛像。疇昔夢中有靈告、果奉掘出地藏。滿山繙素感激稱賀。夫地藏有六種、第六曰日光地藏。今此夢告之菩薩、恐是日光地藏乎。同比成瀨隼人、正正成江戸而殂落、仍命其子欲寄遺骨於日光山。于時前一日、海師動哀舌

曰成瀬隼人正死去、送遺骨於此山。衆僉怪之。果見厥靈證矣。想夫是又夢中之靈告乎。凡夢者明四種、善見律說也。總之則只虛夢實夢之二種而已。人皆知虛夢、而不知實夢。昧者癖案也。

同二年、仰台命開關東叡山并門境管中之四至封地、應海師之意賜焉。今占靈地於江城東北者、桓武帝教大師、竝芝蘭之化、開拓叡岳之鴻業、修金石之盟、鎮護帝都之鬼門、仍準擬于斯公規、所以祝延江城萬歲之嘉祥也。于時秀忠公賜玉宇之舊殿、并白銀二百貫目、仍創立本院。次尾州亞相義直卿立常行堂、紀州亞相賴宣卿立法華堂、水戶黃門賴房卿建一切經輪藏、藤堂和泉守高虎奉建立東照大權現宮、并回廊御供所、護摩所、酒井雅樂頭忠世寄附石鳥居、土井大炊頭利勝疊五層塔、并營鐘樓、酒井讚岐守忠勝立本地堂、堀丹後守直寄立祇園堂、永井信濃守尙政立二王門、次天海師自創立釋迦堂、多寶塔、三十番神社、清水觀音堂、求聞持堂、辨財天、慈惠堂。次寺中院々、上乘院者尾州亞相義直卿真如院者紀州亞相賴宣卿、山王社頭并別當本覺院者爲將軍家御祈禱、海師建焉。此故有馬左衛門佐直純、細川肥後守光尙、寄附院務、其旨趣、進者仰柳營御祈禱、退者祈私門子孫長久之家業而已。寒松院者藤堂和泉守高虎、常照院

者小松黃門利常、凌雲院者堀丹後守直寄、明靜院者越前宰相忠昌、一乘院者鍋島信濃守勝茂、青龍院者松平安藝守光晟、現龍院者稻葉佐渡守正成、同現龍院再興者松平土佐守忠義、東漸院者水谷伊勢守勝隆、東圓院者松平越中守定綱、津梁院者津輕土佐守信義、元光院者神尾備前守元勝、松林院者松平周防守康映、普門院者松平阿波守忠英、吉祥院者中山備前守信吉等各建立焉。院々皆附院務、同禱、亦大樹天長地久、且又仰家私之累算、延祥耳。涼泉院、護國院、修禪院、無量院、寶勝院、覺成院、泉龍院、林廣院、明王院、溪樹院、常德院等者、但無或天海立焉、或院主創焉。上皇應定額、特賜東叡山寬永寺圓頓止觀院等、公務無或天海立焉、或院主創焉。上皇應定額、特賜東叡山寬永寺圓頓止觀院等、勅額。慶安二年己丑。伏惟開山大僧正之德宇、緝熙于萬世者在茲歟。夫東叡山者、開闢之後、即辰爲常恆法談之巷、緇侶還沓、而作群隊、粵家光公割公務之調、以充碩學之資糧、且復東照宮鎮座于日光山、後新加警策、而撫道俗、連續法談之絕、都改堂社之觀、於戲盛哉。此故日光東叡準擬山門、以作三山臘次之席矣。同三年八月某日、奉綸命於小御所有論義、論題者一家意論、教外別傳之義乎。講師者法印什譽、三途臺住持。問者晃海矣。天海精義曰、教觀不二、何必有別傳之法乎。想夫假諦是何、柳綠花紅、空諦是何、柳不綠花不紅、中諦復如何、柳自綠花自

紅花柳無前後何有差別之見解乎。所以有淺深之悟證也。此故曰教觀不二矣。惠能大師曰。心悟轉法華。心迷被轉法華。誠夫迷悟在機運。軸何胡越矣。

同三年十二月十四日。東叡山本院而執行穴太流之灌頂。遂大阿闍梨位。夫開山大僧正者。所以傳受諸密也。粵以東叡山爲密法諸流兼學之地。

寬永五戊辰年。正當東照宮十三回神齊。仍奉勅執行祭奠化美。四月十六日。丁未夜。奉幣使藤宰相永慶。參向神前。有其儀式。同十七日。戊申祭禮以後。大相國

御參宮。奉納御太刀。酒井雅樂頭役之。直御參詣于御廟塔。有戒灌作法。著座公卿。右府一條殿。西三條亞相實條。中院黃門通村。次大師。并最胤法親王入塔中。

被修密灌。其間伶倫奏舞樂。次第略之。同十八日。己酉於神前。被行宸筆御經供養。大相國御聽聞。并尾陽紀州兩亞相。水戶黃門等。拜殿左方著座。兼遐公實條

卿。通村卿等。同右方著座。次最胤法親王。堯然法親王。前大僧正尊純。權僧正公海等著于拜殿與方。次御導師天海從集會所率衆樂人。于時自天子寄宸筆心

經於真前。特以花光之疊紙而包裹焉。且復御製倭歌二首。標題于紙上。蓋一首詠。杜鵑之句。顯示即興之妙旨。勅使基定朝臣持明院。持此心經。度與于大師。于

時。大師及欲繙御經。杜鵑兩聲鳴于不虞。誠王法倭歌之德。佛法靈驗之瑞。彰物

之所感者乎。維時廿八品之御短冊。奉納之。被物。御導師料第一第二之著座。次第被取之。以下作法如先規。并法事次第略之。同十九日。庚戌。大相國還與於江

府。同廿日。辛亥。乃至廿三日。甲寅。法華讀誦。同廿五日。丙辰。家光公著御于當山。同廿六日。丁巳。家光公有御參宮。奉納御太刀忠勝朝臣役之。神馬二匹馬寮牽之。同廿七日。

戊午。於神前。被執行法華懺法。大師依與奪最胤法親王爲導師。家光公御聽聞。兼遐公實條卿。通村卿著座。并法中方大師等出座。法事次第略之。同廿八日。己未。家光公還御于江城。

同年家光公係疱瘡不泰之氣。年既長成而受此危運之難。此故天下官醫皆拱手攢眉而已。仍秀忠公曰。逆運之所崇。非人力之所能及。若不因神明佛陀之威力。何敢獲快氣乎。即辰。招天海於紅葉山錦帳下。俾持念看侍。于時海師切祈切禱。只知有其東照宮。而不知有其身。汲汲於求靈驗而已。結願之朝。修法既畢。海師正襟危坐。自欲打三磬。願力動社壇。此故內陣而自發磬聲。左右緇侶皆驚愕而已。海師默然頓首端拜。申謝于既往。而尙微ト下ム底于將來。少焉謂左右曰。東照宮機感相應。家光公氣候速可平復。即舉此靈應以達秀忠公高聞。于時氣運泰亨。其證如指掌。仍秀忠公展台顏。嘆舌無已。大怡懌矣。宜哉匪啻獲家光公之快氣。

又見東照宮之神援并知海師之法力。抑世有偏見之人，往々不信佛神之有威力靈驗，盲者不許，日月有清光，聾者不事，雷霆有洪音，其此類也。偶有懦弱者，信鍊石有火，展未練之，用手些子之力，粗雖相擊，不獲星火，仍拋下曰：鍊石無火，嗚呼！絕倒如其事，効薄伎慣，狐鳴者，粉飾殊勝之相，傾訴疾効之心，以求靈應於佛神，然不獲厥現證，却憤懣曰：佛神是笄蜂者也，嗚呼悲哉！古人曰：無鹽醜女，願侍王宮，何敢賜光顧乎？般舟三昧經意云：佛威力，三昧方，行者本功德力云云，不可偏辨故也。因緣和合，感應道交，故須三力，出于止觀。

同八年秀忠公尊候不安，命運既迫，如落日欲入于崦嵫。維時家光公命天海，俾祈保祐，粵欲修熾盛大法。蓋夫此法者，無二神祕，而決斷生死滅否而已。此故委她者，事鮮潔而不任冰競，粗連壇具。時有一人，俄爾發狂，七顛矣，八倒矣，濺血于刃，山中闔衆躁動不止。海師從容而妄，謂左右曰：苦哉不虞之妄動，非一朝之所發，宿種之妖孽也。想夫尊候否塞，難期平復者乎？果方于翌壬申年正月而薨去。夫悉地成就者，在行者精練云々。然亦宿因之所感，有定業，有不定業，不可不知。扁鵲曰：越人非能生死人也，此自當生者，越人能使之起耳。夫扁鵲知二業者乎？問曰：若夫如斯方術，有何益耶？答曰：有不定之業病者，逢藥則平復，否則殂

落，謂之不定業，或謂之橫病橫死。時人不_二匡_一二種之業，看死則槩而責醫，悲哉。天上有五_三襄_二人中誰無死耶？西天古皇現示四枯之相，東魯素王夢祭兩楹之間。昔孔夫子有病，子路請禱，禱於神祇，夫子不容焉。蓋夫所以察死生之有明命乎？雖然，夫子何一向捨禱，余耶？湯王祈雨，桑林周公祈武王，病於彼蒼，聖人調理各宜，有_二玄旨_一，不可窺測其涯涘。古曰：嗜欲深者，天機淺，以天機之淺，恣談聖人者，聖人之罪也。中人以下之機者，只仰而信，信而不疑，忘身於加持之中，切祈切禱矣。方獲靈應，亦未可知矣。

同九壬申年，正當東照宮十七回神忌，祭祀儀式同于先規。四月十六日癸未夜，奉幣使滋野井宰相_{季吉}參向神前，讀宣命。同十七日甲申祭禮同日，於本地堂被行法華曼供，大師爲導師，著座公卿，右府_{二條殿}前內府_{實條公}，日野亞相_{勝資}，藤宰相_{永慶}，出座法中方良恕法親王_{院宮}，堯然法親王_{院宮}，最胤法親王_{井梶}，前大僧正尊純_{院宮}，權僧正公海_{毗沙門堂}。被物導師御料第一二著座令取之，如先規。并法事次第略之。同十八日乙酉於神前，宸筆御經供養，大師爲導師，著座公卿并法中方出座。被物以下次第_{如昨}事終於御廟塔，有戒灌儀_{次第}略之。家光公參詣，併依喪服未_ヲ闕_ハ，被停腰輿於今市村，令遙拜祭禮，并每日神前法事等。致齋之

前後、大師雖到于當村、重於神事、公隔閭遂對面、是偏極寥々而已。

寬永十癸酉年、家光公有命曰、一心我奉、思慕東照宮、然則以東照宮之師範、天海我亦師焉、維時雖盛年有身、天海世壽法臘甚高矣、頽齡可惜、○一本可惜之字、作不待人。早要聯權現之令芳、于時諸老臣奉感厥命之有皇猷、各稽首而已、仍付此旨於上使、時々節々以達海師、雖然海師未領掌。

同年、江城第二之郭內、卜於靈地、竊經營於宮舍、公命于權僧正忠尊、迎大師、被議遷宮之儀式、因茲內藏寮幣帛、可令調進旨、以飛脚召出納、仍職忠朝臣職、央兩人十二月上旬、下著于江府。

同十六日、甲戌、遷宮、大師并權僧正忠尊等、被行之、遷宮內院之化儀畢、幣帛出納奉納之、奉行保々石見守。宮崎備前守。兩人奉仰、大師以下僧侶出納等、賜饗應三獻。

寬永十一甲戌年、家光上京、誘引天海、往昔權現賜叡山麓東坂本廣地於大師、仍以建立法勝寺。爲謝其厚恩、真葛原山井邊、毀山平地、建立寶殿、奉勸請東照宮、豫

奉勅、壬七月廿七日、辛巳、夜設遷宮之化儀、奉幣使右大辨宰相、俊完參向、讀宣命、其幣帛內藏寮一年預辦備之。大師爲導師、被行法會、著座諸卿、花山院亞相、定好小川坊宰相、俊完加著座、台嶺門主并衆徒悉來會、而有法筵儀式、樂人奏音聲、都鄙道俗

貴賤參詣之粧、驚目而已、且又叡山根本中堂、大講堂、乃至文殊樓、鐘樓等大伽藍、亡慮覃于毀敗、仍天海大僧正表聞家光公、茲以同年賜再興命、九白而營功畢矣、其壯烈偉也乎哉、匪啻闔衆事稱賀、況又烏能銜花、猿能獻果、時耶命耶、天海大僧正一自出于世、顯綱密紀二羽兩輪、加焉舉揚顯密禪於一致、粵山王一實之神道、天下之人聳聽、處々之精舍、或再興、或建立、復舊、斬新、岩瞻斗仰、又焉度哉、カクサン

同十二乙亥年、記東照宮緣起、仍神道一軸、仰宸翰、以爲卷頭、其他品々諸門跡并公家諸官員、加鴻筆而終卷、畫工法眼探幽、段々施彩畫、家光公預下嚴命於民部卿、法印道春曰、緣起者遺事於後、昆神前之明文也、若夫有不可之義、盡心而可間然矣、仍道春加多少瑕玼、天海一々答拆、雪盡水消矣。

寬永十三丙子年、方東照宮二十一回、仍家光公奉勅、造替日光山之舊殿、抑討論廿歲一度造替之本緣矣、始于伊勢皇天之寶基也、因茲宗廟社稷之大所、皆以迎廿歲星霜、設造替遷宮之儀式、偏是所以上聖君及德化於一天四海也、豫於禁闕、被行日時定陣儀、至于木作之旦、遷宮之夕、課陰陽頭、令奉吉日良辰之勘文、悉應于官宣、夫宮殿寶藏堂宇之員數、不遑羅縷、并神寶御裝束、祭禮諸

具法會莊嚴之諸器皆以奉台命秋元但馬守泰朝板倉內膳正重正於天海和尚之室傳仰之旨於職忠朝臣仍悉調進之兼日令奉納之

四月十日甲申亥刻奉遷御像於正殿御鎮座之後大師修密法著座諸卿烏丸亞相光廣卿廣橋亞相兼賢卿藤黃門永慶卿飛鳥井黃門雅宣卿小川坊城左大辨相公俊完卿及神饌傳供俗倫發樂勤役諸司略之

同十二日丙戌奉幣使姉小路宰相公景卿諸役諸司見別配仍略之

同十五日己丑朝被行鉢其後於寶前鋪設淨筵被行布薩戒會僧侶二十口入于道場說戒師天海和尚維那行空西堂廬山寺法會次第略之

同十七日辛卯祭禮大樹自今市辰刻著御于新殿且又設幄被拜神輿臨幸今度依御造替神祭供奉人等之裝束改革美加入數令奉仕祭奠終後大樹御參向著御于外院供奉行裝難述于短紙次有奉幣儀先奉納御太刀忠勝朝臣役之神馬高麗駿馬

被奉之次尾陽亞相紀州亞相水戶黃門各御太刀馬代奉納之事畢御參詣于御廟塔先大師并最胤法親王慈胤法親王權僧正公海入于御廟塔諸役僧侶十四口左右伶倫出納承仕掃部寮召使此外之役者不入于此次大樹著御于拜殿北面上次御一門卿相三人著座東上北面次實條公資勝卿著座北面上東面退著于時修戒

灌其法會儼然矣就中三十二相之樂久中絕之處最胤法親王甚歎而常召伯近弘樂人辻前伯耆守溫故知新積習練之功令再興於卅二相之樂既合于今日之法席誠神感之納受揭焉公還御之後各退出

同十八日壬辰於神前被行宸翰御經供養大師為御導師證誠梶井宮同新宮妙法院宮曼殊院宮新宮毗門主等出座大樹御聽聞尾州紀州兩亞相水戶黃門著座并著座公卿右府鷹司殿教平公但依御所勞無著座前內府西三條公日野亞相資勝卿廣橋亞相兼賢卿柳原黃門業光公烏丸黃門光賢卿大炊御門黃門經敦卿姉小路宰相公景卿奉行職事綏光小辨左被物御導師料第一二著座被取之花籠被物取雲客并諸司等如先規略不記之同夜神前之後構壇所修神道之護摩御靈別當祐孝行之同時於護摩堂修五壇法山門之阿闍梨五口吉祥院寶珠院華藏院鷄頭院觀泉坊竝助呪二十口云

同十九日癸巳本地堂供養被行合曼茶羅供大師為導師呪願師前大僧正尊純青蓮院宮證誠良恕法親王曼殊院二品堯然法親王妙法院宮二品座主宮最胤法親王梶井門主二品慈胤法親王同新宮無品良尚法親王曼殊院新宮無品著草座大樹著御西上南面尾州紀州兩亞相水戶黃門北面上西面著座公卿前內府西三條實條公日野亞相資勝卿烏丸亞相光廣卿

大炊御門黃門經致卿水無瀨黃門氏成卿堀川宰相康胤卿左大丞相公俊完卿奉行職事弘資右少辨花籠被物取之侍臣并諸司等如前日因略之。

同廿一日乙未廿二日丙申兩日一萬餘部妙經被讀誦之。廿一日始經神前權僧正慶權海本地堂權僧正慶權

同廿二日始經神前權僧正辨海本地堂權僧正玄海諸國來會僧七千餘口云云同夜於神前被

行別請豎義一問者竹林坊盛憲二問者鷄足院法印臻海三問者正觀院舜能四問者寶積院豪秀五問者溪廣院行盛題者精義天海大僧正題者精難喜多院前大僧正空慶講師東光院法印詮長下講師寂光院法印玄海註記妙觀院權律師運海。

同廿四日戊戌廿五日己亥兩日御能四座猿樂勤之構敷舞臺能組以下在別記自武家御所賜十萬疋於四座自天海大僧正賜四座并七太夫各御太刀馬代黃金十兩宛并白銀千兩於座中。

寬永十四年丁丑年於江城第二營中造替東照宮長巧以唐木經之營之于時有偶鶴下于靈場不可思議之祥瑞人皆感激而已誠夫輝神德之威光溢冥助于四海家光公喜慰壯懷仍時人作詩作文或詠倭歌各奉稱賀神德于時天海

大僧正作祭文以述千歲之嘉祥公領以納于東照宮寶藏營功既成公奉勅自日光迎御像償遷宮之儀式豫公命于大師勅使并門跡參向之儀八月下旬以目錄一紙被奉達之權僧正忠尊奉仰神寶御裝束等出納令調進兼日奉納之九月廿六日辛卯遷宮大師被勤之奉幣使勸修寺黃門經廣卿參向神前奉讀宣命但此宣命內藏年預職在奉之幣帛如先規辨備。

同廿七日壬辰有密法事大師為導師大樹御聽聞經廣卿著座并尊純法親王公海僧正等出座法事次第略之被物出納小舍人役送經廣卿被取之。

同十五戊寅年冬大僧正受病而不起只修練身心而待溘然而已于時江左名醫各承台命寅夕伺尊候加之命酒井讚岐守忠勝中根壹岐守正盛不離枕席之側病症之變和湯藥等事時夕俾注進于上聞但使廿人步卒達注進之使併嚴命之所及也善于方

術者各下其手雖然老病衰減累日而不復家光公曰我久相承山王一實之神道要續東照宮芳躅天海師若遷化於他方無道之可依乎仍病間進高駕於東叡岳慰問海師于時杜絕官僚縉侶之出入海師忘勞瘁之在身神道之骨子拔其萃而以呈示家光公公感刻無涯仍對談良久無人侍于左右粵家光公辱點湯藥自度與海師於戲天下誰敢有此法孝之誠乎聽者今尚濕却袖古曰有其

誠則有其神無其誠則無其神。想夫神道相承之深祕歸于誠之一字者乎。海師快氣逐日而增益。雖然尙事養保。使宮崎備前守時重官醫久志本式部少輔常尹^{ラシテ}守尊候。以甫于翌己卯年夏四月。誠夫台命不安。渥遇日厚。海師一日謂左右曰。家光公吹噓枯朽。甚賜愛腹。無日忘之。願營新殿而安法座。閑可開示神道深祕。茲以集粹人而不日成其營功。仍奉迎高駕。于時掛後陽成院宸翰於玉床。其詞曰。新田苗裔家康公。弓箭棟梁源家名士。天海大僧正佛家棟梁。天台高祖。家光公屢凝青眄。歡顏無休。既而曰。當家之珍愛。何以比之乎。即乞之於海師。自卷收歸來。納于城中東照宮。家光公曰。海師既係于瀕死之病。雖然不虞而平復。天神之所相乎^{タスクル}。福履在我。仍稱延年之賀儀。命四座太夫傳奏舞樂於殿下。海師德譽甚茂。膺新寵。日日增山斗之仰。家光公自染筆而以投海師。其手澤海師一人之外。全非餘人所見。推而所察者。偏傾訴菩提之深志乎。海師答曰。攀例於東照宮。以授山王一實之神道。一心三觀之深儀。并可付台家血脈者必矣。雖然先召餘師。須尋餘門法要。家光公曰。誰依乎。答曰。幸是大德門下衲子玉室江月等寓居于城下。云。仍召此兩僧於殿中。于時觀面提示不覓玄旨於草紙。兩僧直下欲付活機於口談。雖然大燈派下一千七百則。公案活潑々地。或須彌座下烏龜子。

或閣浮樹下笑呵呵。壁立萬仞。機々不相契。此故家光公益思慕台家神道微妙大法。孜孜於寅夕。久凝三諦觀解。以悟入于俗諦常住之理。粵海師盡底付囑要津之血脈了矣。家光公遠考台宗末。且復要追加東照宮威光。仍合意於海師。告紫禁之闕。請第二宮。以爲日光山門主。于時鳳雛甚妙齡也。此故延光臨之淑裝。海師預表聞家光公曰。他時必令此宮爲一品親王。而冠諸宗頂上。家光公唯諾同十六己卯年。再興上陽世良田長樂寺。此精廬者自開山榮朝以來。顯密禪一致弘通之靈場也。先是慶長十七壬子年。東照大權現因海師而發明顯密禪之玄旨。于時大權現以長樂寺無住持職之善知識。俾天海大僧正領長樂寺主席。家光公台命亦同。仍大僧正勵自力善根。命其神足晃海。再興藍宇。且復勸請東照宮。以奉爲顯密禪之鎮守。抑此道場者大權現遠祖新田左中將義貞公以來。累代安牌之地也。今仰東照宮輝遠祖之流譽。至矣盡矣。寬永十七庚辰年。丁東照宮廿五回神忌。家光公嘆惜天海師頽齡不及于大權現三十三回。此故奉敕令償祭祀禮奠。

四月十六日。丁卯奉幣使清閑寺左大丞相公^{共綱}。參向神前奉讀宣命。

同十八日。己巳祭禮^{昨依雨。天延引。}。如例畢。公御參宮奉納御太刀^{忠勝朝。馬寮。其}。

後御參詣于御廟塔著御于拜殿。西北上。尾陽紀州兩亞相水戶黃門。東上。北面。次前內府。西三條。實條公。今出川前右大將。經季卿。著座。北東上。面退著。次良恕法親王。曼殊院。宮二品。堯然法親王。妙法院。宮二品。最胤法親王。梶井門主座。宮二品。尊純法親王。青蓮院。宮。天海大僧正。權僧正公海等入于塔中奉授密灌於東照大權現。大師爲教授矣。

同十九日庚午於神前宸筆御經供養。大師爲御導師。大樹著御。并御一門卿相并諸門主等出座。如昨。著座公卿前關白。近衛殿。信尋公。實條公。經季卿。季吉卿。經廣卿。實教卿。法事畢有被物之儀。出納御藏小舍人等勤之。御導師被物。三。第一第二著座。被取之。儀式略之。諸門跡方被物。各三。重。諸卿次第取之。院家僧正。各一。重。雲客取之。

同廿日辛未於本地堂被遂行法華曼供。大師爲導師。大樹著御。并法中方著座公卿。如昨。被物之次第。如昨。

同廿一日壬申大樹還御于江府。

同廿二日癸酉毘沙門堂門跡公海蒙一身阿闍梨宣旨遂法曼一流之灌頂。請妙法院宮二品堯然法親王爲大阿闍梨。大師昔日授堯然。堯然今復授公海。有以哉。良恕法親王。曼殊院。宮二品。最胤法親王。梶井宮。二品。良尙法親王。曼殊院。新。宮無品。尊純法親

王。青蓮院。宮無品。並著座諸卿。實顯卿。永慶卿。季吉卿。經廣卿。爲適卿。共綱卿。實教卿。大阿闍梨。執綱通規。鹽小路。右馬頭。泰廣。土御門中。務少輔。執蓋源俊治。竹內。極蔭。奉行職事資行。柳原權。右少辨。

同廿三日甲戌乃至廿五日丙子法華萬部如前。

同廿六日丁丑廿七日戊寅御能四座勤之。凡海師之爲人也。一代藏中取生死二字。而爲要文。〇了心雙。二六時中于花子月不忘臨終之夕。此故不事年災月厄之解穰。不屑疾病纏綿之運數。茲以家光公頻愛惜海師餘命。自寬永十七庚辰年秋命良醫四人。法印安栖。法橋玄。竹。法眼典安。清雲。寅酉侍于看護。偏是要保養。醫師不怠調護。時々辨食味等溫冷寒。翊扶尊候之動止而已。於戲光顧之寵何代有之哉。

寬永十八辛巳年營中有熊夢之祥。時天下卜筮硯等術者考之。或曰弄璋之慶。或曰弄瓦之慶。異說紛々。此故人皆猶豫不決。于時天海師不用諸方浮說。一心奉信東照宮神力。偏稱聰明穎利之公子誕生。而聊不遷其意。以表聞于家光公。所以者何。海師年來嘆激大樹之無嗣而中止。以儲子之義。偏爲已任而已。此故久傾訴真情於東照宮。瑜伽諸軌莫不持念。仍蒙種々神告。復何疑乎。或夜東照宮告嘉祥於海師夢中曰。懷胎之事。告訴慈惠大師。仍創立慈惠堂於日光山奧院嶺上。定時不懈勤修密供。或集緇侶以開講問讀誦席。且復命日光山入峰修

驗之者，俾修探燈護摩。于時海師告衆曰：山門橫川御影大師者，指慈惠大師也。利罰嚴重，而古來勝壯也。特將軍家守護尊像，而累代之所規祝也。焉奉獲此像，而禱爾公誕生之事哉。或僧報曰：此尊像者，今正秘在于勢州安濃津西來寺，仍直奉訴與于家光公。且後依賴于國守藤堂大學頭高次，以迎取大師像於東叡山矣。海師大得力，不疑歸靈驗於掌握之中。仍涓取吉日良辰，維時某時某月某日先甲三日後甲三日，極事鮮潔，袈裟坐具等，乃至衣服亦禁忌絹綿，而用麤麻白布。三日復二夜參籠于日光東照宮，精練切祈，拋老軀於誕生之事而已。于時海師驚覺大權現神氣，而告曰：蓋取袈裟詞尊神既是生前素願臨終遺命，其略曰：祝我於山王一實之神儀，必施靈驗，以保持子孫鎮護國家，豈夫不然乎？征夷大將軍家光公春秋卅有八，于茲未奉見男子之君，仰願早產令子，而使天下之人雀躍，神若欲持念伏乞見祥異。于時參籠滿三之曙，殘燈寂莫，內陣尙暗，持念時移，心地恍惚，不覺觸手紙上。見之則觀音經長行，便生福德智慧之男之金文也。海師驚覺而珍戴而已。漱口盥手，欽奉謝神德，三消禮拜而退矣。歸來入室，シハラクアリテ且焉告神足等人曰：男子之君誕生平安，既是決雌雄了矣。左右皆歡然，千賀萬祝。雖然，畏萬一之失，而敢不言。海師允察衆人之意，特唱決定之義。其語曰：此時若非男子

誕生，再不出山菅橋，獨閉柴門，遠絕人倫者，必矣。想夫欲令權現威神力，知衆人者乎。此義速達于上聞，仍以中根壹岐守正盛爲上使，命海師曰：胎中之事，縱令雖不愜素，何重無佳節哉。以橋上之誓，無固無必。海師欽奉受命，雖然，義言不止，彌高彌堅矣。竊我摸索海師意曰：權現若無神德，非權現。權現與海師俱如鳥有，若夫然則有何顏再出于世乎。若夫有神德，于是子非，何不示一實。既是神告及于數回，此故強決誕生之事而已。蓋夫神道祕決者，以不貳爲要。若夫萎々隨々地之輩者，何敢愜神慮哉。海師既是具丈夫氣，爲天下禱爾天下公子，豈不獲靈驗乎。深拋身命於誓願之海，必也達素志於本懷之岸。夫半明半暗而信心不全者，祈願亦不全。兒女子之類，賽主林神等小社，大有獲靈驗者，不應勝計。或生戴頭角而酬冤恨，皆是放身命於神前而獲之者也。浮靡之侶者，只信神有一通，而不曉有那一通。此故不發不可思議之祥瑞，加之却疑神明，或謗他修驗之者，可笑。夫海師持念不怠，銘刻肺腑，而且夕孜孜。此故八月朔甲辰日之夜，東照宮有夢告之吉兆。三日之內，宣抱丹頂鶴。海師欣々然，大開英貌芝眉，仍告左右曰：必可聞公子誕生於不日之中。今夫圓其夢曰：常巢于松者，何乎。千年鶴也。松是何乎。當家名也。神慮雖難測，此夢密告松平之公子者也。所謂鶴者，東照宮之標

瑞乎。往々現妙相。夢告不誤。上使宮崎備前守時重馳來。而據台命曰。八月三丙午日卯刻。公子御誕生。海師半喜誕生之無恙。半奉感神告之不食言而已。仍欲奉述賀儀於家光公。八月四丁未日出日光山。赴于江城。此旨早達于上聞。家光公悅懌之餘。賜上使於半路。頃刻而入東叡山。更列珍翫奇菓。復賜上使。茂膺殊渥。光奉恩命。世之希有也。抑公子誕生之次第。海師之表聞。以一舌不枝梧。家光公感咽無已。仍值七日佳辰。忝賜台命於天海大僧正。稱嗣君奉號竹千代丸。粵累代家臣等出頭英士各請海師。命四座太夫。而俾奏歌舞。或事連枝踏歌之風流。其他馳仰不遑枚舉。偏是爲慰持念之鬱襟而已。夫誕生前年以東照宮靈告奉迎慈惠大師。仍伏祈仰禱。一日不敢懈。于時慈惠緣日八月三日誕生。台家緇侶有智無智俱共吐舌而驚。海師告滿山徒曰。東叡院々以一月爲期限。奉巡請慈惠尊像。欽備香餚珍菓等滋味。并捧法味。永可奉祝當家益算延祥之義。必莫生懈慢。仍衆徒等堅守規祝而已。抑慈惠大師寫照之尊像。厥來由者。大師在生時。橫川四季講堂。而修祕密行法。于時大師影移道場之障子。袈裟衣服等色亦染于障子。而暫不成乾。神足有權者。時人尊賞。而只呼阿闍梨公耳。此神足重窺大師行法之時。見影之移障子。用絹奉寫其影。仍謂之御影大師。山門曩昔係兵

燧。而一時成荻灰了矣。此時尊像韜跡而無爲也。今又逢聖代。而發靈光。施靈驗。時哉。旣言此尊像者。將軍家累代至祝而獲種々妙證。此故東照宮亦在生之昔。三州而禱爾武運於此大師。以起當家云。

同十八辛巳年。家光公新構居住於營中之側。而招天海師。所以者何。東叡山者。地勢高。風力烈。傷疎冷之侵老體。爲禦冬日之氣也。次日夕進高駕於東叡山。欲需面晤。而聞於道。雖然。愍供奉之疲勞。以修隣好。粵自十一月上旬。海師初移別業之居。草同月下旬。俄受疾病。不安席。不甘食。家光公驚。以使諸家臣伺氣候。即酒井讚岐守忠勝。酒井河內守忠清。堀田加賀守正盛。松平伊豆守信綱。阿部豐後守忠秋。阿部對馬守重次。松平右衛門大夫正綱。秋元但馬守泰朝。中根壹岐守正盛等也。弗豫之中。二賜恩顧。不日而平復。雖然。命壹岐守正盛并醫師久志本式部少輔常尹。更俾護尊候。仍至翌年正月。海師有根本大師異朝而相承前唐院一箱。以授于家光公。維時同十九壬午年十一月十七日癸丑也。抑此一箱者。叡嶺中堂側有慈覺大師坊室。名曰前唐院。根本大師異朝而稟承道邃行滿二師深旨。筆記將來。有十襲。而以珍祕箱三十合。是其第一也。台家法寶都歸于此中而已。有根本大師自筆卷物。是唯授一人之箱也。此故人皆聞名不見其實。

問曰、此籍者師資相承之珍祕法中而傳受來、奚爲今奉授于家光公乎。海師答曰、佛法相承不依縑素、只任道之所至、而以事付囑、和漢非無其例、家光公志慕佛法、當今沙門誰敢出其右乎、何況於俗士乎、偏準于東照宮、欲窮台家奧祕、其法鋒也、朝磨夕淬、非庸人之所企及、吾今以一箱而授于家光公、若要知此例、東陽大士者、彌勒之化身而獨依佛經發明一心三觀之玄旨、仍以此所傳之三觀、爲根本、師資稟承、且復於我朝有其例、萩原遍行法皇者、聰明穎利、深入佛門、奧府、此故值于心聰法務、發明四箇大事略傳三箇、然後授台家奧府於金鑽豪海、仍自遍行法皇以來、代代々相承來矣、此故仰萩原法皇奉載于台家血脈、謂之法皇相承、舉世知之、今又家光公任道之所至、以授此奧祕了矣、若有後學秀發者、何不獲傳受於家光公乎矣、是吾老懷之所希也、先是開示此籍深祕、奉傳授東照宮、仍逮其例於家光公而已、于時爲一箱相承之賀義、黃金三百兩、御服十領、檀呪。

寬永年間、松平筑前守光高、以天海大僧正、達于上聞、奉勸請東照宮於加州石川郡金澤。維時寬永二十癸未年正月十九甲寅日、東叡山下常照院而東照宮神體開眼供養、海師司焉。于時光高著座、一山緇侶悉應其請而來集。同年九月

十七戊申日、金澤而御遷宮、憲海勤之。自日光山寄附條々、一御影嚮鏡一面、一御神體并駒犬、一御正體、一畫圖尊像一幅、一靈宮一箇、一御幣（金銀一枚）、一牛王寶印。海師命曰、他時異日、東照大權現勸請之公規、可攀前件之寄附者也。

同十八年、家光公曰、改日光山奧院寶塔（奉納東照宮神體靈宮也）。要壘石塔、所以者何。木雖良材、易就朽腐、若彫刻靈石、大權現威名亦高于不朽而已。仍四月二十三戊辰日夜、爲寶塔建立、欲奉遷大權現神體於假殿。于時夜未平明、奧院山俄如日光出、靈光一點射西而飛去、飛過之跡、俄作黑漫々地。少焉復飛、一模而三現靈光。于時以台命、而待于海師、官醫法橋玄竹等瞻之仰之。此夜海師蒙夢告、東照大權現威容赫々、自召海師曰、我今欲遷別殿、不倦于聞者、只是大乘法味也、得時而不懈、切薦冥福。海師欽服有餘、夢醒而尙銘感矣。仍告靈夢於左右、粵合夢告與靈光、而考其時、俱共寅之一點也、豈非希有之瑞乎。此故海師自寶塔建立之初、至畢功之日、凡一百日不闕日參、假殿而捧法味、且復命一人比丘僧、日々俾奉讀誦大乘妙典全部。夫寶塔用巨石、其石在赤那岐山、厚一丈有餘、廣三間之方石也。彼山維石巖々、行路難々、集六千指之群卒、而強曳巨石、雖然不敢動。于時海師自登山、上巨石側而凝持念修密軌、仍巨石漸動、群卒作不思議想、而歡

・ 抔而已。

同年九月十七日庚寅、奧院オイン而海師自營石之寶塔供養、仍修戒灌儀式於廟前、以善根檀度之方、ウツカシ撼此巨石、速成就層塔之功。伏惟四海九州無比之寶塔、自家光公方寸涌出而已。想夫未曾有之心匠無窮之善根也。供養式亦丁寧反復、山門東壤碩德出仕本社、執行法華問答、以十界互具之妙旨爲問題、講師者法印快倫、書寫山松壽院問者大僧都晃海是、其人也。山上山末之碩德屬海師之一鷹、于時問難激揚、一挨一拶、改頭換面、于時合筵闕爾而聳聽、仍以十界互具之理、海師精義、粵論席之闔衆、乃至席末之聽衆、感激而吞氣飲聲、于時如阿鼻焦熱變作清涼蓮池、似逼迫餓身、速現毗盧佛體、法華問答畢、衆僧三千餘口、奉讀誦法華一萬部、翌壬午年四月、家光公參詣、拜覽寶塔、而大稱美、召出巧匠并石匠、辱賜稅賦之地。

寬永十九壬午年四月十五日甲寅、去歲改東照宮奧院御廟塔、以磐石造立、神靈瑞夢奇妙之由、達叡聞、被立勅使、權大納言定好卿、乎差使氏禮代、乃御幣乎令捧持氏奉出給布、今日參向塔前、奉讀宣命、抑被立幣使於陵墓、考先例、被遂御沙汰、其幣帛禁闕仙洞女院三御所之幣帛、皆以內藏寮年預辨備云。

同十八日丁巳祭禮、昨依雨天延引大樹於東幄、令拜神輿臨幸、於西幄門跡方并僧侶等拜之。祭禮畢、御參詣于奧院、著御于拜殿、有御供養。大師爲導師、并尊純法親王公海僧正等出座。今出川前右大將經季阿野亞相實顯飛鳥井亞相雅宣著座。東上先大師尊純親王、公海僧正、入塔內、僧侶砌下著座、法事次第略之。伶倫奏舞樂、如先規、事畢、著座諸卿被物、令取之、如先規。同日夕、大樹還御于江城。

同十九日戊午、於神前行法華曼荼羅供。大師爲導師、著座卿相、花山院亞相、好園黃門基音堀川宰相康胤次尊純法親王、公海僧正等著草座。僧侶并法事舞樂次第略之。被物如先規。

同二十癸未年、家光公命天海師曰、於日光山奧院建立相輪櫟、如此何。海師答曰、高命希有也、所以者何、吾欲呈此義、粗書相輪櫟、因緣功德、而懷之、便自懷中出之、奉示之、機々啐啄、感應道交矣、至哉。夫相輪櫟來由者、傳教大師度唐傳法、次相承此櫟之深義、歸朝之後、高雄神護寺而集、南都北京碩德、執行祕密灌頂、維時向曉、天女人進玉步、拜謁傳教大師、仰受灌頂、乃獻如意珠曰、我是清瀧權現也、忽然不見。大師納此珠於相輪櫟頂上、并以諸經諸論、封于露柱與礎石下。自是於本朝初建立六所寶塔、而六十餘州奉祈安寧矣。今就日光相輪櫟、甚有

奇妙表相。普請功未了日。家光公下台命。告急於日光山。咨問于相輪椽普請奉
行松平右衛門大夫正綱。其奉書曰。今就相輪椽而無不思儀表相也否。正綱答
奉言上。前日辰刻。風不鳴條。四顧寂寥。俄如風之颯々。似氣候不齊。樹々葉戰。地
亦如東涌西沒。時有一人可ハカリ七八歲童子。化來而甚異相也。三匝相輪椽而後如
隱于雲霧之中。復沒其貌。于時相輪椽番僧一人。同奉行士三人。松平右衛門大
夫正綱之士。其他諸役人見童子異相。神荒氣蹙。身毛卓竪。而正綱注前件。以達于上聞。仍家
光公特感。激東照宮靈告。海師聞之曰。此椽者以文殊爲本尊。文殊童子化現何
敢生疑。著乎傳教大師相輪椽銘曰。我等發願。渴仰文殊。十生出現。普施警珠矣。
相輪椽造工功成矣。同五月。修椽供養。海師爲導師。家光公使酒井讚岐守忠勝。
并家綱尊君使大久保豐前守忠貞。著座椽。供養法事以後。衆僧五百餘口。法華
讀誦一千餘部。

同二十癸未。年初秋十四丙午日。海師就枕席。而示微疾。雖然。以老景駸々而易
沒。左右諸神足思慮不安。速表聞于家光公。先是看護官醫。雖賜四人。猶更命諸
醫。盡俾伺尊候。加焉上使日夕疊跡。且復附步卒二十人於本院。刻々時々俾注
進尊候之減否。維時滿山大衆。要修延命祕法。仍衆評之旨。自然達于海師。師聞

而堅制曰。我今雖受少病。定業時至。非呪藥等之所能治。世尊有三不能。定業不
可轉者其一也。何況後輩乎。粵堅禁呪藥等事。諸神足徒惶汗而已。弗豫之中。家
光公三賜枉顧。就中九月二十九庚申日。公自授藥於海師曰。日夜以海師病氣
爲我憂。只願受藥。保持老軀。紹隆佛法。且復告曰。若夫有老懷之所望。令我知之。
必達其素志。仍奉遺告曰。吾平素之所志者。第一東照大權現。倍增威光。次台門
法流相續。次遣弟宮事。次毗沙門堂之室。再興之事。次忤台命。諸浪人并遠島流
人免許等之事。具達于上聞。家光公含淚而回。高駕於營中。頻思慕海師幻相。命
阿部豐後守忠秋。使畫工法眼。探幽寫在生之英貌。台命曰。丹青若畢。厥功俾一
覽海師。即是開眼也。海師見而莞爾微笑而已。且復家光公曰。師若遷化于他方。
去。常愛圖畫。而要獲對顏之心矣。於戲師資哀情。誠夫天下之龜鑑也。且復紀伊
亞相賴宣卿。攀東照宮例。以天海爲師範。仍先是掌台家血脈。此故屢慰問病席。
而著々親矣。自展煎藥之手。以度與于海師。義士之所爲寵遇之厚。甚異于他。十
月朔壬戌日之夜。時逮深更。海師召諸神足。其席以公海爲上首。次晃海胤海等
徒弟參差而列座。先曰。吾歸寂期既近。記盡天台奧義。永要傳于後昆。仍命豪俛
俾筆之。後曰。凡此的傳者。先自己參決。而發明玄々之微妙。面授口決。雖付此簡

條因循而以及于今日。誠夫海師之心念不差毫末。筆授之旨不誤一劃。匡句義於他手。澤傾天台奧義。先遺于家光公。次付囑諸神足了矣。左右從者洗心改觀於海師。所以者何。這老爲法忘身。荷擔台家節操堅固。些子不顧死苦。譬如松竹逢霜雪而不變其色。茲以諸大神足乃至看護道俗。亡慮感激心服而已。就中有噬臍者。徒以凡心而相馴。既奉污權者平生。凡往々有世人之所誤。不知冥權人之在浮華之中。若論沙門風儀。堅持二百五十之戒。相遠于紅塵紫陌之市朝。具三千威儀。八萬細行。解行相應而不孤運者。夫謂之本色衲僧。雖然世淹于澆季。粗有不知其名字者。方于此時。持少分戒。或滿分者。有謗他冥權人者。孟子所謂以五十步如笑他百步。譬有一人雄士。而領武官家。此人常不事武技。花前月下。或涼風初雪之夕。賦唐體詩。巧倭歌貌。雖然時至臨一戰。遂天下功第一。此時以詩文倭歌之道爲柔弱。下視此雄士乎。今亦如其事。逢花爲花。逢柳爲柳。雖遊于華靡之中。不忘生死大事。不迷自性根源。最後刹那得失。是非一時拋下。此人去住自在。而敢不染生死。古人曰。舉頭有殘照。元是住居西。想夫寶所有何遠乎。縱雖具威儀三千細行八萬。若迷自性根源。殆遊于化城之中。不免變易生死。豈不曰乎。初心菩薩勝四果羅漢。譬如頻伽鳥在殼而聲壓衆鳥。又如堅好木萬地而

異諸木。凡以乘戒俱急爲極善。以乘戒俱緩爲極惡。此故此二品無處下評論之手。且復以乘急戒緩爲上。以戒急乘緩爲次。是非蓮舌之意乎。若不認自性名字。放身命於嶮岨。二六時中自己參決。誰敢不盡根源乎。只是半明半暗而誤平生者。逢花著花。逢柳著柳。或有忘菩提道於俗務之中者。此人臨終時至橫病橫死。或頓病頓死。死苦縱橫。手忙脚亂。何敢去住自在乎。譬如螞蟻之墮湯鍋。謂之可憐愍者。所謂俗務者。非但執末運斤名爲俗務。坐馳五塵六欲。即是世務。又專念空無相無願。亦是世務。又念蒼生塗炭。慈悲慰拔。亦是世務。若能念々於無念非念。非無念。一心中覺。方非世務。右出于宗鏡錄。抑天海師者。天質自然。道貌雄毅。早得妙手於大乘。常染心眼於諸冊。此故十月癸亥日。已刻閱唯識論。以爲未後牢關。同逮午時。漱口盥手。著新潔衣裳。并傳法衣。尼師壇肅々調威儀。堂々定氣息。暫持念珠。而持念看經。于時奉得文殊師利菩薩來迎。粵三鳴數珠。而深作禮了矣。伏以百年餘霜工夫。既熟。修行功成。此故不移寸步。入威音那畔。宜哉顧視左右。一々呼諸弟子等名。問訊合掌曰。遷化之後。欲報我恩。莫懈于學道。現在值遇之緣。限于茲而已。更期來際。云唱臨終一句子。如睡蛻塵坐脫。大論云。臨終正念勝百年業。滿山繙素上。自高弟下逮。最下奴僕等。無長無少。悲哀慟哭。或失聲

失氣當番步卒速奉告訃於城中。仍家光公哀聲不止，淚濕尊顏。次紀伊亞相賴宣卿放聲叫悲，諸人唱言：「此日也，素雲靡于東叡之山上，并五色空華降于四面。」想夫然乎？此老尊者天縱之師也，所以者何？既是後陽成院師範，次東照大權現，且復家光公此等尊賞，恩命甚秀于古今。緇林殊請仙洞第二宮一品親王爲高弟，於戲盡善盡美，誠是非末法優鉢乎？歲既越上壽而遙也。佛祖統紀曰：人生難得者上壽也。注：上壽百歲，中壽八十，下壽六十。豈不謂之天縱之師乎？後陽院宸翰曰：天海佛家棟梁，天台高祖，想夫一家眉目貴勢聲譽，誰敢抗之乎哉？陳宣帝指智者曰：禪師佛法雄傑，時匠所宗，奇哉古今一舌，應時應物而已。抑海師遷化之後，聊不敗半跏趺坐，容貌如生，顏色莞爾，四日不奉沐浴，尊體嚴然而以就床，衆人競來而禮拜，舉聲悲嘆。凡江城下大小名士，皆是燒香弔慰，莫不催悲淚。家光公猶更追慕遷化容貌殊勝有餘，且復使畫工探幽膽寫焉。于時上使頻々競來，其命曰：允著精彩，宣傳惟肖，追慕之情孔躋矣。十月三日甲子，任海師遺告，早奉送三種靈寶於家光公。一先年奉授前唐院一箱也，蓋以唯授一人之箱，遷化後捧之。二鎮將夜叉本尊也。此本尊者遺于毘沙門堂之室，曩昔傳教大師授此本尊於桓武天皇，此故古來用勅封天下將軍家奉信仰此本尊矣。賴朝公者依慈鎮和尚仰相

承焉。今允匡此等來由，而奉于家光公者也。傳教大師付與于桓武天皇，本尊四軀，普賢延命者，妙法院室，熾盛光者，青蓮院室，七佛藥師者，梨本院室，鎮將夜叉者，毘沙門堂室，各祕之納之。就中傳教大師自書祕文於鎮將夜叉之扉，其旨趣言々微妙而永鑑末世。然今天海賜毘沙門堂室，相承此本尊，誠夫不可思議之宿緣也。今復再興毘沙門堂，然後安置鎮將夜叉本尊於彼室，誠夫身後之榮也。抑傳教大師奉授桓武天皇，維時十月三日，慈鎮和尚奉授賴朝公，維時十月三日。今日任海師遺告奉授家光公，復是十月三日。古今三傑同相承之日，希有之中，之希有也。三清水觀音腹心像也。以陶浮檀金而陶鑄也。此像者，昔越前朝倉某所持本尊也。朝倉有以久奉信清水觀音，其精誠也甚異于他。或夜蒙夢告，其語曰：汝家餘慶既盡，而今將絕，雖然以閣浮檀金觀音，祕在于清水觀音腹心，若奉迎此本體於渠家，未復三代必可緝熙，茲以奉招請，餘榮果覃于三代。然後夢告不誤，家運盡了矣。此本尊出于茲彰于彼，或一士奉此像，仍彼此角立而互訟，粵奉東照宮，鵝蚌相爭而漁者利乎。且復自東照宮賜海師，々々復授家光公。於戲宿善之所爲乎。十月四乙丑日，召公海盛，憲見海豪，覩於城中。于時以阿部豐後守忠秋有伴々上意，一日光山何處，土葬安體之地，二自東叡山赴于日光，路宿等次第。

三中陰之法事。四自他宗諷經燒香之義。五家光公血脈傳受既是海師之資也。然則中陰之忌精進等事可守七夕者乎。不遺思慮于胸次。宜是言上。各承台命。先退公而已。仍加細評。翌日奉返命。一安體之地者以繪圖入上覽。仍下命曰。爲末代用山可乎。此故定地於大黑山。二行路之次第者。攀東照宮例。自仙波可經佐野之地。三中陰法事者。於日光山而五七日。自六七日乃至七夕。東叡山遷化之地而可奉執行之。四自他宗諷經之義者。不隔自他。可任參向之次序。五大樹精進之義者。大人一日潔齋。奉倍于士庶人數日者乎。仰願莫久齋好。想夫齋戒之義。大人與小比丘等有差別者。全是非私言。宋文帝謂求那跋摩曰。孤愧身徇國事。雖欲齋戒不殺。安得如法也。跋摩曰。帝王與匹夫所修當異。帝王者但正其出言發令。使乎人神悅和。人神悅和。則風雨順。風雨順則萬物遂。其所生也。以此持齋。亦至矣。以此不殺德。亦大矣。何必輟半日之喰。全一禽之命。爲之修乎。帝撫机稱曰。俗迷遠理。僧滯近教。若公之言。真所謂天下之達道。可以論天人之際矣。出于輔教篇。所謂精進者何乎。止觀云。於法無染曰精。念々趣求爲進。想夫趣求之道。何局量偏淺乎。此故家光公匡師資之禮。中陰七夕之中。以初七日。而事潔齋。有以哉。抑中陰法事。檀度之賜。香積之資。悉是自公執行焉。十月五丙寅日。

逮昏鐘夕梵之時。初沐浴尊體。而奉入棺。維時以中根壹岐守正盛爲上使。燒香禮拜。次賴宣卿贈東照宮。頒賜伽羅。述入棺之香供養。同六日晴天辰刻。奉出東叡山。而入仙波道中。供養并忌中之警固。命正綱以俾執行。此台命攀東照宮供奉之例者也。尾州義直卿。紀伊賴宣卿。水戶賴房卿。藤堂大學頭高次。水谷伊勢守勝隆。秋元越中守富朝。各以英士一人。配道中供奉。諸大神足等。乃至隨逐之能所。一千餘人供奉。寺社奉行安藤右京進重長。松平出雲守勝隆。早入東叡山。奉門送尊棺。于時江城下道俗男女成群作隊。不用前呵之警。傍于棺櫛前後。哀聲不止。悲淚不乾。遠離江左。而欲到仙波。男女挾路無處。寸土之措足。或獻草花。或捧香水。禮拜恭敬。舉聲慟哭而已。村々久無相杵與巷歌之聲。仙波末山能所門徒等。加之。河越城主松平伊豆守信綱附臣二人。抽身于中路。俾掃除塵埃。此故行路鮮潔。恰如入仙境。同六丁卯日戌刻。奉遷尊棺於仙波喜多院。供奉緇侶并仙波末山能所皆是。出仕而修初夜勤行。例時彌陀經并勤講。問讀誦。同七日戊辰。修法華懺法講。問爲後夜勤行。同卯刻晴。天奉出仙波。移世良田長樂寺。仍上陽一國能所雲集。星馳奉燒香散華。欽盡禮拜敬。此地以阿部豐後守忠秋津輕土佐守信義管內。各出家臣而加種々調護。初夜勤行者。例時切音錫杖講問。

等也。同八日己巳後夜以法華懺法等爲勤行。同辰刻出長樂寺。申刻而奉遷佐野春日岡。仍春日岡末寺并隣境能所來集。以奉恭敬供養。此地是井伊掃部頭直孝土井大炊頭利勝所領也。行路之灑掃諸餘締構不應勝計。初夜勤行如例。同九日庚午後夜勤行畢。卯刻奉出春日岡。入鹿沼藥王寺。此寺雖爲他門。以境內無他家末寺。故奉寄寓而已。併藥王寺末門相舉禮拜恭敬。且復悲歎啼泣。不隔自他宗。當地者阿部對馬守重次。井上河內守正利。管中。而道衢橋上等灑掃其他親切縷々條々。初夜勤行如式。十日辛未晴。天卯刻奉出藥王寺。于時日光山道俗一千餘人迎來。鹿沼而奉拜尊棺。一千餘人一時慟哭。哀聲入雲而已。皆是失心氣迷途轍。哀情之甚如一時喪考妣。抑日光山者。勝道講師。神護景雲年間開闢。然後慈覺弘法爲中興主。然亦山中寂々未繁茂。今屬于海師一舉。建立東照宮。仍集天下高官公家武家之英傑。匪啻日域高家。異國官者亦來々去々。每因忌景以開大法筵。粵此山威名亦隨之高矣。山下道俗奉追慕海師道德者宜哉。同午刻奉移坐禪院。同亥刻奉遷妙道院釋迦堂。于時用種々妙寶。莊嚴堂宇。裁金銀錦繡以作珍華。且復覆金綾天蓋於棺上。備百味珍菓於靈前。華鬘寶幡。卽是華藏世界。顯理事無礙之法要矣。十日辛未十一日壬申三時勤行如式。

十二日癸酉後夜勤行畢。繙筵改式。別企法事。關東末山能化諷經。同於初夜修例時并六道講式法。十三日甲戌爲後夜之勤行。修法華懺法并光明供。導師法印定傳。妙道院住持。當午時勤法華讀誦。初夜時至修例時講問。十四日乙亥以此日當七日。修胎曼荼羅供。導師法印快倫。出仕繙侶五十口。維時爲上使吉良若狹守義冬登山。香奠賜白銀二千兩。次尾州義直卿。紀伊賴宣卿。香奠各五百兩。水戶賴房卿三百兩。以呈靈前。今暮爲二七日逮夜。例時作法畢。勤往生講式。十五日丙子以此日當二七日。讀誦大乘妙典。始經導師者法印廣海。仙波中住持。出仕衆僧五百口。十六日丁丑三時勤行如例。此日使五百人曳登石棺於大黑山廟所。仍諸末寺諷經。自此日天下大小名盡爲燒香寄使者。以海師遺誠堅辭諸方香奠。殊法事之資糧檀度之囑金。自公被執行之。仍使四來香奠。而峻拒者也。十七日戊寅三時勤行如例。覃于酉刻奉送尊容於大黑山。自妙道院至于大黑山。行程無間。敷筵道地布。廟所四面二重引白幕。諸大神足以公海爲上首。次隨逐碩學近習俗士。各事供奉。奉收斂于山上石窟。尊體與石窟間以水精。一字一石書。寫妙經全部。摺寫御經五十部。其他者以水銀朱鹽奉堅斂了矣。于時衆僧百餘人而行道奉讀誦法華懺法。行道之次。每當眞前。各燒香散華矣。抑十月朔日壬

戊夜虛空有音樂。山鳴谷答。始自山南至大黑山。天樂翕然。予怪此義。所以者何。若以非樂府誤爲樂府。恐使後昆之人惑者乎。雖然衆口不差。異口同舌。仍記而已。未定墓所於此山日。處處指地巧設畫圖。以奉于家光公。公自然指此大黑山爲墓所。仍台命與天樂。其表相也。如合符節。夫十八日己卯十九日庚辰二十日辛巳三時勤行如例。二十一日壬午後夜日中如例。三七日逮夜至于初夜。修施餓鬼供養。二十二日癸未當者水忌^{シヤス}執行論議。問題者。圓人觀無常否。講師法印實承^{賢聖院住持}。出仕碩德四十口。問答決擇自辰刻以覃于戌刻。二十三日甲申二十四日乙酉三時勤行如式。二十五日丙戌後夜日中如式。初夜例時畢。執行五種妙行。二十六日丁亥執行漸寫妙經供養。所以者何。大練忌者諸弟子等歸于東叡山遷化之地。粵探支六七日中有以勤之。而二十七日戊子三時勤行如常。二十八日己丑四七日逮夜。執行八講。二十九日庚寅當何況忌。有頓寫御經供養。導師者法印快倫。十一月朔辛卯三時勤行如常。此日帝都諸門主妙法院宮。梶井宮青蓮院宮。曼殊院宮等使僧。并山門五畿內諸衆燒香諷經。二日壬辰初值月忌之令辰。仍執行論議。問題者。理智成佛中以何爲正意乎。講師者法印定傳。出仕碩德五十口。山門關東碩學交座。各諍異議。問答往復自辰刻至于亥刻。

此日黃昏於仙波喜多院特修法事。初夜勤行丁寧反覆。各執行之。于時自明星水。捧龍燈於客殿南面杉之枝頭。道俗驚見各作禮拜。即時以疾走之步卒。注進此旨於日光山。諸人感激不止。天海師生前之昔。奉感得明星水靈光。右記仍不詳于茲。家光公慎月忌之初辰。一日事精進。爾來每月二日勤精進之義。三日癸巳四日甲午五日乙未六日丙申三時勤行皆如式。七日丁酉當小練忌。修金剛界曼荼羅供。導師者法印豪仙^{江戶崎不動院}。出仕衆僧五十口。且復五七日。家光公精進。此日江城下俘囚數十人東叡山而免許。京大坂長崎囚人亦百箇忌日內而可賜赦免之旨。早有台命。八日戊戌九日己亥三時勤行如常。十日庚子公海及晃海胤海豪倪堯海等歸于東叡山。且復要勤法事於遷化之道場。仍各參詣于大黑山安體之地。于時諸神足曰。此山佳絕異于他。只以無水爲不足而已。其他復何言乎。然後清水自然涌出。諸人感激而流。奇妙於諸方。十三日癸卯各歸著于東叡山。自十四日甲辰初夜護國院而始法事。爲初夜勤行。修光明真言祕法。衆僧唱切音錫杖。導師者法印生順^{護國院住持}。密供畢。有講問讀誦。十五日乙巳三時勤行如常。自此日自他宗諷經燒香。十六日丙午三時勤行如常。他門修學之輩各賦詞章。以述追悼之意。皆濕法衣而已。殊澤庵和尚調百味珍菓。誦祭文於

眞前次諷經燒香十七日丁未勤行如常爲燒香井伊掃部頭直孝酒井河內守忠清堀田加賀守正盛及餘大小名競來燒香弔慰十八日戊申三時勤行如常阿部豐後守忠秋阿部對馬守重次安藤右京進重長松平出雲守勝隆朽木民部少輔植綱中根壹岐守正盛燒香弔慰十九日己酉五岳僧錄南禪寺最岳和尚諷經仍述追悼偈并自大德寺妙心寺命使僧贈大乘妙典公卿雲客諸官員各見贈御經臨初夜爲小練忌逮夜東叡山末山能化并久住所化勤論議問題者止觀可說不可說也向問答而決擇二十日庚戌增上寺住持業譽并淨土宗上人等諷經燒香此日當七夕日仍修合行曼荼羅供導師者權僧正亮運寺住持出仕衆僧五十口此日復家光公精進併自天海遷化之日覃于盡七日止放鷹等事覃于同年臘月酒井讚岐守忠勝朝臣入東叡山初弔慰海師遷滅之地于時忘身而大慟哭夫忠勝者自父翁備後守忠利主武州河越城與海師有懇篤之異于他者且復粗聽台家法義於海師此故追悼遷化者甚矣遷化之日在帝都而不發慰問但就御即位之義在洛茲以愛惜有餘宜哉百箇日追善於日光山亦自公執行逮夜有論義問題者寶塔所居實報寂光中何乎當日執行法華讀誦衆僧三百餘口家光公思慕大師令有司造立影堂於日光東叡坂本之三所加旃

割公務稅賦永充于供料高抽師資之考標以重報恩謝德之義於戲千歲之榮道福賑衍

正保元甲申年十月二日丁巳當一周忌逮夜勤法華懺法當日修法華八講出仕衆僧五十口

同二乙酉年十月二日辛巳當第三回忌逮夜法事時開論席問題者前佛後佛自受用身爲一爲異乎當日東叡山住侶勤法華八講末山能所法華讀誦一周兩忌景皆自公賜資糧此日家光公爲燒香參詣東叡山影堂仍追憶海師發露涕泣香奠白銀二千兩次入御本院命公海曰遷化如昨今光陰易往而既逮三回忌其言之中復悲淚濕尊顏增哽塞諸人奉傳聞之長少共莫不濕袖白銀二千兩并小袖十重以賜公海次召出亮運晃海豪規宣祐亮盛憲海誥泰行海尊前而皆賜御服易經曰食舊德惟我祖種子前而某等小子食德於後矣誠夫海師遺餘光於子孫者偉哉家光公還御後尾州亞相義直卿紀州亞相賴宣卿水戶黃門賴房卿次大樹家臣等其他在府大小名士悉爲燒香參詣且復於日光山自公追善執行衆僧一千口爲行颯等配當之奉行松平右衛門大夫正綱登山矣同四丁亥年天海師遺弟宮一品親王尊敬初光臨于江左仍自家光公安藤右

京進重長吉良若狹守義冬、且復公海差豪倪、同奉迎宮、青蓮院二品親王尊純、倡之。同九月入于東叡山村、夕宿夕馳仰締構、不可勝記。同年公海以頭中將基福朝臣奏欸狀、奉請海師謚號。

慶安元戊子年閏正月十一日丁丑日光門跡一品親王尊敬、青蓮院二品親王尊純、毘沙門堂大僧正公海、登城侍家光公台顏。時蒙大師號勅許於天海師旨、吉良少將義冬朝臣欽達于上聞。家光公悅豫曰：世既雖淹于澆季、以海師道德鳴世、今蒙大師號、誠是天之所縱乎。仍動喜容、甚淋感淚。于時召出晃海胤海豪倪等、自述前件之事、以嘆美海師之德。殿中出仕縑素、隨喜之淚如袖貫玉。同四月十一日丙午有謚號勅使菅原爲庸朝臣、五條少納言謁大黑山廟前而作拜。然後奉讀宣命、以謚慈眼大師。于時公海晃海胤海幸海豪倪堯海寬海長海乃至隨逐能化四十餘口列于庭上。自公差并伊掃部頭直孝酒井讚岐守忠勝朝臣等、以俾見聞法筵之標相。抑本朝四大師之末智證之謚號以來七百二十二歲而賜此尊號、希代之稱美也。勅使退出之後、山門東關能所并諸門徒七千餘僧廟參、仍奉拜大師號勅使、隨喜感德濕却雙袖而已。此日諸大神足并蒙大師法恩、僧侶五十餘人、至于勅使旅館、各隨分以獻金銀衣服、欽奉報謝勅使也。

同四月十七日當東照宮三十三回忌、仍執行御八講。自同十三日本社而營之、抑於本朝宸筆御八講自法筵開闢以來十有四支也。東關而勤勅會御八講者、以此會爲權輿。十六日家光公登山、十七日祭禮、十八日當五卷日、勅使院使、新院使、女院使、并公卿著座、山門三井諸門跡、次衆僧出仕。然後家光公著座、出仕公卿諸役人持捧物打枝、與衆僧齊勤大道。行道畢、御八講五座執行。證義一品法親王尊敬講師晃海、讀師豪倪、問者堯憲。此日於東照宮本地藥師堂、轉讀新板一切經。始經導師者權僧正傳海、日光山學頭修學院也出仕僧伽百二十口。抑此一切經者、寬永十四年丁丑三月十七日、慈眼大師命林氏幸宿華溪居士、以俾開板。既十二年而遂其功。仍今日初俾轉讀。誠夫得時者乎。本朝而開板藏經古來闢焉。先是兩三輩雖催開板、其功不曾成就。曩昔駿府而有奉訴與開板之義於東照宮者、仍台命曰：法寶之至、復何有若之者乎。吾國之希有也。仍甚愜于上聞。此故東照宮命楮國於有司、以賜開板者。雖然、以大藏海之茫洋、空望岸退而已。今板行成就、仍遂轉讀於三十三回忌。抑開板之義、曩昔既愜于東照宮尊聽。今日追善冥福、何不愜于素聞乎。十九日於本地堂修庭儀、曼茶羅供。導師者公海。勅使并諸門跡、次衆僧四十口出仕。家光公著座。此日本社而成、就前日不轉讀

盡一切經。始經導師者權僧正等譽。比叡山惠心院。衆僧百二十口矣。二十日家光公參詣慈眼大師廟。仍讀誦法華懺法。導師者尊敬法親王。證誠大僧正公海。次衆僧二十口出仕。家光公先年參詣者大權現追善法事畢。即時回高駕。今欲參詣大師廟。一日淹留。追慕之甚。闔衆奉感激而去。慶安元年賜追謚於大師。一宗相舉奉歡悰矣。粵爲謝天恩奉台命遺弟宮日光門主一品親王尊敬毗沙門堂門跡大僧正公海。次門人等出東叡山。趣于帝都。維時慶安二己丑七月十三日庚午也。同八月二十一日戊申遂參內奉賀表矣。

右慈眼大師傳記者大神足公海乃至晃海豪倪等居常所睇仰。加焉滿山台徒口是碑也。于時晃海豪倪二老宿命現龍之院主謀奏筆之於草書。且復使野衲俱共考寫。野衲者是他門也。何敢入此席乎。雖然先是。有以屢入大師室。大蒙淑惠。粵竊見道貌之有雄毅。此故不疑師之臨終。并信靈驗等事而已。仍筆之了矣。

慶安三年八月二日

花園帝藍宇前再住賜紫比丘東源謹記。

東叡山慈眼大師傳記○慈眼大師全集收。

寺院起立轉

移事蹟

西照寺

是年

元〇寬永廿年(紀)〇三〇三年

寺院ノ起立轉移シタル者有リ。

上。〇文政寺社書。上。府内誌殘編。

寺院起立轉移

寬永廿年中寺院ノ起立轉移シタル者有リ。

西照寺 芝三町目裏濱ニ移ル。

相州鎌倉郡山田村德翁寺末

曹洞宗 普明山 西照寺

略。上慶長十七壬子年芝金杉壹町目ニ拜領地被下。引移り三十年餘罷在。寬

永廿癸未年金杉出火ニ付寺類燒仕。其節亦御用地ニ被召上。同芝三町目之裏

濱計ニ多。本屋敷半分拜領地被下。地狹く寺再興難成故。度々御訴訟申上。以處

御次手之時。重可被下旨被仰聞。延々ニ罷成。略。下。——文政寺社書上

梅窓院 青山幸成寬永廿年ヲ以テ卒スルヤ。同家ハ其下屋敷内茶毗ノ地ニ本

寺ヲ創スト傳フ。

京都知恩院末

淨土宗 青山久保町 長青山寶樹寺梅窓院

一、境内青山大膳亮殿下屋敷内寄附地。東西七拾間餘。南北百八拾貳間。惣坪數

壹萬三千貳百四拾七坪。

一、開基青山大藏大輔幸成法名梅窓院殿香譽淨薰大禪定門。寬永二十年癸未

二月十六日卒。下屋敷内於茶毗之地。一字建立被致。以依之。増上寺中興觀智國

市街恢弘時代

師開山ニ被相定シ。住職老峯譽壽傳第二世ニ居シ。其後紀州大智寺ニ移轉。

——文政寺社書上

永昌寺 牛込笹筒町ヨリ原町ニ移ル。

房州本郡本織村延命寺末

禪曹洞宗

天壽山 永昌寺

一、拙寺境内牛込榎町濟松寺領古跡御年貢地坪數貳百六十坪、表間口拾壹間餘、裏行貳拾七間餘御座シ。

一、拙寺起立寛永九壬申年牛込御笹筒町ニ起立仕、其後寛永二十癸未年當所ニ引移開基ハ御天守番坂尾八左衛門建立仕、當曆文政十丁亥年迄百九十五年ニ相成申シ。尤開基仕ハ譯合相知不申シ。右八左衛門子孫、只今坂尾百次郎ニ申シ。往所ハ下谷中御徒町飯野又三郎方ニ同居仕シ。尤當時小普請也。

——文政寺社書上

常立寺 開山寛永廿年ヲ以テ寂ス。

下總國平賀本土寺末

牛込原町

蓮宗 長久山 常立寺

一、境内古跡御除地五十六坪七合、御年貢地四百七拾四坪、持添御年貢地坪數千六百拾七坪。古跡御除地五十六坪七合。御年貢地四百七拾四坪。持添御年貢地坪數千六百拾七坪。表間口貳拾七間。裏行六十八間四尺。地尻貳間半。

藥王寺

一、開山常立院日久寛永廿未年五月二十九日死去。

一、俗性相知不申シ。

——文政寺社書上

藥王寺 起立ノ年月ヲ知ラズ。改撰江戸志開山寂年ヲ寛永二十年ト爲ス。

東叡山末

三之輪町

東光山長命院藥王寺

境内年貢地百五拾八坪。除地八百貳拾三坪壹合。

起立年代相知不申シ。當寺ハ台家之舊跡ニ多、藥師之別當ニ御座シ處、本寺未定ニ付、延寶二年六月東叡山御直末ニ被仰付シ。○中略。

藥師堂 方三間。○中略。

地藏堂 三間。奥行三間半。

地藏尊石立像 左右之脇ニ正保四年亥十一月七日權大僧都西性慎白と彫付有之。

右地藏尊ハ背向之地藏と相唱申シ。昔地藏尊前通りハ奥州街道之由、其後道筋相替り、地藏背通箕輪町ニ相成シニ付、背向地藏と申シ由御座シ。○圖

以上丙戌書上

○開山天海僧正寛永二十年十月一日寂。改撰江戸志。

市街恢弘時代

因速寺

○境内、徳治年中の斷碑あり。
因速寺 寛永廿年深川黒江町代地ニ移ル。

——續府内備考

東本願寺末
江戸深川黒江町代地
浄土眞宗 大護山光照院因速寺

一、古跡御除地境内三百拾坪。間口拾間半。奥行貳拾間半。奥西南之角、貳間ニ四間貳尺之地所張出有之。

右、古來西之方北川町通りへ門道敷有之由、其後南之方當時之場所へ門道付替ニ相成申由旨申傳ニ付、古來之殘地ニも有之由哉、委細之譯年月等相知不申、前書坪數間數を以書上來申由。

外ニ、
借地三拾八坪。東西幅貳間。南北長拾九間。

右、境内狹少ニ付、隣寺万徳院境内之内西之方書面之坪數借地之儀、明和八卯年寺社御奉行牧野越中守殿願濟ニ御座由。

一、當寺起立之儀を、開基定玄來常陸ニ有之、其後大坂ニ罷在、元和年中江戸表引移起立仕由。右江戸表最初建立之地所并年代等、數度之類燒ニる相知

不申、京橋竹町邊ニ申傳由。其後寛永六巳年以來木挽町八町堀材木町ニ移、寺地拜領被仰付由。

本文之通り寺記ニ有之由得共、三ヶ所地名之場所、追々轉地仕由歟、又右場所邊之内ニ罷在由哉、委細之儀を相分り不申由。

台徳院様々大護山々山號賜り由申傳由。右地所ニ十五ヶ年之間居住仕、同貳十年就御用被召上、爲替地、當時之地所拜領被仰付由。

右延寶七年之書面ニ有之由事。

成覺寺 淨順寺

一、地中

右兩寺之開基を、拙寺開祖定玄之臣下之由、一ヶ寺を寛永年中迄有之、一ヶ寺を慶安年中迄有之由、當時を無之由。此外寮舎も有之由得共、當時作事無御座由。

——文政寺社書上

因速寺 黒江町代地ニアリ。大護山光照院ト號ス。京本願寺末ナリ。元和年中京橋ニ起立シ、其後寛永六年木挽町ニ移リシカ、其地ハ同二十年御用地トナリ、今ノ地ニ移サル。開基ヲ定玄ト云フ。寂年詳ナラス。本尊彌陀ヲ安ス。惠心ノ作ナリ。境内除地三百十坪、外ニ萬徳院境内ヲ三十八坪借地セリ。

略。中

支院

成覺寺

今廢ス。下同シ。

淨順寺

— 府内誌殘編

萬德院

萬德院 八町堀材木町ヨリ深川奥川町ニ移ル。

本寺深川永代寺末
深川奥川町
古義眞言宗 瑠璃光山萬德院

一、境内御除地四百貳拾五坪。

但南表間口拾壹間三尺八寸七分。北裏幅拾九間。東裏行拾八間貳尺五寸。西裏行貳拾五間三尺。

右之内間口貳間奥行拾九間。此坪三十八坪之處。明和八年寺社御奉行牧野越中守様之願濟之上隣寺因速寺之十年季ニ貸置申シ。

一、當寺之儀之寛永六巳年八丁堀材木町ニ起立。同二十未年迄同所ニ罷在。所同年寺地被召上。其刻御奉行所之奉願上。源川新田島只今之地所ニ御除地拜領仕。 — 文政寺社書上

万徳院 奥川町ニアリ。瑠璃光山ト號ス。當所永代寺末ナリ。當寺ハ寛永六年八町堀ニ創建シ。同二十年御用地トナリ。今ノ地ニ移轉ス。開山ヲ頼圓ト云フ。慶安二年九月二十一日寂ス。本尊藥師ヲ安シ。左右ニ如意輪觀音弘法ノ像ヲ置ク。境内四百二十五坪除地ナリ。 — 府内誌殘編

市街ノ轉移若クハ改劃シタル者有リ。

○文政町方書
上。府内誌殘編。

市街轉移改劃

市街轉移改劃 左ニ舉ク。

牛込永昌寺門前 牛込御筆筒町ヨリ轉移ス。

牛込永昌寺門前

一、門前起立之儀。當所之往古下戸塚村之内柵原ヲ申傳。場所ニ有之。此處。右永昌寺牛込御筆筒町ヲ寛永二十未年當所ニ引移。右寺地之内門前町家ニ起立致シ。ニ付。永昌寺門前ヲ相唱申。右起立之儀相分。不申。得共。御筆筒町ニ罷在。節々有來。趣申傳。尤以前寺社御奉行御支配ニ御座。此處。延享二丑年中町方御支配ニ相成申。

一、武州豐島郡野方領之内ニ有。正保三戊年十二月濟松寺領ニ相成。當時同寺領年貢地ニ御座。

市街恢弘時代

一、檢地之儀也、元祿十五年十一月、中今井九郎左衛門様御手代出水臺右衛門殿、伊奈半左衛門様手代山田與五兵衛殿御繩入ニ御座シ。

——文政町方書上

淺草仲町
及番屋鋪
淺草西
仲町

淺草仲町及番屋鋪 寛永廿年町割ヲ改メ、町名ヲ立ツ。

淺草西仲町

一、町名之起シ、譯草分人之名、町地ニ相成シ、年代引地代地築立地之分、往古村方ニ有之、以節之申傳。此段西仲町之儀也、淺草寺領ニ有、年貢地ニ有之、御傳馬役人足地頭淺草寺ニ相勤來シ。右町往古ニ中畑ト唱シ、所、寛永二十年四月十五日町割直シ、御檢地有之、仲町ト唱、萬治二亥年十月中御奉行神尾備前守様勝。村越長門守様勝。御勤役之節、町方御支配ニ相成、其後寛文五丑年五月中、東仲町西仲町ト相分リ申シ由。

淺草東仲町

一、往古老代々百性町屋ニ有、東仲畑村ト申傳シ。其後寛永貳拾未年四月十五日割直シ、御檢地有之、仲町ト唱、萬治二亥年十月中、町御奉行神尾備前守様、村越長門守様御勤役之節、町方御支配ニ相成、其後寛文丑年五月中、東

淺草東
仲町

仲町ト相分リシ由申傳シ。

淺草寺裏門先番屋鋪

右番屋敷之儀也、寛永貳拾未年四月十五日、東仲町町割有之、以節、割殘地ニ有之、以裏門廣小路角ニ有、此所、淺草寺カ木戸番人ニ相附シ、無年貢ニ有、町入用不差出、右ニ付地面淺草寺カ番人ニ預ケニ相成居申シ。

——文政寺社書上

淺草寺
裏門先
番屋鋪

東仲町 此所ハ、昔村民商家ヲ建中畑村ト唱ヘシカ、寛永二十年檢地町割アリテ、仲町ト改メ唱ヘ、寛文五年東西二町ニ別ル。町内五千五百二十三坪餘、北側ノ地ハモト淺草寺火除ナリシカ、後年商家ヲ建ル事ヲ許サル。淺草寺領ニシテ、萬治二年ヨリ町奉行ノ指揮ヲ奉ハルト云フ。町内廣小路常陸屋橫町、滿願寺長屋、杵屋橫町、惠比須長屋等ノ字アリ。

西仲町 此地市廓起立及ヒ東西分割ノ事ハ、東仲町ニ云ル如シ。南表間數百十間、北側ハ二區ニ別ル。都テ五十七間ナリ。

淺草寺裏門先番屋敷 此地ハ、寛永二十年仲町割ノ時、割殘ノ地ナリ。淺草寺裏門ノ入口ニアレハ、同寺ヨリ番人ヲ置、傍ニ商家一字ヲ建テ、其地ノ諸役ヲ

市街恢弘時代

免除ス。纔ニ十六坪ノ地ナリ。

——府内誌殘編

附記 邸宅給附

年月明カナラサレトモ、寛永中ノ給附ニ係ルト傳フル邸宅ノ二三ヲ舉グ。

戸澤氏

戸澤氏青山下屋敷 子爵戸澤家回答○新庄藩ニ

青山下屋敷

一、寛永ノ頃ヨリ下屋敷ナリ。古老覺書。

正保江戸圖、戸澤右京○政盛下ヤシキト記ス者是也。道ヲ隔テ西北、松平長門○利秀

因ニ政盛○戸澤上屋敷ハ、外櫻田ニ在ルコト、往古江戸繪圖正保江戸圖等ニ見

ユ。亦給賜ノ年月ヲ詳ニセズ。

松平眞次永田馬場邸 子爵大給家回答○龍岡藩ニ據レハ、

一、永田馬場今ノ永田町坪數不詳。

右ハ寛永年代祖先眞次○松平ノ時給リシト記録ニ記載スルモ、坪數等詳記

セズ。

往古江戸繪圖、松平○ぬい助眞次ト有ル者是也。

松平眞次
馬場永田邸

本多政勝
淺草茅町邸
下谷邸

本多政勝淺草茅町邸下谷邸 内、淺草茅町邸ハ正保江戸圖、本多内記○政下屋敷ト有ル者也。

淺草茅町并ニ下谷屋鋪

淺草茅町元米倉ト川ヲ隔テ南方ヘ隣リタル今ノ下谷邊ニシテ今ノ西町ノ二

屋鋪地ヲ、寛永年間本多内記政勝拜領シ、同十七辰年之レニ家屋ヲ造營シ、

慶安二丑年政勝カ長男八郎兵衛勝行別ニ和州ニ於テ四萬石ニ讓與ス。依テ茅町ヲ上

屋鋪トシ、下谷ヲ下屋鋪ト定メ、勝行茅町ニ居ル。○下略。

——子爵本多家回答○岡崎藩。

池田忠雄芝金杉邸 新添江戸之圖、松平相摸○池田光仲。忠雄子。ト記ス。

一下屋敷

一、芝金杉邸

坪數壹萬七千五百坪餘。

此邸ハ、寛永年中貳代忠雄○池田宮ノトキ、寄洲築出シ、邸地ニ構成シテ、

拜領シタルモノ、如クナレ、坪數年月共未詳。○下略。

——侯爵池田家回答○鳥取藩。

池田忠雄
芝金杉邸

忠雄寛永九年四月三日ヲ以テ卒ス。給賜ハ是ヨリ先ナルコト明カ也。下文記
ス所赤穂城主池田輝興之ニ居リ、後再ヒ因州池田家ノ有ニ歸セシ者是歟。
毛利氏久保町邸 毛利の志げに左ノ如ク見ユ。

末家一門並寄組領地邸宅表

領地邸宅	場所	廣袤又ハ 祿高	所有年	時代	沿革	現今推定地
長府 久保町邸	江戸新橋 筋久保町		寛永年間	毛利秀元 時代	慶安頃返 上歟	芝區琴平町二番地 眞田伯爵邸敷地

他士宅其

士宅其他 寛永中給與ニ係ル者若干ヲ舉グ。
守官 三右衛門。
○富永。

寛永年中、愛宕下三齋小路ニ多屋敷賜六百坪住宅仕シ。

正綱 三郎兵衛。

寛永年中被召出、三百俵被下置、御右筆相勤年月日不知、築地門跡脇ニ屋敷
拜領。

俊春 幼名不知、山本清雲。

寛永年中月日不知、横山町二丁目屋敷拜領仕シ。

山本
俊春

網正

富永

野間
正成

正成 藤市郎。
○野間。

寛永年中、知行所瀧野川村續飛鳥山御林高外置下置シ。

年月不知、小日向臺鼠坂御鷹部屋坪數九百九拾坪下屋敷ニ所持仕シ、様被
仰付之。
——寛政呈譜

正成 藤市郎。
○野間。

元和六年五月八日遺跡を繼御鷹師とふり、寛永二年十二月十一日采地の
御朱印を下され、新墾の田をあはせて二百七十石餘を知行し、そののち瀧
野川村につゞきし飛鳥山の林をたゞふ。
——寛政重修諸家譜

尾張徳川氏藏屋鋪

給賜ノ年代ヲ知ラズ。往古江戸繪圖承應江戸繪圖新添江戸之圖皆之ヲ載ス。

寛永中若クハ其以前ノ給賜ナル可キモ、今明カナラズ。姑ク此ニ附記ス。

尾張殿藏屋鋪蹟

寛永板江戸繪圖、木挽町紀伊殿藏屋敷の東隣ニ尾張大納言様御藏屋鋪と
載セ。正保圖ハ此邊謄寫の遺漏ありて詳ならず、寛永十年江戸繪圖ハ之
やうそりて、伊達宮内新庄宮内加々爪二郎右衛門、松崎權左衛門等の屋鋪

尾張
徳川氏
藏屋鋪

とぞ。是より前今の濱御殿脇の屋鋪を引うへ賜ひしと見へた。

——府内備考

紀伊徳川氏藏屋鋪

尾張徳川氏屋鋪ノ西隣ニ在リ。往古江戸繪圖以下之ヲ載セ、府内沿革圖書圖シテ文政十一年ニ至リ天保五年圖ニハ堀田相摸守ト有リ。

紀伊國橋本挽町一丁目

古へ々々紀州の藏屋敷ある故の名也。尾州の藏屋鋪も此所ありし。

——江戸紀聞

〔参考〕 寛永頃ノ大名下屋敷

一、御鳥見方々見廻り處、大名衆下屋敷かこいぬをりにて内見へすき
以所有之、其内にて雁を捕へいを見届此段朽木民部方ハ申達い。民部不
入儀を申出いと存い得共、申聞い上ハ難差置達上聞い處に、上意ハ右ハ
屋敷内にてい哉、左いハ被下い屋敷の事い間、何分之儀有之い共、屋敷
の内ハかまい無之い、か様の義ハ承いても不達上聞い様に被仰出、上意
の趣承之、難有義に奉存い。

——寛永小説

浅草文庫

醫員板坂ト齋○如ノ淺草文庫ヲ營ム、寛永中ニ在リト傳フ。寛文江戸圖淺草寺北門ヨリ富士社ニ至ル道ノ西側南ヨリ二軒目ニ板坂ト齋ト有ル者其處也。南ケンフクキン○賢福ニ隣リ、北ゲザウキン○花藏ニ隣ル。舊三枝本淺草寺山内檢地圖○貞享三、年後ノ者亦ト齋ト記ス。ト齋歿後兒孫之ニ住シタル者ナル可シ。浅草文庫址 本町○市内淺草區書上云、寛永中醫員板坂ト齋書庫ヲ町東ノ砂利場ニ創シ、倭漢ノ書籍ヲ藏メ、淺草文庫ト稱ス。明曆ノ初ト齋歿シ、書庫頽廢ス。尋テ一人姓氏未詳、又一庫ヲ淺草諏訪町西堀田氏邸内ニ建テ、倭漢ノ書ヲ收メ、是レヲモ亦淺草文庫ト云フ。

——東京府誌

十一月十二日○明曆元年、醫師板坂ト齋卒。名如春。淺草寺中醫王院ニ葬セ。林信篤砂利場の邊に文庫を建、和漢の書籍を收め、諸人に繙しむ。これを淺草文庫といふ。同し頃、淺草諏訪町の北裏に堀田加州侯の御下やしちあり。此内は大なる土藏を造りて、内ハ和漢の書數萬卷を貯へらる。世ハ淺草文庫と稱しるといへり。

——武江年表

淺草文庫印 辨疑書目、金澤文庫并足利學校の事を記せる條下ハ、山口本と江戸淺草の別莊ハ蓄る群書せる印として、既に丹波元簡が醫贖ハ、

板坂卜齋世爲名醫好蓄書居於淺草寺之北明曆元年十一月卒墓在竹門醫
王院林學士信篤銘とあり。今家藏の書籍は押しとるを摹寫して好古の人
は示は。如春が著書の中家へ傳ふるの鍼灸養生經寫本道春學士の跋あ
り。又關ヶ原日記あり。此書のこと。既に鈴屋翁の玉勝間にも見へき。又宋
板の編年互見圖後圓融院天皇永和二年に翻刻せし書偶遺るを得て再
板せり。此板本亡とあり。卷末に道慶眞榮等の跋あり。

鍼灸聚英跋

嘗觀人之生也以水土水土之失宜則疾病因焉古之聖人既剏草木之劑
調之矣。然又以爲草木効遲不若金火之功速也。此鍼灸之書所繇作也。茲
有鍼灸節要二書流傳於世久矣。儒醫板坂卜齋翁重錄而正之以珍其傳
焉。倘亦以金火襄水土之不及而起千百世之疲癯者乎。不佞偶過齋頭披
閱而有得于心。遂濡筆于左。以旌吾翁力古之功。明崇禎戊辰孟秋中浣十
九日虎林元贊謹題。

曆代帝王編年互見之圖跋

璞以下而出。劍自雷而顯。一物且然。況乎帝係者乎。編年之成於卜齋丈人
者。豈偶然哉。此圖乃有宋馬氏仲虎編集。刊行渡于日域。鈔諸梓者二百餘
祀矣。世遠人亡。其板泯焉。然而一篇幸存於禪室。其字蠹者什一。於是丈人
即抽悠久之志。旁求京師。僅得善本。參考互證。費俸刊鐫。試摺數卷。先獻君
長。次頌僚友。可謂忠義之至者也。走幸蒙丈人柔遠之仁。寒暑而賜裘葛。疾
病而饋藥餌。以保殘命矣。今也投我以一篇。其簡粲々。其墨淋々。某王之興
廢。某代之盛衰。始見目今。然則丈人非趨躋壽域於春臺。抑亦植綱紀於茲
世也。君臣父子。鑑此圖而懲感。儒士釋氏。覽茲書而多識。豈玉劍之爲比哉。
且道慶鴻儒。素結膠漆。又得醫術。忠告善道。相爲輔仁。暨圖既竣。應請爲跋。
乃是鳳屋麟趾。金聲玉振者也。丈人之於謙庵。斷金臭蘭。雲龍風虎。於此可
知也。夫謙庵天性剛直。智足以知人。明足以察理。自診察。至于終。污不至阿。
其所好也審矣。

寬永乙巳陽月上旬 朝鮮國江陽君苗裔李眞榮謹書于紀州。

浅草文庫



— 紀伊國名所圖會

浅草文庫址

浅草區田町壹丁目ニアリ。寛永中板坂卜齋町東砂利場ニ書庫ヲ營ミ、和漢書籍ヲ蒐集シ、浅草文庫ト稱ス。明曆ノ初卜齋没シ、書庫亦廢頽ス。後某氏アリ、一書庫ヲ浅草諏訪町西舊堀田氏倉邸地ニ建テ、亦浅草文庫ト稱ス。田町其廢撤年月詳ナラズ。明治七年甲戌七月倉廩中一部ヲ割キ、文部省所管湯島書籍館舊幕府昌平疊書籍ヲ此ニ移シ、内務省ニ屬シ、亦浅草文庫ト稱ス。東西凡壹町五拾間、南北凡壹町三拾間、面積凡五千七百七拾貳坪。同八年乙亥十一月之ヲ開キ、衆庶ノ就觀ヲ許ス。後其書籍ヲ博物館等ニ移シ、之ヲ廢ス。

— 東京通志

四日○萬治三年十二月。六郷伊賀守政勝こふまゝに、浅草別墅の側なる閑地を給ふ。

こは慶長の頃御眷注蒙りし板坂卜齋春孚といへるか宅地なりしとぞ。のト齋醫を業とせし。今も其印記せる書はたまく傳へしものあり。卜齋の碑は淺草醫王院に建て、其文林春齋春勝が撰し所也。

— 嚴有院殿御實紀

江戸紀聞ニハ、板坂卜齋屋敷、寛永江戸圖に浅草觀音の後に卜齋おりしと見ゆ。此比ハ名高き人と見へし。尤學者にて世の人たまねくある所あり。ト見ユ。卜齋ハ諸書左ノ如ク記ス。

板坂卜齋初稱如春。其先世爲御醫。至父宗商、往甲斐、倚武田氏。武田氏亡、乃仕神祖。如春幼喪父。神祖哀之、命意安吉。宗恂吉。宗虎一。宗伯施藥院。等共教導之。及長襲父稱卜齋。給事駿府。神祖晩節、尤留心於濟生。據和劑局方、製良藥、以賜諸臣。卜齋每與其事。和歌山侯○徳川頼宣。初就國、命爲待醫。居有年。從世子遷于江戸。嚴廟少時、屢服其藥、每有効。後乞老退居浅草。治圃多植藥物。又喜聚方論。牙籤累積。日以灌圃抄方爲事。時出訪山翁溪友之疾。蕭然有物外之思。年七十八得病、自知不痊。乃謁紀侯、告別而反。尋卒。卜齋藏書、每部有浅草文庫印記。世至今

珍之。

板坂意齋

——皇國名醫傳

本朝通紀曰、天正元年夏四月武田信玄卒去。先是六年甲州大醫板坂法印診信玄之脈曰、君二三年後必有膈病、我思之醫療已絕、慎莫長增。信玄固信、板坂之醫驗、故恒加養保、然無驗、稍發病云、意齋名如春、稱卜齋、或呼卜菴。本甲州武田臣、則法印之後也。仕大神君爲侍醫、甚被親近。後從賴宣君子紀州、所著有神君起居注數種。又嘗校刻宋人馬仲虎編年互見圖行于世。永田道慶、李真榮皆作跋。甲斐永田德本就意齋學醫術云。

按板坂宗德以累世醫業仕足利家。意齋乃宗德之庶流。則其業有所傳來。因以法印并意齋序宗德之後。或書曰、卜菴者大友宗麟之臣、善醫。天正十二年渡明、又曰、卜齋未知孰是。

那波活所鍼灸聚英跋曰、鍼灸聚英及節用二書、昔渡而今否、又本邦未有鈔板者、繇是世罕刻本。竹田蒿菴偶藏焉、吾老友板坂卜齋好古之志不已、繕寫以傳家、此豈一家之寶而已哉、擴而及之天下之寶人也。其勤哉、多紀樂蔭醫贖曰、板坂卜齋手抄鍼灸聚英四卷、有那波道圓及陳元贊跋、皆真蹟、卷末有淺草文庫

印記、卜齋名如春、世爲名醫、好蓄書、居於淺草寺之北、明曆元年十一月卒、墓在竹門醫王院、林學士信篤銘、予近購此書於一書舖、因其六世孫宗悅來乞之、懇篤、遂與之歸于其家。今陳氏跋曰、嘗觀人之生也、以水土、水土之失宜、則疾病因焉、古之聖人既剋草木之劑、調之矣、然又以爲草木効遲、不若金火之功速也、此鍼灸之書、所繇作也、茲有鍼灸節用二書、流傳於世久矣、儒醫板坂卜齋翁重錄而正之、以珍其傳焉、倘亦以金火、襄水土之不及、而起千百世之疲癯者乎、不佞偶過齋頭、披閱而有得于心、遂濡筆于左、以旌吾翁力世之義。明崇禎戊寅孟秋、中浣十九日、虎林元贊謹題。

按、崇禎戊寅者本邦寬永十五年也。

——日本醫譜

板坂卜齋墓 高四尺五寸、幅壹尺貳寸、正面銘板坂如春先生、右ノ方銘明曆元乙亥年十一月十二日。

板坂卜齋墓銘 卜齋の墓の西に在、高四尺三寸、幅壹尺貳寸。

板坂卜齋如春叟碑銘

夫神僊可以學得不死、可以力致、然知言者曰、稟之自然、非積學所能致也。其然耶、非耶、品物之衆、不得天地之養、則不能生矣。甘雨膏澤之惠、克遂其成長、

是其自然者也。栽者培之，危者扶之，是其贊化育而以力致者也。人之生，願養其精神，得遐壽者，是其自然者也。節飲食，嘗湯液，而全形體者，是其加保齋而以力致者也。不學則豈知其道哉？神仙之術，不死之方，豈其遠乎哉？近在一身學力之間而已。夫地之養品物，人之養一身，其理何以異哉？故曰：良醫知天地之次，明性命數也。老醫板坂卜齋如春，叟者衛生家之良也。其先宗頓，其次宗德，住於江州坂本。宗德之子曰維順，遷于洛陽。鴻術之業，達于都鄙。叙法印位。後到越中國，罹兵革而沒。其子曰備後，入道。其子宗慶，繩祖之武，聲譽聞于世。叙法印位，號僥倖軒。曾應武田信玄之招，自洛赴甲陽。眷遇大渥。東照大神君○德川家康亦聞其名，賜書謝饋藥。靈陽院義昭及北條氏政能知其技。宗慶子曰宗裔，幼而伶俐，爲僧住南禪寺東禪院。依信玄之言，往甲陽，還俗爲醫，號卜齋。天正小田原之役，從神君。其後賜宅地，居江府，頗恩顧。叟者其子也。天正戊寅，生于甲州。母關口常菴女也。幼名長太郎，號如春。別稱東赤。後追父之稱，而又號卜齋。幼而喪父，然悉受家傳秘法。天正辛卯十四歲，奉拜大神君，而近仕台德院大相國公。○德川秀忠神君憐其孤立，命官醫意安宗恂施藥院一鷗，勸誘學習之事，每有行旅及放鷹之遊，無不扈從也。慶長庚子關原之役，亦從其軍。神

板坂卜齋墓并碑拓本

東京市役所所藏

板坂卜齋墓，高四尺一寸，幅一尺二寸五分，厚一尺二寸三分。表ニ板坂如春先生，裏ニ明曆元乙未年十一月十二日卜刻ス。今東京府南葛飾郡平井村葛西川醫王院墓地ニ在リ。墓ニ並ヒテ碑在リ。高三尺六寸，幅一尺二寸五分，厚一尺二寸三分。四面ニ整字林信篤ノ撰文ヲ刻ス。

是其自然者也。設有持之危者，扶之是其贊化育，而以力致者，也。人之生，順養其精神，得運壽者，是其自然者也。節飲食，善湯液，而全形體者，是其加保養而力致者也。不學則豈知其道哉？神仙之術，不死之方，豈其遠乎哉？近在一身，學力之間而已。夫地之養品物，人之養一身，其理何以異哉？故曰：良醫知天地

文。陳云。之表，明性命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

只六，上，一，只，二，三，四，五，六，七，八，九，十，十一，十二，十三，十四，十五，十六，十七，十八，十九，二十，二十一，二十二，二十三，二十四，二十五，二十六，二十七，二十八，二十九，三十，三十一，三十二，三十三，三十四，三十五，三十六，三十七，三十八，三十九，四十，四十一，四十二，四十三，四十四，四十五，四十六，四十七，四十八，四十九，五十，五十一，五十二，五十三，五十四，五十五，五十六，五十七，五十八，五十九，六十，六十一，六十二，六十三，六十四，六十五，六十六，六十七，六十八，六十九，七十，七十一，七十二，七十三，七十四，七十五，七十六，七十七，七十八，七十九，八十，八十一，八十二，八十三，八十四，八十五，八十六，八十七，八十八，八十九，九十，九十一，九十二，九十三，九十四，九十五，九十六，九十七，九十八，九十九，一百

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

其神，明其性，命數也。其說取於下，齊如神。唯者，歸性於其。其先宗朝，其大宗

木如女秀之

明曆元年十一月十一日

取攻卜齋如表更碑銘

夫神德可以學得不死可以力致然則言者曰稟之自然非積學所能致也其然耶非耶品物之衆不得天地之養則不能生矣甘雨膏澤之惠見之於長是其自然者也哉者培之危者扶之是其養化育而以力致者也人之為生隨養其精神得壽壽者是其自然者也節飲食膏湯液而全形骸者是其加修養而以力致者也夫天地之養品物人之養一身其理何以異哉故曰良醫知天地之次明性命之數也老醫被城下齋如春更者衛生家之良也其先宗頌其受宗德位於江州坂本宗德之子曰維順遷平洛陽與術之業遂于那詠故亦即位後到越中國惟兵革而洗其子曰備後人遂其子宗慶繩祖之武聲譽于世叙法相位稱侯佐軒

東照大神君亦聞其名賜書謝鏡藥靈陽院義昭及此俗氏政能知其技宗慶有子曰宗尚幼而伶俐為僧住南禪寺東禪院信玄之言往甲陽還俗為醫編卜齋天正小田原之後從神君其後賜宅地居江府頗預恩顧更者其子也天正戊寅生于甲州母閑口常菴女也幼名長大即稱如春別稱東亦後追父之稱而又稱卜齋幼而喪父然悉受家傳秘石天正辛卯十四歲奉拜

大神君而近仕 台德院大相國公 神君憐其孤立命官醫意宗恂施藥院一鷗功誘學習之事每有行旅及放鷹之遊無不扈從也慶長庚午關原之役亦從其軍 神君讓國家子 台德院之後在駿府日日夜夜勤勞不辭或列伴食或談易其詞秘樂其來與種平異域更無不預之其後於台德院相預宣御覽永庚午應相之旨從台德院黃門

尤貞卿東來自此住居江府黃門女有病療其危急皆濟其功也 慶有院贈大相國公幼維之日奉 天獻院贈大相國公之命往診御脉望聽聲也其色蓬侯伯士林三折之勞十全之功不可枚舉晚年閑居草鞋老癯性雅樂自以為樂不為職階籍貫思于家澤明而乙未之冬臥病有知其死在也出謁紀陽亞相黃門及取將賴然而告別三君亦自往問病且賜金時服音問不絕作來年二月遂沒壽七十八受賜江州氏女有子其祖先稱曰宗慶然有院門生宮瀨意實其業未幾而死遺言以宗慶子宗春為嗣配其女宗春亦承其子長天即幼而繼家也我祖進山子與更相識五十年及聞訃流涕作詩悼之且我家飲之樂得快驗者效矣宗慶更相過百親身老容壯而知神仙有道也今依聲

卷亦抄而不知有方也使之於家業可謂能學能力者也去歲仲人正當二十五回忌辰舊門生宗春春事不堪哀其自來見家父私文院學士請作碑誌語而未果家父惟病今并仲夏芳華集各預詩余有惜嗚呼通家看好不可遺家父取約不可違故喪中雖久慶文筆感其志之切聊依其後歷而誌大繫係之以銘銘曰

三世之業 大其家聲 任而其優 駿府冷京 廷而有方 紀陽江城 金丹玉液 膏囊銀鑄 心符手應 方妙術精 性命之理 輔養有成 壽域悠長 神氣和平 進而育物 退則觀生 形骸雖朽 猶有餘情 延寶八年庚申仲冬十二日 盤字美林繪直民誌

君讓國家于台德公之後，在駿府。叟日夜陪從，勤勞不少。或列伴食，或獻湯藥。其調秘藥，其求藥種于異域，叟無不預之。其後依命仕紀陽亞相賴宣卿。○德川寬永庚午，應亞相之旨，從令嗣黃門光貞卿東來。自此住居江府，黃門每有病療，其危急皆得良効也。嚴有院贈大相國公。○德川家綱幼穉之日，奉大猷院贈大相國公。○德川家光之命，往往診御脈，望聽聲色。其名達侯伯士林。三折之勞，十全之功，不可枚舉。晚年閑居淺草，養老養性，種藥自以爲樂。多藏醫籍，覃思于家業。明曆乙未之冬，臥病，自知其死在近，出謁紀陽亞相。○德川家賴宣黃門。○德川家光貞及少將賴純而告別。三君亦自往問病，且賜黃金時服，音問不絕。仲冬十二日，遂沒。壽七十八。叟娶江川氏女，有子。慕祖先號曰宗慶。然有故養門生宮瀨意齋授，姓續其業，未幾而死。遺言以宗慶子宗春爲嗣，配其女。宗春亦尋死。其子長太郎，幻繼家也。我祖羅山子與叟相識，五十年。及聞訃，流涕作詩悼之。且我家飲叟之藥，得快驗者數矣。未成童與叟相遇，面視身老容壯，而知神仙有道也。今依聲譽不朽，而不知不死有方也。叟之於家業，可謂能學能力者也。夫去歲仲冬，正當二十五回忌辰。舊門生安田春皐，不堪哀慕，自來見家父弘文院學士。○林請作碑誌。諾而未果。家父罹病，今年仲夏易簣。春皐今猶請余弗措，嗚呼。

通家舊好不可遺。家父取約不可違。故喪中雖久廢文筆。感其志之切。聊依其履歷。而記大槩。係之以銘。銘曰、

三世之業。大其家聲。仕而其優。駿府洛京。遊而有方。紀陽江城。金丹玉液。青囊銀鑑。心符手應。方妙術精。性命之理。輔養有成。壽域悠久。神氣和平。追而育物。退則觀生。形骸雖朽。猶有餘情。

延寶八年庚申仲冬十二日

整宇主人林憲直民誌

板坂卜元之墓 碑高三尺六寸五分。正面銘十如覺直居士靈位。左銘板坂卜元。初名松年。享年五十。右銘元祿三庚午年八月九日。

○按スルニ板坂卜齋墓及村葛西川醫王院墓地ニ在リ。

——淺草寺志○寺中醫院ノ條。

板坂卜齋墓 醫王院○市内淺草區ニ在リ。卜齋小字ハ長太郎。如春卜號シ。別ニ東赤卜稱ス。後チ父ノ稱ヲ襲キト齋卜號ス。甲斐人。醫ヲ以テ聞ユ。明曆元年乙未歿ス。事蹟ハ皇國名醫傳林憲撰碑文ニ詳ナリ。——東京府誌

市街拓開

寛永中拓開市街ヲ舉グ。

神田須田町 寛永中來リ住シタル者有リ。

市街拓開

神田須田

湯島壹町目略○中

町家持三右衛門事 津輕屋。地廻り米間屋 三

平

右三平先祖之儀也。本國三州刈谷ニ多。本性小栗と申。氏ハ狩谷と申。寛永年中御當地ニ罷出。神田須田町ニ住居致シ。商家ニ多。四代右町ニ罷在。正徳元卯年五月中。町内壹町目○湯島。地面買求め。其節々居付家持ニ多。津輕越中守様ニ年來御出入仕。御藏元相勤。右正徳之度々七代ニ多。家名義右御屋敷。拜領仕。當時連綿と相續仕罷在。尤珍器古書畫等。度々類焼ニ付所持不仕ハ。

——文政町方書上

佐久間町壹町目 寛永中來住者。

佐久間町壹町目略○中

家持 森川五郎右衛門

右先祖五郎右衛門儀ハ。攝津國郡不知伏見出生ニテ御座。所御當地御繁榮ニ付。寛永年中罷出。當町ニ住居仕。其砌々材木商賣相始。追々手廣く相成○下。

——府内備考

通新石町 寛永中赤坂ヨリ移ルト云フ。

市街恢弘時代

町

佐久間町壹町目

通新

石町

通新石町 此町ハモト赤坂邊ニアリ、寛永年中此ニ移サル。東横町ヲ里俗馬ノ鞍横町ト云。
——東京府志料

〔参考〕 參考落穂集ニ、

篠崎三郎兵衛と云浪人、享保の初〇脱十歳計成しか、語多云く、我等古主此家ヨ育ハ幼少の節、今此木挽丁森田勘彌々芝居後の方悉く原の汐入よて、夏此頃諸人彼所よそざしり、淡釣る事、昨日今日の事ニ多ハしか、見る内大小名の屋敷立ハきハと、云々。

通町筋も大猷公御代までハ、今尾張丁ハいふ町の東片側ハ汐入よて、ぞぶくと浪打寄ハと、云々。

赤坂一ツ木町 文政町方書上ニ、

赤坂一ツ木町略〇中

一、舊家

家號大和屋ハ相唱申ハ。

彌持 右 衛 門

先祖之儀ハ吉田氏ニ多、相州小田原出生ニ有之、御當地一ツ木村ハ罷越、百姓致罷在ハ處、寛永年中ハ青物商賣仕、當彌右衛門迄相續仕ハ。尤地所之儀ハ、御年貢地ニ御座ハニ付、元祿年中御地頭所ハ年寄役被仰付ハニ付、只今

以右役相勤罷在ハ、右年月等書留之儀ハ、文化元酉年六月廿六日出火之節類焼仕、其後度々之類焼ニ多、書物焼失仕、年代相分不申ハ。

一、舊家

家號和泉屋ハ相唱申ハ。

持一 郎 右 衛 門

右先祖之儀ハ松下氏ニ多、往古ハ一ツ木村ニ罷在ハ由、然所寛永年中ハ松平安藝守様ハ御出入諸事御用向相勤、當一郎右衛門迄七代血脈相續仕ハ。尤御年貢地ニ御座ハニ付、元祿年中御地頭所ハ年寄役被仰付、只今以右役相勤罷在ハ。右年月等書留之儀、文化元酉年六月廿六日出火之節類焼仕、其後度々之類焼ニ多、書物等焼失仕、年代相分不申ハ。

一、舊家

家號若松屋ハ相唱申ハ。

權持 八

右先祖中島氏ハ申傳、寛永年中ハ太郎兵衛ト申者一ツ木町ニ住居仕、元祿十三辰年十一月十八日病死仕、夫より當權八迄八代ニ相成、几年代貳百年程相續仕ハ。

市谷清内屋敷 文政町方書上云フ、

市谷清内屋敷

一、町内北方ニ有之、植木屋長助拜借地之儀ハ、寛永年中御役名不知、伏見豊

市街恢弘時代

市清内屋敷

赤坂一ツ木町

牛込
肴町

前守様御組屋敷上り地之由。略。中

牛込肴町 肴町ノ稱寛永頃ノ事ニ係ルト云フ。

牛込肴町

一、町方起立之儀を、年古キ義ニ多、書留等無之、相分り不申以得共、往古武州豊嶋郡野方領牛込村之内ニ有之、其後町屋ニ相成、御入國之砌、牛込七ヶ村之者共武州川村崎と申所迄御迎ニ罷出、由申傳、其頃ハ兵庫町と相唱、肴屋共住居仕、町屋ニ御座、大猷院様御代御成之都度、御肴奉獻上、仍之向後肴町と相改、酒井讚岐守様忠被仰渡、二付、夫々町名肴町と相唱申、嚴有院様御代酒井讚岐守様御屋敷初多被爲成、節、當町御金被下置、町内破損修復仕、趣、此又申傳、略。中

——文政町方書上

泉藏
院門前

泉藏院門前牛

寛永頃ノ起立ナリト傳フ。

泉藏院門前牛

一、右門前町屋起立之義を、寛永之頃之由、門前町願濟之年月相知不申、略。中
一、里俗横寺町を唱、

牛込
代改

一、坂高凡拾間餘、幅貳間餘。

右坂之儀を、當門前を横寺町を登り、坂ニ多、里俗朝日坂を唱、是を當寺ニ慈覺大師作之由、朝日天満宮有之、依之朝日坂を相唱、由。

一、下水幅凡壹尺餘。

右を町内巽之方同所横寺町を相流、家前ニ有之、良之方正藏院門前を流落、流末を江戸川を落申、

——府内備考

牛込改代町 寛永中百姓居屋敷有リ。

牛込改代町

一、町方起立之儀を、寛永年中牛込村田畑内ニ百姓共居屋敷御座、略。中

——文政町方書上

中富
坂町

中富坂町石小 町屋鋪拜領者有リ。

中富坂町石小

一、百五拾四坪餘

御裏口門番同心與頭

中澤伴二郎

右寛永年中永井與左衛門拜領之處、其後右伴二郎拜領。

——府内備考

市街恢弘時代

關口水道町

寛永中ヨリ居住者有リ。

關口水道町略○中

名主 孫太郎

一、右先祖之儀を寛永年中頃、武州豊島郡關口村を申し節、横山茂右衛門を申し、其砌郷士ニ多住居致し、苗字名乗し哉、相分不申し。○下

府内備考

湯島天神門前

文政町方書上ニ、

湯島天神門前町略○中

家持 伏見屋兵衛

右長兵衛先祖之儀を、京都伏見を寛永年中御當地に罷出、質物渡世仕、其後元祿四未年十二月中、町内ニ多地所買求、是迄九代相續仕罷在し。度々類焼ニ多古書付古器物等焼失仕し。

本郷真光寺門前 寛永中ノ起立ト傳フ。

本郷真光寺門前

一、町名起立之年代相分り不申、凡寛永年中之頃を門前町家建來、本郷真光

寺門前を唱來し由申傳し、其頃を町奉行支配ニ多、書留等無御座、耽相分り不申し。

但、年季門前町家ニ多を無御座し。

文政町方書上

駒込片町

駒込片町 寛永中起立。

武州豊島郡駒込片町

右駒込片町之義を、往古駒込村ニ多、古代素盞鳥山を唱、一圓林ニ有之し所、日本武尊此林に駒を集めたまひ、木々ニ繫がせらましを尊御覽有りて駒ごみまりと勅のり有しより、いふは山を改多駒込林を相唱來りし由申傳し、其後此所田畑ニ致し、百姓之住居ニ相成しニ付、駒込村を相唱へ申し由、駒込片町之儀を、往古駒込宿を申、奥州海道中仙道之兩海道ニ多、當時里俗森川を相唱へし場所、其外駒込を申所、駒込村ニ多、右村一圓家持百姓八拾人餘ニ多所持仕罷在し處、慶長年中を寛永年中迄、追々田畑不殘御用地ニ被召上、御大名様御下屋敷武家屋敷寺領寺院等ニ被下置しニ付、右八拾人餘住居之地無御座、及竭命し間、先規を奥州海道中仙道此兩口を御早荷元仕、其上慶長年中奥州御陳之節、度々御城迄御狀早荷使仕し由緒申立、寛永

年中御公儀様之御訴訟奉申上_レ得_レ、御聞濟被_レ成下當時駒込片町を相唱
以地所被_レ爲殘置_レ以ニ付引移り、片側ニ住居仕_レ以様被_レ仰渡_レ以ニ付、右八拾人
餘之者移住仕、百姓町屋ニ多商賣仕、夫駒込片町を名付申_レ以。○中略。

一、追分

右之日本橋々一里之場所ニ多、日光御成道中仙道兩道ニ別_レ以場所故、里
俗追分を相唱申_レ以。尤江戸々本郷通り右之直夕道ハ日光御成道ニ多、往古
奥州海道之由ニ御座_レ以。當所々川口渡し場迄二里、當町ニ相懸り_レ以場所々、
本郷森川宿々移り、片町分十九間三尺相懸り、北之方駒込追分町之移り申
以。中仙道之義々、追分々左り之入_レ以海道ニ多、片町分七町二十八間四尺八
寸相懸り、北之方鷄聲ヶ窪之移り申_レ以。尤追分々板橋宿迄道法壹里八町程
御座_レ以。但、日光御成道當町ニ懸り_レ以場所、道幅四間、中仙道道幅平均三間四
尺七寸五分。

一、一里塚

町内持

是ハ日本橋々之一里塚ニ多、町内家持治兵衛地面内之挾り、貳間四方除地
ニ多、右場所往古奥州海道中仙道通り追分角ニ多、一里塚之印ニ榎植有之、

向側森川美濃守様御下屋敷内ニ榎有之、兩側ニ並_レ以有之_レ以由申傳_レ以。然
ル所右榎之儀、明和三戌年十一月中出火之節、燒失仕_レ以。右一里塚之内ニ庚
申塔、石ニ刻_レ文化五辰年六月再建_レ以彫付有之_レ以所、去々申年九月中出火
之砌類燒致し、石欠損し、文字相分り不申_レ以。右一里塚之起立年曆古來、之書
留等、度々之類燒ニ燒失仕、相知_レ不申_レ以。

名主町内 八左衛門

右之往古駒込村ニ罷在_レ以家持百姓八十人餘之内ニ多、草分人ニ有之、其砌
々名主役相勤、私代ニ多拾七代相續仕_レ以。且由緒之義々、宇都宮彌三郎朝綱
子孫之由ニ多、其後譯有之、苗字宇都宮ヲ改_レ山下々相唱_レ以由申傳_レ以得共、由
緒系圖古書物等、明和三戌年十一月中隣家々出火之砌、燒失仕_レ以由、是又申
傳_レ以。中興名主役ニ罷成_レ以先祖、寛永七年九月十日病死仕_レ以。戒名妙善比
丘。右石碑駒込鱧繩手長元寺ニ有之_レ以。右寺私先祖之開基寺ニ御座_レ以。

家持町内 三左衛門

右同所八十人餘之内ニ多、草分人ニ有之、其砌々年寄役當三左衛門養父代
迄相勤來り_レ以。且由緒之義々、小野篁子孫之由ニ多、中興先祖縫助代ニ故有

多苗字小野ヲ改岡田と相唱由申傳以得共由緒系圖古書物等明和二酉年三月丸山新町々出火之節燒失仕由申傳以右縫助義寬永廿一申年八月五日病死仕以戒名了善院縫譽助水居士右石碑駒込四軒寺町光源寺ニ有之也。

——文政町方書上

駒込千駄木町

駒込千駄木町 文政町方書上ヲ抄ス。

駒込千駄木町略○中

一、七面堂壹ヶ所 間口九尺。奥行九尺。

當町團子坂下往來々九尺程引込有之木像ニ多岩ニ乗座共丈ヶ三寸程厨子入。起立作人之名相分不申也。

厨子之内ニ奉開帳七面大明神久榮山十八世本知院日實々認有之外ニ寛政二庚戌年九月願主本淨院と認有之。

一、石碑 丈ヶ壹尺四寸。幅七寸。

七面大明神諸願成就と彫付有之。

右七前書七面堂前往來端ニ高サ三尺横壹尺三寸之小宮之内ニ有之。

一、石碑貳本 丈ヶ壹尺。幅五寸。

壹本七、七面大明神文政二年二月大岩氏と彫付有之。
壹本ハ、七面大明神と計彫付有之。

一、鳥居 貳つ。

棟木七尺五寸高サ六尺五寸、壹つ。

棟木四尺五寸高サ四尺、壹つ。○中略。

右七當町地主仁兵衛持ニ御座也。且仁兵衛所持仕以古書付壹通、年號相知不申以得共、左之通寫書カ、申也。

寛永年中、人王百十一代後光明院御宇頃、此邊ニ主ニ仕シ夏ト云賤女有懷妊ニ多此所於テ被害、嘔吐ノ恨ニ多成リ怨靈ト夜再々此邊出、見人失魂ヲ。今後七面大明神ト可奉崇祭ト祈誓成處、不思儀成哉、直ニ女之姿ト顯レ、告テ曰ク、是從後末世至迄、諸人之痛苦可キ救ト云、姿者忽去ケル。世之人智處也。

夏塚七面大明神

又南津山とも相認メ申也。

清水町○谷 府内備考ニ、

市街恢弘時代